

西別川

屈曲して海岸に至るも砂丘のために碍げられ、海岸に沿うて流るゝこと一軒半に及び標津に於て海に注ぐ。全長約八十七軒あり。

標津川以南にはトホロトビカラブ川・シニベツトコタン川等の相平行して海に朝せるものあるも、何れも細流たるに過ぎず。
西別川は源を摩周火山に發し、上流に二個の小湖水あり。楕圓形にして壁井に底は粗き浮石粒と富士岩の破片とにて成り、水は絶えず水底より噴出す。是より川は東南に流れシニアンベツ・ボンベツ等の極めて細流を合しそれより殆ど東流してホンオンネベツ・オンネベツの支流を容れ、河口に近くに從ひ、南折して更に東に向ひ、又東北に流れ別海に於て海に入る。川は全く浮石層の高原を流るゝ者にして、兩岸急に河口附近に於て小濕地を見るのみにして、沿岸概して乾燥地をなす。川の長さ約百二十軒あり。

風蓮川

風蓮川は根室郡西北の高原中の水を集めたるものにして、釧路の國境に至り釧路より流れ來れるノコベリベツを容れ、釧路の國境をなして流れ、更に釧路より來れるアネベツの小支流を合せ是より國境を離れ北北東に流れて河口に

三角洲を作り、風蓮沼に入る。河も亦西別川と同じく浮石層の地を流れ、兩側急なれども沿岸には濕地多くして河底には泥土甚だ深し。全長約九十軒を有す。其他風蓮沼に注ぐ河川は何れも細流にして、ペトッカ川は是等の中稍、著しきものなり。

標津川以北の河川を見るに、知床半島は一の山地にして、且つ分水嶺は其中央を走り、地勢峻峻なるため河川多くは瀧を伴ひ、絶壁の間を流れて直ちに海に朝す。就中主なるものは知床半島の頸部を流るゝチュウルイ川にして、源をサマツケヌブリの東北側に發し、多くの小支谷の水を合せ、瑠邊斯に於て東折しルベシユベカスシナイ・ウンベツ等の支流を容れ、猶ほ右側より來れるソーキツプカオマナイ・ソーケシマナイ等を合し平野に出で忠類に於て海に朝す。全長約三十三軒あり。其の他稍、著しきものはクシネベツ・サキベモイ川・ウエンベツ等なれども、何れも長さ二十軒に達せざる細流にして屢、瀧を伴ふ。

國內湖沼の著しきものは、海岸湖に屬するものにして、風蓮沼最も大なり。風蓮沼は風蓮川の砂丘のため其の流を遮ぎられ、これがために生じたる所謂

湖沼

瀉湖にして西北より東南に延び長さ約二十軒幅最も廣き所五軒に及び、面積約四十四平方軒を占む、水極めて淺くして、湖中にボンモシリ・ハルタモシリ・カイカラモシリ等の小砂嶼あり。沼の水は遠太トーバイエの二ヶ所にて海に通ず。其の他根室半島には小湖沼多く、其の頸部にあたりてはオンネトーの深く變入せるありて南北に長く四軒に及び、幅平均一軒を有す。尙ほオンネトーの東方にはチエブウシ沼あり。尙友知灣の北岸にはオンネトー・タンネトー・ナムブトー等の小瀉湖あり。

海岸

國の海岸は北海道本島の東岸の部分を占め、北部知床半島と高原地とに於て著しく相異なるを見る。即ち知床岬より以南植別に至るまでは、斷崖直に海に臨み、僅少の砂濱を見る能はざれども、植別以南伊茶仁イチヤニに至るまでは第三紀層地の海岸に狭き段階あり。伊茶仁の南に赴けば、高原地の一部は海岸に平行して、海より一里程距りたる所にて平原に急下し、其の下に砂濱あり。標津より以南春別に至るまでの地は高原の直ちに海に接するも、之より以南は砂濱の連なる所多し。然れども砂丘の發達は甚しからず。

此根室東岸に於て著しきは風蓮湖の瀉湖沼の部に於て述べたりと野付の砂嘴となす。野付の砂嘴は其の長さ約二十四軒を有し、鈎狀をなして屈曲し内側には淺き沼澤を控へて海水と交通す。此の砂嘴の生じたるは國後島と知床半島の間に於ける海流の働きにより、此の水道の海底に於て南北に走りたる砂の堆積を生じ、陸に接して成りしものなり。此の砂嘴は外側に向つては極めて平滑にして内側に向つては肢節に富み、砂嘴の標式的形相を有するものなり。花咲半島は根室臺地の續きにして、往々峭壁を以て直に海に臨むと雖も小出入に富み、北岸根室の良港を始めとし、南岸には友知灣花咲灣ホッキリセブ灣等ありて各錨地を控ふ。

島嶼

國に屬する島嶼は極めて多く、即ち納沙布崎の東北に基散せる水晶諸島及び根室半島の沿海に散點せる小嶼にして花咲郡に屬す。是等の諸島は根室半島の斷片にして、第三紀層より成り地形極めて平低なり。

水晶島

水晶島は納沙布崎の東北約八軒にある島嶼にして、長さ七軒半高さ十米乃至十五米を有し、地形平坦にして雜草の茂生するを見る。島は水平的肢節に

富み、西北にあたりベンザイ崎突出し、其の頸部は極めて狭くベンザイトマリ崎と共にベンザイトマリを擁す。更に島の北部にはトカリ崎あり。東南にはオワタラウシ崎の突出せるを見る。

水晶島の近海には小島嶼の散點するあり。ゴメ島・カイガラ島・ウドケ島・モイ小島等其の主なるものなり。

アキユル島の東南水晶水道を隔て、アキユル島(アキコロ島)あり。高さ約四十米にして、海岸は島の南側を除き、暗礁多く航海上危険を與ふ。

アキユル島の東北方に位し出入に富めるユール(ウリ)島あり。高さ約三十米にして島岸は險崖峻壁或は礫砂の濱をなす。北岸にトコマ・トロモイの二錨地あり。ユール島の東方約五杆の處に當り、バルカル島及びボンバルカル島あり。西南より東北の方向を以て殆ど四杆の間に排列せる岩嶼にして、高さ何れも四十米に充たず。更にユール島の北方志勃水道を隔て、志勃島あり。低平の大方形島にして東西約九杆を有す。高さ南部に於て三十米を有するも北部の如きは十米を出でず。志勃島の東北十三杆に當りて多樂島(アラウモシリ)

アキユル島

ユール島

バルカル島
ボンバルカル島

志勃島

多樂島

千島列島

あり。此の島も亦低平にして島頂の高さ僅かに二十米に過ぎず。島岸は險崖沙濱相交り、北岸リヤウシ崎とトカリウ崎との中間及び島の東岸にカリウシ崎とホロリウヤ崎との間は共に少しく彎形をなす。多樂島の東南端を距る東南六杆に當りて一簇の岩嶼あり。トド島・カブト島・カナクソ岩等是れなり。其の他根室半島の沿海に基散せる小嶼には、昆布盛崎の尖端ウリ海峡を隔て、一群の島嶼ウリ島・モウリ島・蟹島・鴨島等あり。更に友知崎の南方には地友知島・友知島ありて友知灣を擁し、尙フ・ラリモイ崎の東方にはイソモシリ・アポマイ島あり。根室北岸には辨天島ありて根室港を擁し風浪を防ぐ。

千島列島

千島列島は北海道本島の東北端より東北の方向に進み、一大彎形を畫きて延長し、カムチャツカ半島の南端に達せる火山列島にして、國後島に起り、西南より東北を指し、擇捉得撫知理保以南北島新知計吐夷宇志知羅處和松輪拾子古丹・春牟古知・濫瀬・古丹・幌筵島等を経てカムチャツカの南占守島に連なる一列

と之に平行し西北側に基散せる武魯頓雷古計知林古丹越渴磨磨勘留志林規阿頼度諸島の第二列とよりなる、而して此等の諸島は何れも火山に富み、或は第三紀層を基盤として幾基の火山其上に聳立するものあり、或は圓錐形の孤峰斷崖をなして海中に屹立し火山島の特相をなすものあり、而して此等の諸島遠く相連りて爰に顯著なる火山列島をなす、其火山の中には今猶活動を持續するものあり、又温泉を伴ふもの少からず、唯色丹島のみは其地質他の諸島と多少趣を異にせるを見る。

色丹島

色丹島は多樂島の東北色丹水道を隔て、二十二軒に位し、東北より西南の長さ約二十八軒、幅約九軒の長方形をなす。地形は多樂志勃水晶諸島の低平なるに似ず、頗る高峻にして、島の東北部にある一峰は高さ七百十四米を占め、其他所々に三百米以上の山峰あり。沿岸頗る小出入に富めども、良灣に乏しく、唯泊船に適するものは北岸の斜古丹港と南岸の松ヶ濱港あるのみ。

國後島

國後島は千島列島の西南端にありて、知床納沙布崎間の廣灣内に浸入し、北海道本島とは根室海峡により相分たれ、西南より東北に延長し長さ百二十軒

幅最も廣き處二十四軒面積凡そ千四百十七平方軒を領す。

國後島を観るに、幾多の火山屹立し、概して高峻を極む、即ち島の東南に當りては茶々嶽(爺嶽)あり。或はセントアントニー峯と稱し、千八百三十三米の高距を有す。島中第一の高峯にして其の形截頭圓錐形上更に第二圓錐形を戴き、頂點極めて尖鋭なり。其の他島の北端ル、イ岬より南方に急起するルルイ山あり。頂上は嶮岨にして中央に凹所あり。火口の如しと雖未だ頂上を詳記せしものなし。海拔百四十九米あり。

更に島の西南部には島登(八八八米)あり。多頭の高山にして、羅臼岬の北北西に聳立せる休火山にして山頂數峯に分かる。其の裾野は緩慢に發達し、海岸に近くに從ひ低平となり、樹木多し。島登の西南に泊山あり。高さ五百四十一米を有し、泊高原に臨む。是等山岳の中間に於ける土地は、比較的低平にして小丘あり、小峯あり、溪谷あり、又沼澤ありて植物の繁茂せるを見る。島の海岸は出入に乏しく、島の北端に突出せるル、イ岬及安渡移矢岬の岬角ありて一灣を擁するも、斷崖直ちに海に臨み、且灣口開濶なるため錨地を

擇捉島

なさや其の他の海岸に於ても亦峭壁多し。唯南端ケラモイ崎の砂嘴は第四紀に屬せる浮石層より成り、土地低く且狭くして舌状をなして突出し、長さ九杆半に達す。此のケラモイ崎に擁せられて泊灣あり。灣首に於ける泊村は島中の主村にして、根室とは一箇月三四回汽船の交通あり。其の他ボッケ崎の南側に東沸の錨地を控ふ。

擇捉島は西南國後水道により國後島と相對し、東北擇捉水道を以て得撫島に向ひ、全列島中最大にして延長二百三杆、幅最も廣き所二十九杆に達し、面積二千四百八平方杆を占む。

擇捉島は幾多の火山噴起し、以てこの大島を形成せしものにして、到る處に峻峯聳立し、又脈をなして連亘せるを見る。而して是等山岳の間は或は低く且つ平坦なる土地となり 或は高原或は丘陵をなす、今是等火山を島の東南端より觀察せん。

ベリタリピ山
ロコー山

ベリタリピ山はベルタルベ岬に近く噴起せし活火山にして、高距千三百四十二米に達す。ベリタリピ山の東北に當りてロコー群山あり。九百九米の高

阿登佐登山

距を有す。

阿登佐登山は内保灣の北角を成せる孤立せる休火山にして、海拔千二百三十米あり。内保より之を望めば恰も富嶽の如く、頂上に噴火口あり。四周峻壁削るが如き摺鉢状をなす。

阿登佐登山の東方宇多須都灣岸に屹立して單冠山あり。休火山にして海拔四百十七米を占め圓頂形をなし、兩側に著しき崩壊あり。之より山脈は東北東に向つて走り、シサンマイノ山(二四三〇米)に達し、分れて二派となり、一はオンネノポリ(一四一四米)はハクチャウス(八六二米)に至りて急下し、低平なる丘陵となり、振別頸地を形成す。

ホトコエ山脈

ホトコエ山脈は留別灣の東南に併立するものにして、其の東端の最高峯をオタモエ山と云ひ、高さ一千百九十八米の休火山にして硫黄を産す。更にオタモエ山の東南に接して立岩山あり。海拔九百九十二米にして山頂尖銳奇形を呈し、其の左右に二尖岩の屹立せるものあり。尙ほ之れに續きてツラリップ山(二名セ、キ山、燒山の義なり一一五四米)の活火山あり。其の東南側より白煙

と之に平行し西北側に基散せる武魯頓雷古計知林古丹越渴磨磨勘留志林規阿頼度諸島の第二列とよりなる、而して此等の諸島は何れも火山に富み、或は第三紀層を基盤として幾基の火山其上に聳立するものあり、或は圓錐形の孤峰斷崖をなして海中に屹立し火山島の特相をなすものあり、而して此等の諸島遠く相連りて爰に顯著なる火山列島をなす、其火山の中には今猶活動を持續するものあり、又温泉を伴ふもの少からず、唯色丹島のみは其地質他の諸島と多少趣を異にせるを見る。

色丹島

色丹島は多樂島の東北色丹水道を隔て、二十二軒に位し、東北より西南の長さ約二十八軒、幅約九軒の長方形をなす。地形は多樂志勃水晶諸島の低平なるに似ず、頗る高峻にして、島の東北部にある一峰は高さ七百十四米を占め、其他所々に三百米以上の山峰あり。沿岸頗る小出入に富めども、良灣に乏しく、唯泊船に適するものは北岸の斜古丹港と南岸の松ヶ濱港あるのみ。

國後島

國後島は千島列島の西南端にありて、知床納沙布崎間の廣灣内に浸入し、北海道本島とは根室海峽により相分たれ、西南より東北に延長し長さ百二十軒

幅最も廣き處二十四軒面積凡そ千四百七十七平方軒を領す。

國後島を觀るに、幾多の火山屹立し、概して高峻を極む、即ち島の東南に當りては茶々嶽(爺嶽)あり。或はセントアントニー峯と稱し、千八百三十三米の高距を有す。島中第一の高峯にして其の形截頭圓錐形上更に第二圓錐形を戴き、頂點極めて尖銳なり。其の他島の北端ル、イ岬より南方に急起するルイ山あり。頂上は嶮岨にして中央に凹所あり。火口の如しと雖未だ頂上を詳記せしものなし。海拔百四十九米あり。

更に島の西南部には島登(八八八米)あり。多頭の高山にして、羅臼岬の北北西に聳立せる休火山にして山頂數峯に分かる。其の裾野は緩慢に發達し、海岸に近くに從ひ低平となり、樹木多し。島登の西南に泊山あり。高さ五百四十一米を有し、泊高原に臨む。是等山岳の中間に於ける土地は、比較的低平にして小丘あり、小峯あり、溪谷あり、又沼澤ありて植物の繁茂せるを見る。島の海岸は出入に乏しく、島の北端に突出せるル、イ岬及安渡移矢岬の岬角ありて一灣を擁するも、斷崖直ちに海に臨み、且灣口開濶なるため錨地を

擇捉島

なす其の他の海岸に於ても亦峭壁多し。唯南端ケラモイ崎の砂嘴は第四紀に屬せる浮石層より成り、土地低く且狭くして舌状をなして突出し、長さ九軒半に達す。此のケラモイ崎に擁せられて泊灣あり。灣首に於ける泊村は島中の主村にして、根室とは一箇月三四回汽船の交通あり。其の他ボッケ崎の南側に東沸の錨地を控ふ。

擇捉島は西南國後水道により國後島と相對し、東北擇捉水道を以て得撫島に向ひ、全列島中最大にして延長二百三軒、幅最も廣き所二十九軒に達し、面積二千四百八平方軒を占む。

擇捉島は幾多の火山噴起し、以てこの大島を形成せしものにして、到る處に峻峯聳立し、又脈をなして連亘せるを見る。而して是等山岳の間は或は低く且つ平坦なる土地となり、或は高原或は丘陵をなす、今是等火山を島の東南端より觀察せん。

ペリタリピ山
ロコー山

ペリタリピ山はベルタルベ岬に近く噴起せし活火山にして、高距千三百四十二米に達す。ペリタリピ山の東北に當りてロコー群山あり。九百九米の高

阿登佐登山

阿登佐登山は内保灣の北角を成せる孤立せる活火山にして、海拔千二百三十米あり。内保より之を望めば恰も富嶽の如く、頂上に噴火口あり。四周峻壁削るが如き摺鉢状をなす。

單冠山

阿登佐登山の東方宇多須都灣岸に屹立して單冠山あり。活火山にして海拔四百十七米を占め圓頂形をなし、兩側に著しき崩壊あり。之より山脈は東北東に向つて走り、シサンマイノ山(二四三〇米)に達し、分れて二派となり、一はオンネノポリ(二四一四米)一はハクチャウス(八六二米)に至りて急下し、低平なる丘陵となり、振別頸地を形成す。

ホトコエ山脈

ホトコエ山脈は留別灣の東南に併立するものにして、其の東端の最高峯をオタモエ山と云ひ、高さ一千百九十八米の休火山にして硫黄を産す。更にオタモエ山の東南に接して立岩山あり。海拔九百九十二米にして山頂尖銳奇形を呈し、其の左右に二尖岩の屹立せるものあり。尙ほ之れに續きてツラリップ山(二名セ、キ山、燒山の義なり一一五四米)の活火山あり。其の東南側より白煙

ツボリ山

を噴く。此の山脈は其の西麓單冠灣岸をなし、南麓は擇捉島の東南岸をなす。ツボリ山は又登山と云ひ、留別灣の東側をなす火山にして、海拔五百七十一米を有し、平頂にして五葉松を以て蔽はる。有名なる山道のある處にして、紗那に通ずる行程約三十軒なりと云ふ。

チリツツ山

チリツツ山は紗那及び別飛の北方に突出せる半島を占め、高距千五百二十八米を有し、千島火山島脈の主脈の西北側に散點せる所謂第二火山島列に屬するものにして、主脈より其の噴出の期を後にし、現今猶ほ白煙を噴出す。

藻寄灣北方の群山

島の東北端藻寄灣に注げる藻寄川の溪谷を隔て、南北兩側に顯著なる高山聳立し、更に此の脈は西方に連亘す。其の北部にあるをラッキベツ嶽(一九五米)と云ひ附近には高さ九百米以上の高峰秀立せるを見る。この南部にあるを藻寄嶽と云ひ、之より西方に二高嶽あり。一は高さ千七十一米、一は九百二十三米にして、後者を硫黄嶽と稱し、常に硫汽を噴出し、附近に硫黄昇華して黄色を呈す。

是等火山の間には丘陵起伏し、猶ほ小川内保川留別川紗那川藻寄川等の灌

溉する所は地味豊饒なる爲め、夏期は燕麥野菜等の栽培せらるゝを見る。

今島の海岸を見るにオホーック海に面する沿岸は其の東南岸即ち太平洋に面する沿岸に比すれば、海岸線甚だ長し。是れ此の島の主部より薬取イカハシノツ珊瑚カハリシラリ等の岬角の突出せしによる。且つこの方面には河流湖沼等ありて漁撈を營むこと容易なる爲め、村落の發達も稍著しく、主邑紗那を始めとして、留別薬取振別内保等皆此の方面にあり。是に反して東南太平洋に面する方面は、ロー灣及び單冠灣の灣入あるのみにして、多くは斷崖直に海に臨み、丁寧及び年萌の漁場あるのみ。尙島の東北には摺鉢の側面形をなせる藻寄灣あり。

得撫島

得撫島は擇捉島の東北擇捉瀬戸を隔つること三十九軒にありて、延長約九十六軒、幅平均九軒半を有し面積八百三十平方軒を占む。

島内數多の峰巒屹立して地勢險阻なり。山嶽の稍著しきものは南部に白妙山(一一一五米)白旗山(一〇二二米)、中部より稍北方に雪光山(一二五七米)、北部に今堀山海面山(一一三九米)あり。殊に雪光山は山頂圓錐状をなし最も秀麗な

り。其北に摺鉢山あり。禿嶺せる山背より常に硫汽を噴出するを見る。其の南に硫黄山あり。山麓温泉崎に温泉湧出す。島内斯の如く山岳重疊し斷崖を以て直に海に臨める所多きを以て、平野の如き見るべきものなく、唯島の東北端に突出せる狭長にして平坦なる地を作れるあるのみ。

島の海岸は極めて單調にして出入に乏しく、概ね斷崖を成し、平坦なる砂濱少し。従つて港灣の見るべきものなく、唯床丹川の河口に床丹灣及び島の東南海岸の中部より稍北に位し、ポードハーポアあるに過ぎず。

得撫島の東北より三十一杆を隔て、知理保以南島あり。更に此の島の東北三杆に位して知理保北島あり。何れも全島山にして海岸は絶壁峭立す。

知理保以北島を距ること二十二杆にあたりて武魯頓島あり。火山島にして一峰突起し其の高さ五百四十米に達し、山脚四方に降下して島形殆ど圓形をなし、其の直徑三杆に足らず。四周斷崖をなす。

新知島は知理保以北島を距ること東北六十三杆にあり。東北より西南に延長し、長さ約四十八杆幅三杆乃至十一杆ありて面積三百二十六平方杆を有す。

知理保以南北島

武魯頓

新知島

島の地形を見るに千島列島の特色を表はし、島の延長の方向に従ひ、火山竝列して噴起し、相連りて狭長なる島を作れるものにして、島の西南にあたり新知岳(ミルン山とも稱す)あり。高距一千百四十五米を有せる火山にして、明治十四年九月烈しく噴火せり。新知岳の東北は地勢低く溢れて地頸をなし、其の廣さ僅に二千米に過ぎず。其の西に新知灣を擁す。此の處より以北山岳再び隆起し、海岸峭壁をなし、中部の北に中央峰聳立し、其の形圓錐狀を呈し、高さ一千二十米を有す。東北端は環狀を成せる山脈ありて武魯頓灣を抱けり。其周圍は浮石等より成れる丘巒を以て圍繞せられ、恰も腎臟形をなせり。廣袤各三海里深さ四尋より五十尋に達し、暴風の際と雖、波浪狂起せず。其の形狀により察すれば、一大噴火口たりしもの如し、灣口北に向ひ其の幅僅に二百七十米、深さ二尋に過ぎず。岸邊は深さ一尋許、且つ水面に昆布密生して船舶の出入を妨ぐ。然れども若し築港せば實に千島第一の良港たるや必せり。灣口の西岬を日本岬と云ふ。

計吐夷島は新知島の北端を距る凡そ十六杆の所にありて東西約十杆南北凡

計吐夷島

宇志知島

そ十一杆あり。島内都て山にして高きもの三座あり。一座は明治十六年烈しく噴火せり。海岸は絶壁にして船を寄するに便ならず。唯南岸の一處は何れの時期に於ても上陸するを得べし。計吐夷島の東北二十七杆を隔て、宇志知島あり。南北二島の合稱にして、兩島の間僅かに四百三十七米を有し、干潮の際は一帯の岩礁露出して歩いて渉るべし。南島は北島より較々大にして其の西側に高さ四百十二米の活火山あり。島の南岸深く屈曲彎入して暮田灣あり。この灣は舊噴火口にして南方に缺崩し、海に通じたるものならん。現今猶ほ東側よりは温泉の湧出するを見る。宇志知島より東北羅處和島との間を摺戸海峡と云ひ、礁脈該海峡を横断して延伸せるを以て千島列島の諸海峡中最も航海危険の處たり。摺戸岩摺手岩は此の岩礁の水面上に表はれたるものにして、この礁脈は宇志知の北端五杆の沖合に在り。北北西より南南東に走りて長凡そ三杆に及ぶ。岩礁は夏季臘胸獸の來遊して蕃殖する所たり。

摺戸岩

羅處和島

羅處和島は宇志知島の北北東にあり。稍、卵形を呈し長さ南北に十四杆、最廣東西に八杆あり。此島の諸山は不規則にして數峰屹立せり。其の最も高き

松輪島

ものは千百五十二米に達す。島の東部にポロチャチャヌプリあり。常に硫汽を吐出し噴火口の周圍には硫黄を堆積せり。海岸概ね斷崖をなせども南方には岸低くして船を寄すべき處あり。

羅處和島の北北東約三十一杆にあたりて松輪島あり。島は海拔一千五百八十七米の圓錐形火山島にして、常に白烟を吐き、屢次熔岩を東北側に流下す。尙東南側にも一卑峰の聳ゆるあり。海岸概して懸崖削立すれども、唯南方に沙浜の横はるあり。

雷公計島

雷公計島は松輪島の西北凡そ十七杆にあり。全島一個の火山より成り、圓形をなし、直徑約千五百米にして高さ四百七米を有す。其の頂上甚しく破壞せるを以て、遠望すれば斷頭圓錐形を呈す。山腹には火山灰堆積し、絶えて綠色を見ず。雷公計島の東北東約五十九杆にあたりて牟知列岩あり。直徑約千五百米の新月形をなせる小嶼暗岩を總稱す。小嶼は長岩高岩低岩及び海豹岩にして、蓋し往時海中噴火口壁の一部ならんか。是等の周圍には海藻著しく繁茂す。

牟知列岩

捨子古丹島

牟知列岩の北と東凡十七杆に當り、捨子古丹島(斜子古丹島)あり。西南より東北に延び、延長二十四杆、幅廣き處九杆あり。島の中部縫れて地峽をなし、其の幅僅に千五百米にして低き丘陵をなし、之を越ゆること容易なり。此の地峽より西南の部分に火山あり。温泉湧出し硫黄を産す。地峽の東北は皆山岳にして最高九百二十米に達す。亦火山ありて常に硫黄を噴出す。安政二年盛に噴火せりと云ふ。海岸は壁立し海中處々に岩礁あり。唯乙女灣は地峽の西にあり。西北越湯磨島に面し灣内水深く波濤稍穩かにして一錨地をなす。捨子古丹島の西北七杆に位し、越湯磨島あり。高さ千米を越ゆる休火山を戴き、海岸險岨を極む。越湯磨島の西方二十九杆にあたり知林古丹島あり。面積越湯磨島よりも小にして火山あり。二重の圓錐形峯より成り、其の外側圓錐は東南壁を失へり。常に蒸汽を噴出し、時々周壁の破隙より熔岩流下して海に達す。海岸は斷崖削るが如しと雖も其の西北側に一磊石濱あり。捨子古丹島の東北約二十九杆にあたりて春牟古丹島あり。西北東南の長さ十二杆、幅凡そ五杆あり。島の中央に近く二重の圓錐形休火山あり。八百八十五米を有す。

越湯磨島

知林古丹島

春牟古丹島

北側に二箇の峰あり。外方の圓錐壁は破壊し殊に東側に破綻あり。噴出物之より流下して海に達し、東角附近の低地をなす。此の熔岩流の北側は帶黃色を呈せり。

溫禰古丹島

溫禰古丹島は春牟古丹島の北々東十一杆にあり。島の長さ南々西より北々東に四十二杆、北端より全長の三分二の間は幅約七杆なれども、南部に至り膨大して直徑約十七杆あり、總面積三百十三平方杆を占む。島中二大峰あり。一は南部に聳ゆる圓錐形の火山にして黒石山と云ひ、一千八十三米を有し、二重式に屬せり。更に島の北端に聳立せるネモ山は、七百四十四米の高距を有し、其の頂の東南側下邊噴火口より今猶ほ盛に硫黄を噴出せるを見る。此の二峰を除けば地勢甚だ低し。海岸多くは巉岩峭立し、僅に沙濱あれども附近に岩壁ありて容易に近接するを得ず。周圍には海草繁茂し、其の水面に浮ぶときは暗黒色を呈し、恰も暗岩を見るが如し。

磨勘留島

溫禰古丹島北端の北西約二十八杆にあたりて磨勘留島あり。南北の長殆ど十三杆幅約九杆あり。形略卵形をなし高さ一千百八十二米を有せる休火山島

幌筵島

にして、山頂亂立し。中に數峰あれども一も顯著なる圓錐峰なし。島の周縁
到る處絶壁あり。山麓に狭き磯濱を有す。

幌筵島は温禰古丹島の東北温禰古丹瀬戸を隔て、長く東北に延長せる大島
にして、東は幌筵瀬戸の水路を以て占守島と相對す。長さ約九十一杆幅平均
十六杆ありて面積一千四百五十五平方杆を有す。島内山嶽多く數座の雄大な
る火山あり。其の最も秀拔なるはファッス峰と爲す。一名シリアシリ山と云
ひ島の西南側の小半島を占め、海拔二千九十一米を有し、壯麗なる單圓錐に
して傾斜正しく、山麓は断崖をなして海に臨めり。ファッス峰の東北東にあ
たり、チラク峰(一名ジャコムシチ)あり。高さ一千三百四十米を有し、安政年
間噴火し、山の北半腹には今猶ほ硫汽の立つを見る。島の北端に顯著なる三
峰あり。南方にあるを三子山(九四九米)中央にあるを鉞山(八〇〇米)北部にある
を圓錐峰(一〇七四米)及び尖錐峰(九二四米)と云ふ。三子山は其の名の如く三頂
を有し、尖錐峰は特に尖銳なるを以て顯著なり。又圓錐峰の西部に高嶺あり。
常に白烟を噴出す。其の他島の中央部は峰巒に富めども皆高からず。斯の如

志林規島

く山岳群れるに拘らず其等の間には溪流發達し、湖水等も亦少からず。溪流
中稍、著しきものはトルキー川・シベット川等となす。島の海岸を見るに西北
即ちオホーツク海沿岸は他島に於けるが如く断崖絶壁をなし、高崖の下圓石
より成れる波打際ありて、此の方面には海中に岩礁なしと雖も、東南即ち太
平洋沿岸は是に反して断崖少くして遠淺をなし海中には岩礁の夥しきを見る。
幌筵島西南端の西北約二十杆に位し、志林規島あり。東西の長さ約四杆、幅
約二杆あり。西南方より之を望むときは、凹凸不平なる圓錐形をなし、其の
噴火口壁は破壊して廣濶なり。島の西側は最も高く、七百五十七米を有し、
其の海に臨む處懸崖直立す。北岸には小低地あれども其の他の海岸は高く且
つ峻なり。

阿頼度島

阿頼度島は幌筵島の西北約三十一杆に位し、列島中の最北に位する休火山
島にして、海拔二千三百五十八米の高距を有し、千島列島は勿論北海道本島
に於ても、高さ此の右に出づるものなし。四時白雪を戴き、壯麗なる圓錐形
にして、恰も富嶽を見るが如し。島も亦概ね断崖絶壁をなすと雖も、其の東

占守島

南側は熔岩流下して一低角をなす。

占守島は一衣帶水を以てロシア領カムチャツカに對し列島の東北端にあり

西南は幌筵海峡を隔て、幌筵島と相對し、東北より西南に至るの長さ約三十
杆、幅約十八杆ありて面積約二百三十平方杆を有す。

本島は千島列島中特殊の相貌を呈し、絶えて高嶺峻峰を見ず。傾斜緩かな
る丘陵起伏して溪谷には沼澤多く、偃松赤楊及び苔蘚等を生せり。島の最高
部は其の北側にあれども、僅に百七十六米を數ふるに過ぎず。島勢斯の如く
平坦なれば、河川の稍見るべきもの多く、即ち西部に於ける別飛川を始めと
し、南岸の子林川及び東岸の中川サキベツ川等は其の主なるものなり。全島
丘陵の緩慢に起伏して低平せるのみなれば、其の大部は農牧の業に適せりと
雖、氣候佳ならざるがため其の地を利用するに至らず。唯此等の河畔は耕作
せられ、小部落の散點せるを見る。郡司成忠氏の設けたる報效義會本部は、
南岸子林河畔の低地にある片岡に存するなり。島岸を見るに東南海岸は概ね
斷崖絶壁をなせども、西海岸は大抵平坦なる砂濱にして、唯別飛以南に於て

概説

第二章 海洋並に海岸線

斷崖の峭立するを見る。片岡灣は幌筵瀬戸にあり、灣面北西に開きて半月形
をなし、船艦を泊するに便なり。尙島の北端に國端岬の岬角斗出してカムチャ
ツカのロバトカ岬と相對し、其間僅に十三杆に過ぎず。

北海道は北海道本島と千島列島とより成る。北海道本島は我國四大島の最
北端をなせる大島にして、其東北に連れる千島列島と共に、我日本列島をな
せる三大島の東北部を形成す。

北海道の海洋並に海岸線を述ぶるに當り、先づ北海道本島より説かんに、
東南一帯太平洋に而し、北及び西の二方は縁海たるオホーツク海及び日本海
に臨み、其間太平洋とオホーツク海との間には根室海峡あり。太平洋と日本
海との間には津輕海峡あり、兩縁海は宗谷海峡を以て相連絡す。是等の海峡

海峡

は地形の條に於て既に述べたる如く、構造上之を隔てたる島嶼又は列島と互に相關連せる陥没部に相當せるものにして、就中南方の津輕海峡は本州との平均距離約十哩(津輕海峡は本州津輕半島の龍飛崎と松前半島の南端白神岬との間を西口となし本州の尻矢岬と龜田半島の東南角惠山岬との間をその東口となす。西口は之を精密に云へば其の距離十哩三なれども東口は之より幅廣く却つて其より西即ち海峡の中央に於て大間岬と龜田半島の一角汐首岬との間最も狭くして九哩七なり)ありて山嶺相臨み、國防上極めて大切なる處なり。而して此海峡は一面總論に於て述べし如く、生物分布學上プラットフォーム線をなせる處にして、海底の深さに於ても他の兩海峡に比して甚だ大に且つ潮流の急なるを以て名あり。根室海峡は之を宗谷海峡に比すれば、其幅狭く深さも亦甚しく大ならざれども、嚴冬季に至れば氷結して航海全く絶ゆ、殊に三四月の候に至れば流水一面に漂ひ來り、交通上極めて困難なり。是に反して宗谷海峡は其深さの淺きこと並びに流水の襲來に於ては前者と略ぼ同じきも、日本海流の一支たる對馬海流は其の一派を此處に出して樺太と本島と

海岸發達の係數

の間を氷結せしむるが如き虞なからしむ。殊に氣温の點に於ては氣候の條に於て見る如く、その附近一般に高温なるが故に其の二岬角(本島の宗谷岬と樺太の西能登呂岬)の間は常に氷結を見ることなし、この距離は二十三哩なり。是を要するに以上三つの海峡を以て他の陸土と相接近する處は、其の南方のものは勿論他の二つのものも共に日本本土の南方海峡の如く之に隔離せらるゝ兩陸土の交通連絡を助成するとは趣を異にし、却つて自然の諸性質上互に分離せんとする傾あり。殊に南方津輕海峡に於ては、文化の進路に當れるに關らず、上述諸性質を有するの故を以て北海道をして文化の發達を遅延せしめし一原因をなせる感ありとす。

北海道本島の輪廓は前述の如く菱形の一區域を以て軀幹となし、其西南に懸垂せる一小部を以て肢節となせるが故に、形甚だしく簡單にして、一見海岸の發達甚しく缺乏せることを認むるを得。今その海岸發達の係數を見るに漸く二三に過ぎずして、臺灣の一、八に對して僅かに優勢なるを示すに止まれり。されば之れを前述九州島に比すれば、その海岸線發達の差殆ど極端に達

し、彼れに比すれば半島岬灣の見るべきもの全く缺如せるものと云ふを得べし。只本島の海岸のみに就て之を觀れば、軀幹部即ち菱形をなせる部に比して、其東南の半島部は稍、出入に富み、岬灣の如きも本島に於て極めて重要なものは殆ど悉くこの地に存せり。

今海岸の利用に關し、海岸内陸間の距離に就て之を見るに、本州島は最も海岸に遠き内陸に於て約百十五軒なるに對し、本島もまた軀幹部に於て殆ど本州島と等しく、北見の中央海岸より膽振の東部即ち石狩平野の南端海邊迄の距離は二百三十軒なるを以て、海岸より最も遠き處は百十五軒に達す。唯西海岸即ち天鹽の南部と東南海岸十勝の東北部とを連ねたる線は概ね之れより短く、約二百十二軒なるを以て、此半數は百六軒なるべく、從つて、軀幹部内陸より海岸に最も遠き處は本州より稍、小なる差あり。されば海との距離の遠近もさることながら、軀幹部の西南半島部に比して土地の開拓の遅々たるは海岸の發達の少なきのみならず、この海岸よりの距離の遠きも與かりて力ありと謂ふべし。

海岸内陸間の距離

海岸線の方向

翻つて海岸線の方向を見るに、地形の條に於て述べたる如く、軀幹部にありては其の骨格恰もこの菱形の對角線をなし十字形をなして互に交錯せる觀あるが故に、海岸線はこの對角線に對し、四隅を除きては全く構造線と無關係なる觀を呈す。換言すればこの四つの海岸線は略中性岸に屬す。(海岸の走向に關しては、陸地を構造せる地層の皺襞に並行する時は縦岸と云ひ、この皺を横斷せる時は横岸、この皺に斜なる時は斜岸と云ひ、構造線に關係なき時は中性岸と云ふ)この方向は六大島中本島に於て最も著しきを見るべく、實に本島自然地理上の一特色と見做すべきものなり。而して菱形の四邊は其の東部兩半島中花咲半島を除き、知床半島及び南北の兩岬たる襟裳宗谷の三突角は何れも斜岸をなし、一は第三紀層の千島山脈に對し、他の二は日高山脈及び北見山脈に對して之れを斜めに截斷せる觀を呈す。

更に海岸の形狀に就て之れを觀れば、四邊の沿岸中日本海岸は概して山岳海に迫まり、險崖をなせる處少からず。特に増毛山塊の海に臨める處は、急峻なる山勢直ちに海に落ち、海岸を通ずる交通線は全く缺如せり。然れども

海岸の形状

概観 軀幹部の海岸

他の海岸即ちオホーツク海岸並びに太平洋に向へる兩海岸(太平洋海岸は襟裳岬により東西の二海岸に分たる)共に表面傾斜緩なる第三紀層の丘陵を其背後に有し、沿岸に近くに從ひ、其臺地の縁邊に發達せる廣狹常ならざる砂濱を後方に控ふ。但し前述せる斜岸をなせる處は往々峻岸の長く連なるを見る。尚オホーツク海の南部本島と千島國後島との間に突入せる根室海峡の沿岸も此式の形狀を呈す。これを要するに軀幹部の海岸は其海岸の方向に於ても出入甚だ乏しく、其形狀に於ても概ね山岳丘陵の區別こそあれ、背後は急峻なる地形を呈し、其間肢體の發達は甚だ乏し。先づ岬角をなせるものとしては、南に日高山脈の盡頭をなせる襟裳岬あり、北端には宗谷岬及び其西部のノッシ岬を數へ、東部には知床花咲の兩半島突出するに過ぎず。而して是等の肢體は襟裳・知床の兩半島にては一帶に高峻なる山脈を戴くも、北部の二岬角並びに花咲半島は其表面殆んど平坦にして、附近の低平なる臺地と擇ぶ處なし。然れども尙仔細にこれを觀れば四邊の海岸は多少互に特色を以て區別するを得。即ち日本海に臨む處は海岸の方向大波の如く緩かに出入すれども、其南

(一) 日本海岸

部は前述せる増毛山塊の西縁をなせる處に當り、拳の如き圓き突出をなす。之より北に至れば、概して二つの弓形をなせる海岸に分たれ、その北部の如きは本州の東岸に於て見る九十九里濱の如く弓形の長砂濱をなせり。而して南部より北に進むに従ひ一帶に地形低夷し漸次北海道の特色を呈し來り、階段をなせるを見る。其間天鹽川の蛇行線をなせる處の南北にあたりては、二三の潟湖を存す。天鹽川の口は石狩川の河口と共に風浪の妨げによりて河口の著しく影響せられたる好例にして、河道の海岸に向へる處より南方に轉ずること七紆半に及べる沙嘴横はる。

斯くして利尻水道の邊より海岸線北々東に向ひノッシ岬に及ぶ。このノッシ岬の東側には、稚内の錨地あり。其西岸には同港の補助港たる坂下港あり。稚内本港は宗谷ノッシ岬の間即ち北より南に向ひ本島の北端に入りし灣の西南隅に位し、古來樺太との交通上重要な處なり。オホーツク海沿岸は其南方根室海峡を除き、一帶に宗谷岬と知床岬との間に成れる大なる弓形をなせるも、特に宗谷岬と能取岬との間は本邦稀に見る單純なる弓形にして、こ

(二) オホーツク海岸

の間背後には北見平野、西南より東北に向ひて漸次擴まれり。但し枝幸附近の處は恰も北見山脈の中軸をなせる古生層に對して海岸線斜めに交はることとて、數百米の高さをなせる山岳此處に蝟集懸倚せるにより、概ね峻崖なり。然るに東南して能取岬に近けば、臺地性平原の間多少の高處を認むれども概ね低く、殊に臺地と沿岸との間多少の潟湖こゝに相連なり、之れを界せる砂嘴は甚だ明瞭に發達す。猿洞ノトロ網走湖等は此の例なり。能取岬より知床岬端に至る間は略弓形をなすも、知床半島の基脚部より其尖端までと其西部とは趣を異にせり。西部は概して前述の海岸北見の東岸に酷似するも、知床半島の沿岸は山岳直ちに海にせまり、沿岸殆んど掌大の低地をも餘さず、此海岸中錨地と見るべきものは、庇護なき網走港を擧ぐるのみ。

根室海峡はこれを詳かに觀れば、其北部知床半島と國後島との間を根室海峡と稱し、其南國後島と根室の野付の砂嘴との間を野付水道とし、其南部花咲半島により抱擁せらるゝ處を根室灣と云ふ。此區域も稍北見の海岸に類し、根室の低き臺地其背後に横はり、沿岸單調なる砂濱延長し、其内方に數多の

(三) 根室海峡沿岸

潟湖を擁す。特に野付の砂嘴の如きは、地形の條既に述べたる如く海流潮波によりて作られたる砂地の小肢節たり。然れども港灣の乏しきことは亦前と異なることなく、根室灣頭に近く僅かに根室港を抱くのみなり。根室港は花咲半島の北岸にある古き港なるも、北海道開拓上の必要に應じて起りたる港たるに過ぎずして、其自然の形勢より之れを見れば、亦軀幹部の諸港の如く風浪に對して甚だ不完全なる錨地なり、港は近時開港場となれり。

尙知床花咲の兩半島は共に本島の東部をなせる岬角なるも、半島の構造並びに沿岸の狀勢は全く相異なり、彼れは第三紀層の千島灣より成り、その上に千島火山脈に屬せる幾多の火山噴起し、以て此處に火山半島を成し、沿岸東西共に峻嶮なるに對して、此れは低き第三紀層より成り、火山岩は處々に點在するに過ぎず。且つ沿岸は多少の屈曲に富み、殊に南部は地變の跡を止むること最も多く、小岬角參差として相交はる。この最東端を納沙布崎と稱し瑠瑠水道を隔てて水晶諸島を望めり。

花咲半島の納沙布崎より以西膽振の東部平原即ち石狩平野の南端までは、

(四) 太平洋岸

太平洋岸に向へる海岸にして、襟裳岬によりて東西の二區に分たる。而して東部は又釧路港を境として、東西二小半に分たれ、兩者大に其觀を異にす。東小半は軀幹部沿岸中にては最も小肢節に富める處にして、圓みを帯べる小出入稀ならず。之を例せば東の方花咲灣の南邊をなせる友知灣、花咲灣の如き、或は又釧路の東部海灣をなせる濱中灣、厚岸灣の如き是れなり。而して是等は東より西するに従ひ、其の大きさを増加す。唯背後の地形は北海道本島の東部沿岸と同一式にして第三紀の低き臺地に屬す、諸港灣中有名なるは花咲濱中、厚岸の諸灣にして花咲灣には根室港の補助港花咲港あり。濱中灣には霧多布、厚岸灣には厚岸の港あり。何れも霧深くして夏季は其最も甚しきを見る。又冬季は沿岸往々結氷を見ることあり。釧路以西の小部分は概して北見の海岸に類し、殆ど僅少の出入をも見ざる弓形を呈す。殊に釧路より襟裳岬に近き茂寄に至る迄を然りとす。この間彼と異なるは、唯北見の沿岸にありては北部は高地直に海に迫り南部に至りては次第に低夷せる臺地を其背後に有せるに反し、これは其中央部に割合に低く、北に稍高き臺地を控へ南部は東方

に向つて急斜せる日高山脈に接す。この沿岸中東端にては釧路川、中央部に於ては十勝川口を開く。十勝川は其上中流に於ても著しきが如く、海岸に近接しても蛇行線を描き、天鹽川に比して規模の小なる砂嘴を有し、且つこの附近には數多の潟湖を存せり。此沿岸錨地の乏しきは、亦北見と同じく唯東隅釧路の一港あるのみ。釧路港も根室港と同じく東部の古き港なるも、近年迄は海陸の利便多からざりしを以て、甚しく開けざりしが、數年前に北海道本島横斷鐵道の一端をなし、ために近來著しく活氣を呈し來れる港なり。茂寄より襟裳岬に至る間は、日高山脈の南端をなせる山岳急に海に下り、急峻なる沿岸長く連り、爲めに陸上の交通妨げらるゝこと少からず。軀幹部太平洋岸の他の一半たる襟裳岬以西は、概ね弓形をなせる海岸線發達せるも、仔細にこれを觀來れば、天鹽北見若くは釧路十勝に亘れる沿岸に比し別に一機軸を出し、全く彼が如く方向平滑ならずして、極めて小にして且つ鈍き小出入を伴ひ、且つ彼れが如く海岸の平沙地極めて發達せず。唯互に相類似せるは背後に日高山脈の西南部に發達せる第三紀の臺地を有する點

肢節部の海岸
概観

なり。この臺地は十勝の如く北方に擴大し南に緊縮し、之を穿てる幾多の小河川は殆ど並行して海岸に注げり。

本島の肢節部は石狩川平原を以て軀幹部と接合し、其の西南に漸次二重に後尾を出せる如き形をなし、龜田・松前の兩半島に終り、其形状いたく均齊を得、伸張緊約相對せるを見る。

先づ半島部の胴體部と連なる處は日本海と太平洋との間の狹隘部にして幅約六十五軒(石狩平野の西南に横はれる山地を通過す)を算し、これより西に至れば北に積丹半島を出すに反して、南には室蘭港の陥没部を中に抱ける膽振の三角形をなせる半島を斗出せり。然るに之より西方に至れば、漸次陸地は西に盛まり、遂に北の壽都灣、南の膽振の靜狩を連ねたる地峽となり、其幅二十五軒にも達せず。これより南方兩海岸の距離稍増大するも、略等距離を保ち、遂に内浦灣岸渡島の西北に於て略二十七軒に達して、此處に始めて半島最南の兩半島を出し、其東南は恵山岬に盡き。西南は白神岬に終る。半島部の方向の西南より東南に屈曲せる處は、自ら其の東部に卵形の一灣をつく

り、内浦灣一名噴火灣と稱す。其名の示すが如く北海道の西南部に内浦をなし、其東方に幅廣き口を開けり。

斯の如く半島部は、軀幹部の菱形を呈して本島の特色をなせる如く、此部も亦對稱的輪廓を以て特に表はるゝも、其肢節の發達に至りては軀幹部に比して稍其趣を異にす。されど大體より見れば、日本本土の諸大島に比し、甚だ簡單なるを失はず。例へば此地方は軀幹部に比しては地域著しく狭きに係らず、石狩平野より壽都・靜狩間の地峽部に至るまでは、又略菱形を呈し此うち海岸に最も遠き處は、石狩平野と壽都・靜狩間を連ぬる地峽部との間に於て、沿岸の最大距離約四十軒に達する處あり。

海岸走向の形式は第三紀層と新火山岩との發達著しきを以てこれを詳細に述ぶること困難なれども、其形状に至りては到る處殆ど同一にして、常に新火山岩若しくは稀に古生層より成れる山岳沿岸に迫まり、概して峻崖なり。唯第三紀層の發達せる區域には、處々に小規模なる海岸段丘ありて、渚汀との間往々單調なる平砂地を留む。こは地形の條に於て既に述べたる如く、半

(一) 日本海岸

島部はこれを軀幹部に比すれば一面に大小の山岳より成り、殆ど低平なる地域を除き、時に突角に富める大肢節多しと雖、岬角の出入海灣の發達は共に割合に乏しく、函館・室蘭の兩港を除くの外、天然の良港は概して多からず。現時隆盛を以て鳴れる小樽港の如きも、實は人工によりて其位置を保つに過ぎず。

今順次これを西岸より述べれば、石狩・天鹽の境をなせる増毛山塊と、積丹半島との間は、東南に入りて石狩平野に接す、此一大灣を石狩灣と云ふ。此一帶は全く低き沖積平原にして、石狩川は口を開き、海灣との間、長さ砂嘴によりてしばし隔離せらる。然るに此灣岸中南部より積丹半島に至るまでは、全く半島部通有の地形なるが故に、一般に山岳迫まり、殆んど低地を缺く。其間に高島岬北に突出し、其東南に人工港たる有名なる小樽港を控ふ。これより以西には余市の小錨地横はるも、船舶の碇繋良好ならず。要するに石狩灣の西南邊は、沿岸多くの出入あるに拘らず、良港灣に至りては小樽を除き、

(二) 津輕海峡沿岸

殆んど見るべきものなし。積丹半島の岬角は積丹岬と云ふ。これと相對して神威岬あり。後者は本島の西岸開拓の歴史に於て、常に表はれ來る航海者の難所なり。これより南は前述の如く内浦灣と渡島の西北海岸とを連ぬる地峽部に至る間は、岩内灣並びに壽都灣の小灣入を見るのみにして、他は極めて緩慢なる出入をなすに過ぎず。海岸の地勢の如きも、亦山岳に富み、懸崖屢、海に落つ。唯岩内壽都の二港は恰もその背部に小河川ありて、河流に發展せる小平地を控ふるが故に内部との連絡頗る便を得たり。但し灣形風浪に對しては良好ならず。

渡島の西北海岸より白神岬に至る間は、海岸の地形前と同じく屈曲に乏し。此間江差・福山の如き古港を數うるに過ぎず。前者は今日に於ては漁業港として僅かに其名を知られ、後者は蝦夷島發達の歴史上に其名を止むるのみにして、共に沈衰の港市なり。福山の西方に大島小島の兩火山島あり。就中小島は津輕半島の小泊岬と相對して廣義に於ける津輕海峡の口を扼す。白神岬より恵山岬に至る間は、津輕海峡の北岸に當り此處に函館の灣入あり。函館港

(三)太平洋

は函館山と稱する往時の島、今の半島によりて抱擁せらるる良港灣にして船舶に對して絶好の避難地をなし、渡島の東南龜田半島との間に砂嘴長く連接せり。函館以外には東西兩方面共に出入殆ど見るべきものなく、唯津輕海峽に對し矢越沙首の二岬突出するのみなり。この沙首は陸奥の大間崎との間近く相臨み、昔の和船時代に北海道に航する者の重要視せし標式地なりとす。なほ此津輕海峽沿岸には、往々美麗なる第三紀の階段地の發達せるを見る。惠山岬より渡島駒ヶ岳北麓の砂崎に至る間は、海岸の方向及び其背後の地形共に渡島の南部半島の外側沿岸に類似し、亦見るべきの錨地なし。砂崎より西北は即ち内浦灣なり。この灣は沿岸に火山多きを以て、バンペレー之を火山灣或は噴火灣と呼びしを以て有名となれるものなり、其形狀殆んど圓形を呈し、南岸と北岸とは火山連峙してこれを抱擁し、其裾野は往々直ちにこの沿岸に及ぶ。南部の駒ヶ岳火山、北部の昆布有珠其他南方の幌別火山の如き即ち是なり。海岸の出入に就てこれを見れば、西岸を除く外、他の南岸並びに北岸は大體鈍き出入をなすと雖、南岸は北岸に比すれば、極めて單簡に

北海道海岸と
人文との關係

して、唯沿岸寄港地たる森の小港あるのみ。北岸はこれに反して、虻田紋籠を始めとし、其東南端には西方より深く灣入せる自然の良港室蘭あり、函館と共に良開港場をなす。内浦灣西方の海岸は前述せる靜狩河口より始まり、凡そ膽振渡島の國境に終る、半島部に於ては稀に見る弓形の砂濱にして、第三紀の臺地は常に沿岸に迫り、其觀恰も軀幹部の弓狀海岸に酷似せり。室蘭港を成せる半島部の南岬より膽振の東部石狩平野の南端までは、概ね又弓狀の海岸をなし、沿岸の狀勢内浦灣の西岸に類す。唯彼れと少しく異なるは東方に緩斜せる第三紀の臺地の幅は、彼に比して幅廣きのみならず、其西方は傾斜の甚だ緩なる膽振中央部の諸火山の裾野に徐ろに推移することなり。又前述の丘陵と沿岸との間には、廣狹常ならざる平地横はり、西南より東北進するに従ひ、益擴大して遂に石狩平野の南部と一致するに至る。錨地は全然發達せず。

尙北海道本島の海岸は人文との關係に於て本州と趣を異にするものあり。前述せし如く、北海道沿岸は肢節の發達甚だ少なく、且つ自然の良港も亦著

しく缺乏せるが故に、海岸交通上劣位にあることなり。従つて海岸地の開發も甚しく遅々たるが如しといへども、其實際に徴してこれを觀るに、港灣の發達すると否とに拘らず、苟も斷崖絶壁にして居を定むるに甚だ不適當なる處、若しくは自然の特殊なる障害あらざる以上は、村落小都邑發達し、全沿岸を廻れるの觀あり。こは實に本州諸島に於て殆んど常に見ることを得ざる現象にして、此等都邑の發達は海岸の人文的發達に對し適當せるにはあらずして、全く他の原因より來れるものなることを證す。後章交通以下の條に於て述ふる如く、北海道の開發は概ね先づ第一に沿岸に始まり、其より漸次内都に向へる順序を取れるを以て、沿岸都邑の後背地の時に殆ど人文の進歩を見ざる如きは、之を證して餘あるものといふべく、本州地方の海岸諸聚落の一方沿岸生業によりて成ると、同時に他方面に於て海陸の間に立ち兩者其の經濟的連鎖をなすものとは事情を異にせり。換言すれば北海道沿岸の大小都邑の多數は、概ね經濟上より見たる後背地との關係甚だ少なきものにして、單に海上より一切の生命の諸要素を得る者に過ぎず。故に一朝この海上に於

本島の島嶼

ける生業若しくは其他一切の經濟的事情にして、一たび障礙に會はんか、其の都邑は衰へ若しくは全滅することあり、是に反して海面との關係圓滑好調を呈する時は、景氣頗に昂り隆々として發展する者尠しとせず。千島列島を除き北海道本島の沿岸には島嶼甚だ少なし。千島は後條記載肢節部の沿岸は、其西南に近く奥尻島並びに大島小島の兩火山島あり。奥尻島は其近き渡島半島と地形構造略相類似し、沿岸出入亦見るべきものなく、漁村の其縁邊を廻れるあるのみ。驅幹部の沿岸には西方海岸に近く天賣燒尻の二小島と利尻禮文の兩大島とあり。天賣燒尻の二島は其構造地形前述せし如く主に第三紀層より成れる低平なる島にして、其輪廓稍圓みを呈し、沿岸平滑にして錨地全くなし。利尻禮文に至りては、前者は高き利尻富士を起せる火山島にして、沿岸一般に高く出入又乏しと雖、避難港なきにあらず。禮文島に至りては彼れに比して稍低く、概ね第三紀層より成り、中央に稍高き火山を見れども、全體臺地性をなす。利尻の圓きに對して、細長にして北部に一小灣をなし、又避難港をなす。驅幹部の東部には、花咲半島の東北に構造

上之と連絡せる水晶群島あり 孰も主として第三紀層より成り、表面低平にして沿岸半島に類似せる小出入を見る。然れども船舶の碇泊に適せる好錨地は全く之を缺けり。

左に北海道本島の全沿岸に就き順を追うて述べん。

一 本島南海岸

北海道南海岸は渡島の白神岬より根室國納沙布崎に至るまでの間の海岸を指し、自然の形勢により次の數區に分つことを得。

津輕海峡沿岸

津輕海峡 津輕海峡は本州と北海道本島とを分てる我國の重要な海峡にして、其方向約東西に走り、長さ約六十哩、幅は前述せし如く兩端に於て最も狭く約十哩を上下すれども、中間は擴大して三十哩に達す。北岸は即ち本島の南岸をなせる處にして、沿岸は二三の突角により北に向つて入れる三箇の灣入をなす。就中其最も北に入りて形の美しきは函館港なり。先づ西より之れを辿れば、松前半島の南端には本島の最南端をなせる白神岬あり、本州

津輕半島の北端をなせる龍飛崎と相對して、この海峡の西口を扼し、附近は險崖なり。其位置の南端にあると其岬邊の潮流險惡なるにより白神岬燈臺建設せらる。鐵造六角形黑白横線塗第二等回轉紅白光燈臺にして、一回轉四十秒毎に紅白の二光輝を互發す。晴天光達十七哩。霧中信號ありて霧天には一分毎に霧笛を鳴す。古來北海道に渡るものゝ間に喧傳せらるる龍飛白神中の潮の語は實にこの燈臺の有用を説くものなり。

白神岬より海岸は東北に向つて屈曲し、矢越岬に至る。此間海岸の地形は全く山岳の地にして、前面福島の小錨地を擁する外全く船舶の寄港すべきものなし。矢越岬の北々東に接して狐越岬あり。是より龜田半島の南端汐首岬迄の間は地形の條に述べたる如く、沿岸の地形稍前と趣を異にし、低平なる砂地横はり、美麗なる段丘諸處に發達せり。方向は狐越岬より正北に向ひ、後東北に偏して木古内灣に及び、東に偏して遂に函館港に至り、良好なる灣形を畫く。この木古内灣は弓形をなせる一開灣にして、後背地はよく耕作せられ、村落附近に多し。函館港は西は葛登支岬東は函館半島の南角大鼻岬を

港口とし、北に彎入すること約五哩、その幅約四哩半、灣の内部は既に地形の條に述べし如く、函館山と龜田半島との間に生せし砂嘴に向つて東南に突入し、此處に港市函館區あり。灣内の水深は十二尋乃至十七尋ありて灣頭に向ひ漸く淺し。葛登支岬には燈臺の建設ありて函館に入る船舶の目標をなす。木鐵混造八角形白塗第三等燈臺にして明暗白光は晴天光達十七哩。霧天には一分間に六回づゝ鳴る霧中信號を備ふ。函館山は津輕海峽の要處を擁するに より要塞地たり。函館港は以上兩岬の間に成れる自然の良港にして、安政六年以來我國の開港場として名高く、全島の咽喉となり、現時猶頗る盛大なり。但し經濟上樞幹部の發達盛なるに従ひ、人工によれる小楡に對して一籌を輸するの傾きあり。尙函館山に就て一言すれば、前述せし如く昔時の火山島にして、其最高部は略北に偏し、三百三十一米餘あり。この山は一名藥師山と云ひ、其の南角は大鼻岬、北端は辨天岬と稱す。港は辨天岬に起り、半島の北側即ち前述の砂嘴を廻りて西方に彎形を畫き全景觀恰も巴字に似たり、函館の雅名巴港と稱せらるゝ所以なり。市街の西南部はこの山の北東側より起

り、是より東北に向つてその砂嘴に及び、風景甚だ佳なり。一般に東北部を除き、他の各方面何れも岸高く、殊に南方津輕海峽に面しては急崖をなし、怒濤の常に洗ふ處とす。函館港の北側は低地の發達著しく此處に上磯と稱する大邑あり。この平地は北に向つて漸次狭まり、北海道縦貫線(函館線)を北に導く。函館半島より東には汐首岬あり、此間十數哩砂濱にして干出岩暗岩を以て縁どり、内側は概ね臺地をなす。汐首岬は龜田半島の南端にして、本州の下北半島の北角大間崎と相對し、津輕海峽東方の狭き入口をなす。一般に背後の地は高く、附近の水深又頗る大なり。尙黒潮の北東流するもの此に衝突し、爲に強烈なる湍潮を起し、航海者を苦しましむ。又此の附近は日本海に起れる潮流の東向せるものと太平洋に起りて西向せるものとの會同する處にあたり、殆ど高潮時を共にするを以て、漲潮流はこの潮流と反流を起すこと屢あり。汐首岬燈臺は鐵造圓形白塗第三等に屬し、不動白光晴天光達十七哩。燈臺内には蒸氣霧笛を設け、霧雪或は冥濛なる天候に際會すれば毎一分に六秒間の一聲を吹鳴す。靜穩なる日には其音響約四哩に達す。

沙首岬より東北方惠山岬に至る間は、海岸の形勢全く前と異なり、一般に險崖相次ぎ多少の出入は之れ有り、雖、船舶を寄すべき地は全く見る可らず。此間險礁の擴延せるところにムイノ島、七個の巨岩の峙てる七ツ岩等あり。惠山岬は龜田半島の東南角に噴出せる惠山火山の東南側即ち是が直ちに海水に落つる處にして、附近赭黒の岩塊を以て蔽はれ、岩礁群立危険云ふ可らず。又夏期は濃霧屢懸り、古來航海者の非常に警戒する地點に屬す。惠山岬の北角に燈臺建設せらる。鐵造六角形白塗第二等回轉白光にして、十五秒毎に一光輝を發す。燈高は高潮面上四十三米餘、晴天光達十七哩、霧笛の設けあり。以上白神岬より惠山岬に至るまでの海深に就て、これを觀るに、一般に深度大なる津輕海峡に面するを以て、沿岸屢水深大なる處を存すれども、其中にて淺き處は、木古内灣函館港附近の地にして、其背後地に接しては、往々十尋に達せざるところあり。深海盤は惠山岬と下北半島尻矢崎との間より入り、漸次此海峡の延長せる方向に従ひて西に進み、同海峡中の中央部に於て最も廣し。但し其の最深部は沙首岬と大間崎とを連ぬる地點より少しく西に

海深

渡島東北外岸

偏し、殆ど百七十尋に及ぶ處あり。尙白神龍飛兩岬の間は東口に比して淺く、百尋に達する處なしと雖、其西側即ち西口の出口に當りては、最深き處百九十尋の小海淵横はる。これより西は又海底高まり小島の火山島を越えて西に至り、急に二百尋以上の深さとなり、以て日本海盤に落つ。惠山岬より駒ヶ岳の北麓なる砂崎迄の間は、即ち渡島の東北外岸にして、惠山より駒ヶ岳に連なる諸火山其他龜田半島をなせる諸山岳の東北斜面にあり、沿岸殆んど低地を缺き、何れも傾斜地に屬す。海岸の方向は概ね東南より西北に走り大なる出入を見ずと雖、諸處に淺灣小突出なきにあらず。惠山の西に接せる檜山火山の北麓には、其北にあたる銚子岬との間檜法華灣ありて、偏西風に對し小避難港をなす。銚子岬より西北出來洞崎との間は海岸の方向緩く内地に入り、此處に白尻鹿部の村落を控へたる彎入あり。就中白尻は一方に辨天島の礁脈を有し稍良好なる避難地をなす。是より鹿部に至る間は、礫濱を以て名高く小船と雖近接すべからず。斯くして出來洞崎より西北に至れば、全く駒ヶ岳火山裾野の海に落ちたる部分にあたり、此處に北

内浦灣沿岸

に突出せる砂崎あり。

内浦灣は噴火灣火山灣・膽振灣の別名あり。渡島の砂崎を南角とし、室蘭港の南東なるチキユー岬を北角とせる正圓に近き一大灣入にして、北西にむかひ入ること約二十八哩、灣の深さ概ね規則正しく、灣口に於ては約五十尋以下なれども、中央部に進むに従ひ、稍之より深し。灣の沿岸は前述せし如く、東北部の室蘭港を除き出入の見るべきものなく、殊に其西海岸の如きは甚だ規則正しき弓形の砂濱をなせるが又處々に小船舶の寄港地なきにあらず。先づ南岸より北岸に進めば砂崎の西、駒ヶ岳の西麓にあたり、渡島の縦貫交通線の來り會同する處に森港あり。背後部は駒ヶ岳・二股山その他の山岳に及ぶまでの間、稍廣濶なる平夷地をなし、唯岸近き處に於て礁崖をなせる砂濱を見る。此港は浪に對し何等の防禦もなきを以て良港と稱する能はざれども、内浦灣小航路の重要寄港地をなせり。之より西北に走り靜狩に至る六十哩の間は、始め西北に走り、後ら北方に向ひ、礫濱砂濱相交はり、海底一般に淺し。而して其内陸部には常に渡島半島の諸山岳或は近く或は遠く是に臨み、

その間海岸方向の急に北方に轉する處即ち遊樂部河口には、農村を以て名高き八雲あり。八雲より靜狩に至るまで、沿岸に大村の見るべきなく、唯靜狩に近く、長萬部あり。長萬部は此沿岸の大村にして、森村より内浦灣の西岸を傳うて北進せる鐵道函館線は、此處より岸を離れて内地に入る。

靜狩より室蘭港に至るまでは、海岸始め東に向ひ、後東南に轉じ、其間幾多の岩角或は淺灣相連なると雖、要するに後背地は殆んど常に膽振の中央に聳立せる火山彙の沿岸にあるものに直接し、隨處に險崖横はり、船舶の以て安全なる碇繫をなす處少なし。先づ靜狩より辨邊の小錨地に至るまでには、有名なる禮文峠の峻坂あり。昆布岳と連なりて此處に險崖をなせる突出をなし、樹木鬱蒼其上を蔽ひ、尖岩其麓に聳立し、夙に豪宕雄偉なる景を以て世に知らる。辨邊は膽振の北方に一大開拓の原野を控へたる俱知安に通ずる一要津にして、其背後には一小河谷ヌッキベツ北に通じて以て俱知安との産物輸送の道路を導く。辨邊より東南に向ひ虻田に至るまではモロモイ山・有珠岳等の諸火山の裾野にあたり、險崖礫濱相次ぎ、是より有珠火山の東南にある西

紋鼈に至る間は、稍、低平なる砂地の擴がれるを見る。一は虻田より東南少許の處に存し、一は有珠火山と西紋鼈との間有名なる長流川の河口に發展するもの是れなり。後者はこの附近にありては、比較的長大なるものにして、河谷は北より南に向つて漸次開展し、其左右の地には段丘發達し、尙河口の東西側はこの四近にて有名なる沖積平野を形成し、幾多の開墾地農村發達せり、虻田の小平砂地と長流川の低地との間に横はれる險崖は、近來活動を以て有名なる有珠火山の泥流の末端にあたり、不規則なる彎入又は突出に富み加ふるに其の泥流の邊緣離脱せしものと見るべき大小の島嶼其間に群るを見る。有珠と稱する小村落は即ち斯くして成りたる小灣有珠灣頭にあり。有珠灣内は殆んど三分の一は火山灰を以て埋没せられ、低潮には干出す。然れども底質は頗る投錨に適するを以て灣岸の露岩暗礁を侵して航行する小船舶には、頗る良好なる避難港たり、西紋鼈も亦通例紋鼈の名を以て稱せられ、沙底にして碇繫に適すと雖、偏南風に對しては全く之を防ぐこと能はざるが故に、錨泊甚だ不完全なり。然れども室蘭港との間には、定期汽船の航通あり。西

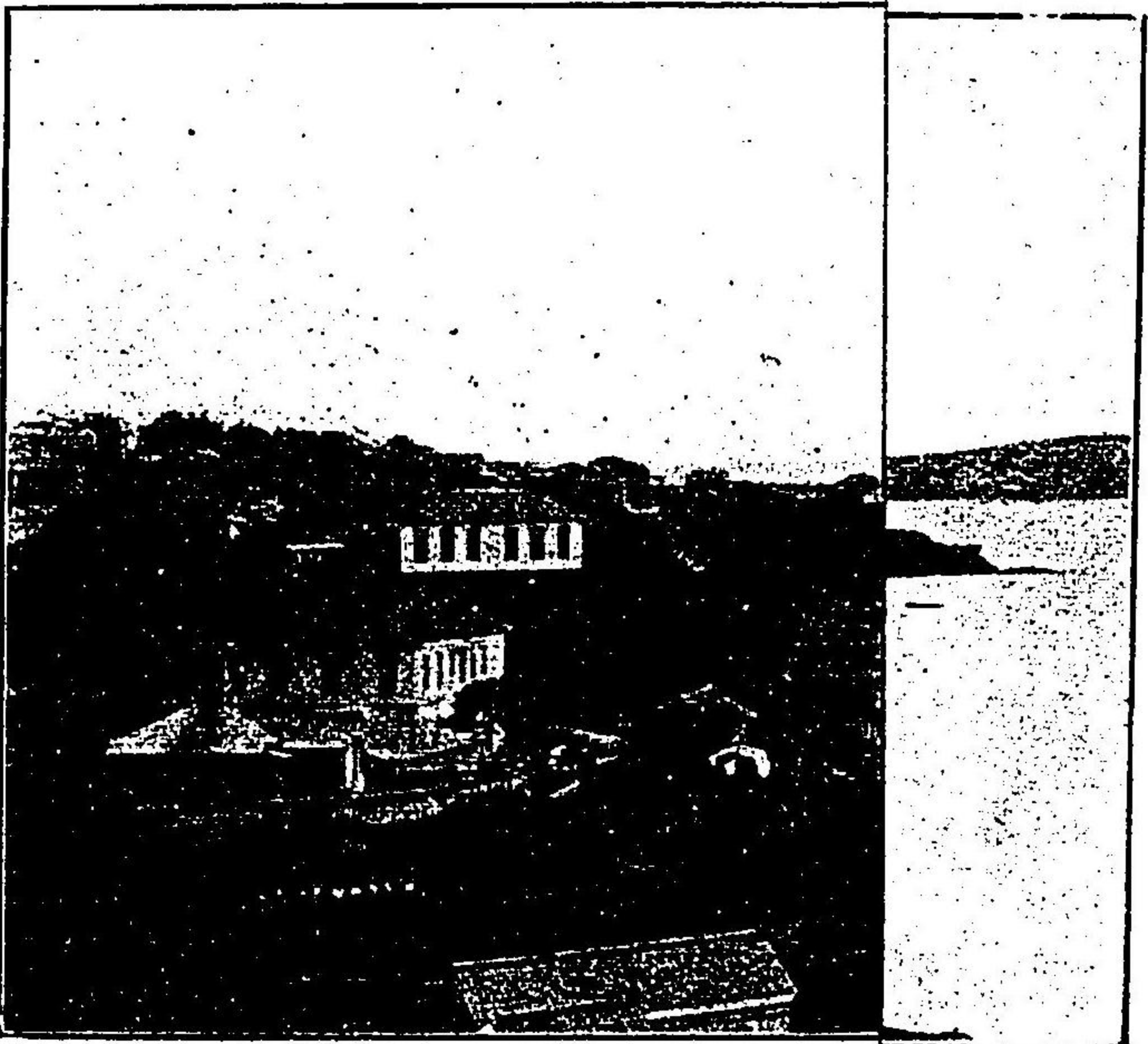
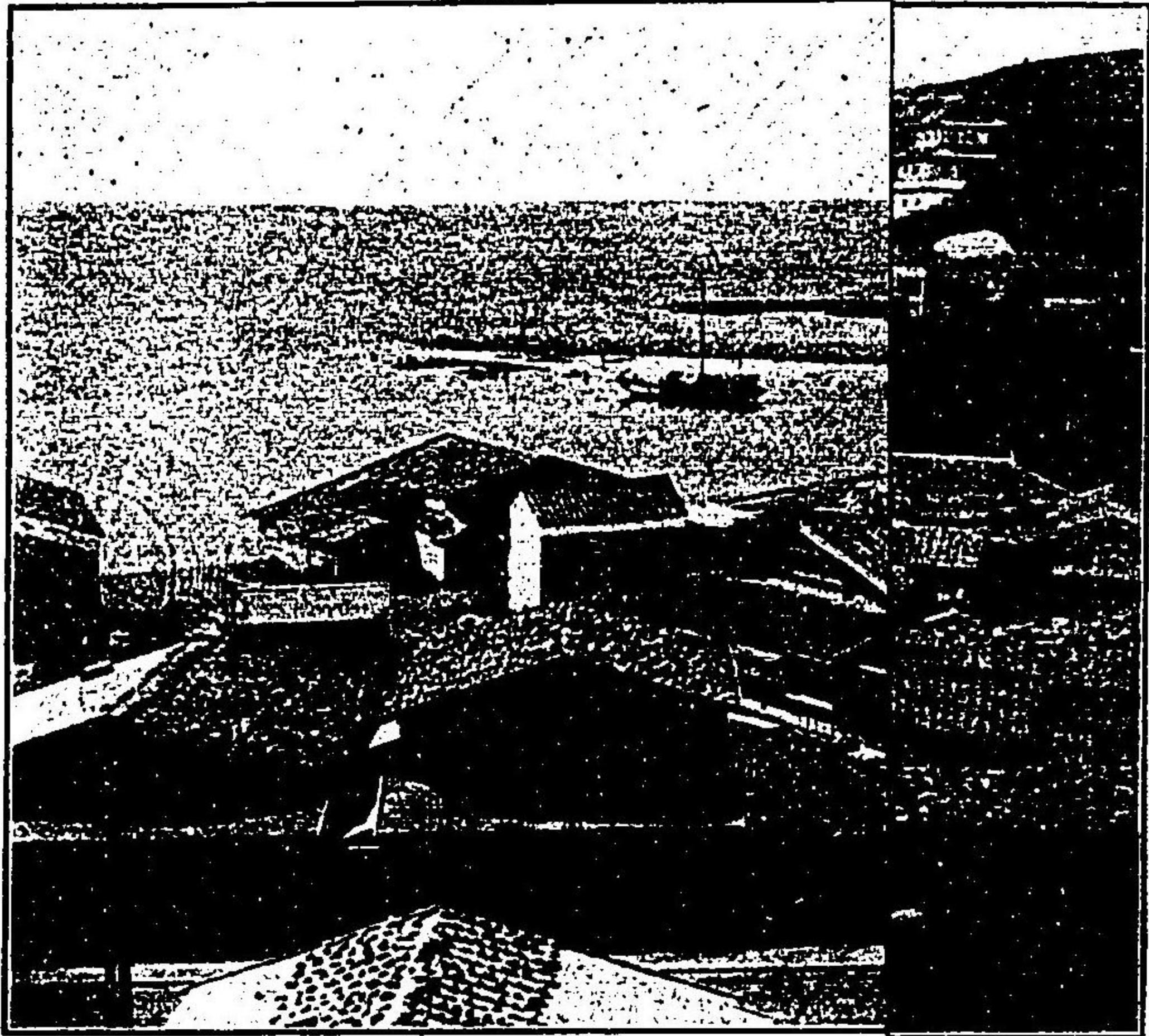
紋鼈の南、膽振の南角と見做すべき半島の西岸を進めば内浦灣の一支海西より此半島を缺壞したる如き觀を呈せる室蘭港あり。港形頗る函館港に類し、彼の函館山と見做すべき小半島は、此處に又港の南を圍繞せる丘陵性山岳となりて現はれ、其最高點測量山に於て二百米餘を示し、室蘭の港市は此南東側に發達す。但し函館港にて函館山と龜田半島とを連ねたる砂嘴に相當すべきものは、此地にて小丘陵地となりて現はれ、港の東北輪西附近に及び低平なる沖積質の草深き小平野となれり。室蘭の港口は測量山の半島の北西角エソルム崎より其北方灣口に當りて横はれる大黒島を経て、港の北岸ホテイシ崎に至る一線にして、この港口の幅は、大黒島の南方は約半哩、北方は一、二、兩口共に航行し得べし。港の幅は大黒島より輪西の西岸に至る東西の距離約三哩半室蘭の埠頭までは此線より南方に折れ、約三哩を數ふべし。(南北の方向灣内深さ約七尋夏期の偏東風に對して、極めて安全なる錨地なるも、冬期北西風強く吹く時は、大型の汽船は碇泊困難なり。然れども港市室蘭は北海道樞幹の開發と關係せる重要なる開港場なると、其の東灣の東南側には有名

なる日本製鋼所建設せらるを以て、函館並に本州青森との交通連絡夙に行はれ、本島軀幹部の一關門として艦船の碇繋頗る頻繁なり。大黒島には燈臺あり、木造六角形、黑白横線塗、不動白紅光、晴天光達九湮、霧笛あり。室蘭港の外側を形成する半島は、其沿岸一般に險崖にして、附近には礁脈横はり、低潮には干岩處々に延布せり。猶海底は岸近く陡界をなせり。此半島の南角はチキュー崎なり。

本島中央南岸

中央南岸はチキュー崎より日高國の東南角襟裳岬に至る北に向つて淺く灣入せる區域にして、海岸の變化極めて乏し。先づチキュー崎より東北石狩平野の南海岸勇拂に至るまでの約三十九湮の間は、全く凹凸なき弓形岸にして、始めは膽振火山群の南部をなせる諸火山の裾野其背後に迫り、濱海に近く數十米の急崖をなし、海との間の狭き平野に落つるを見れども、東北進につれ其距離漸く遠かり傾斜極めて緩なる後背地は、恰も高原の觀を呈せり。而して其落ちて急崖を成せる處と、汀渚との間の海岸平野は、東北に進むに従ひ益々廣く、苫小牧に至りて遂に石狩平野と連なるに至る。尙陸上の地形斯の如く

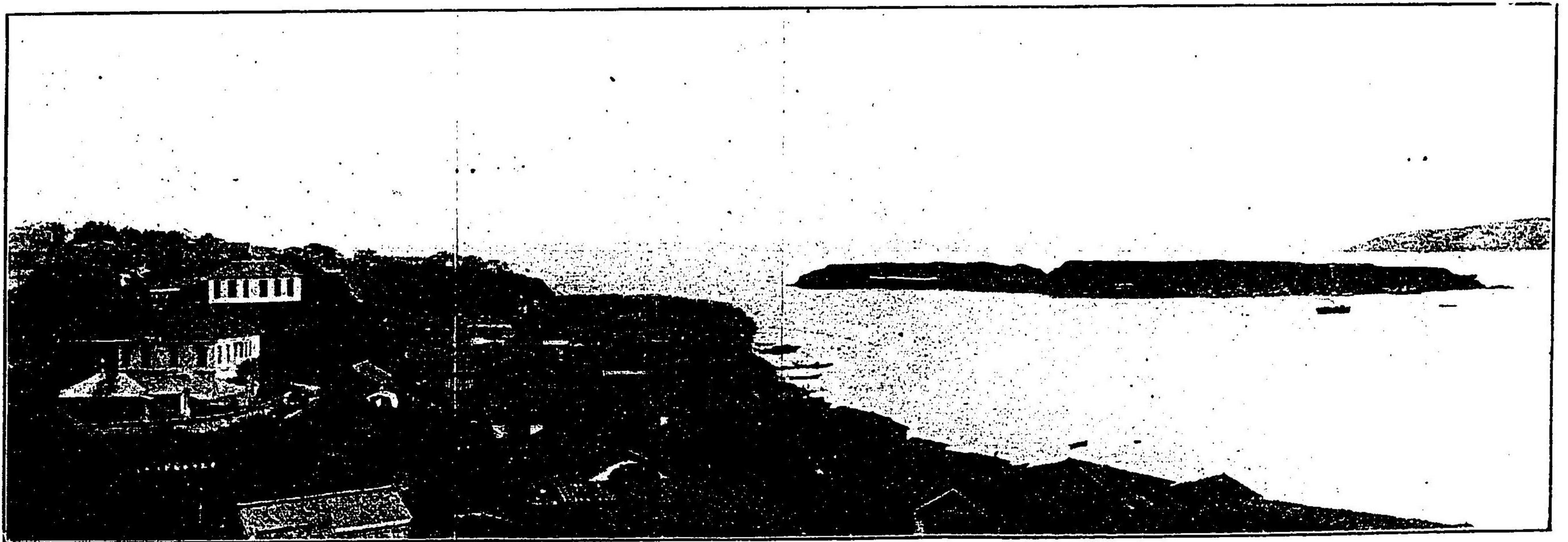
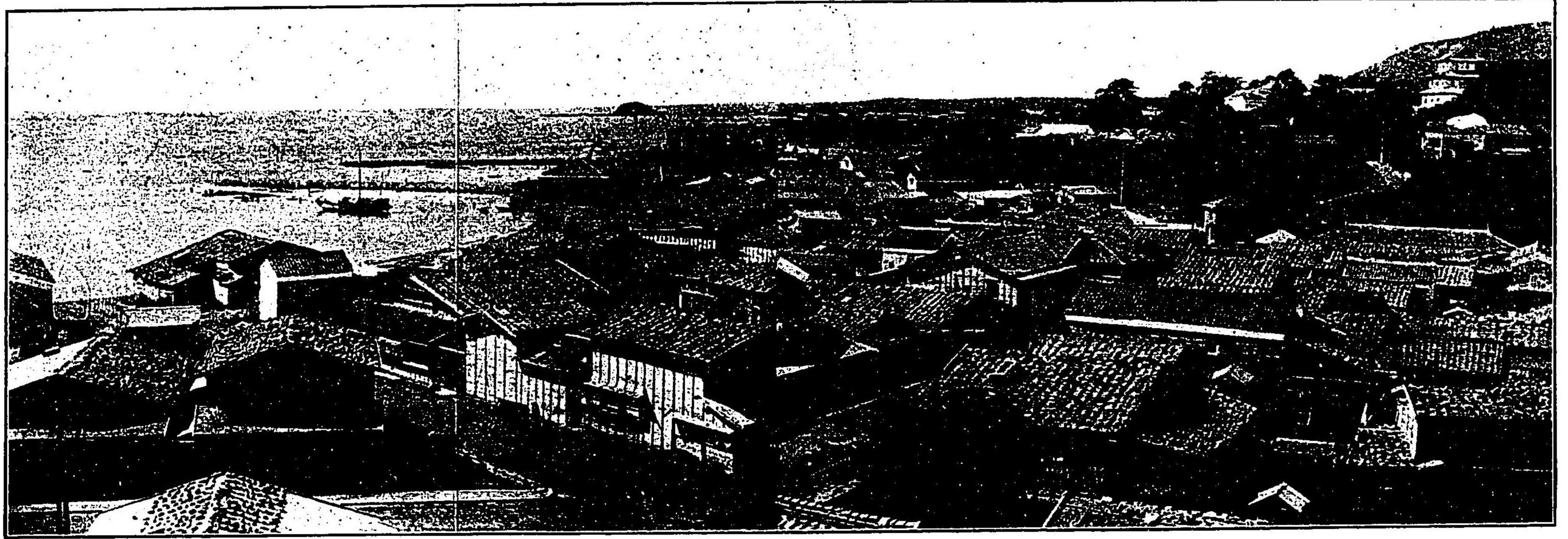
街



(島)

(第十一圖)

街市の港山福國島渡(甲)



(島島はる在に面前) 港 差 江 同 (乙)

く規則正しきのみならず、海深にありても猶同深線は漸次に下り、二百米の同深線は八九哩の外を走れり。要するに此全海岸の中には二三の岩崖角なきにあらざれども、概ね一帯の砂濱にして、濱邊は常に浪激しく着船の地點更になし。この海岸に沿へる火山の有名なるものは、登別岳・白老岳及び樽前岳の諸火山なり。苫小牧は樽前岳の東麓に起れる名邑にして、これを除けば此沿岸特に顯著なる村落なし。勇拂より海岸は東南に轉じ、多少の緩き屈折をなして襟裳岬に至る、延長約八十哩。此間勇拂より日高の門別に至るまで、海岸全く砂濱にして、後背地は概ね平野の連続せるものか、若しくは低き丘陵地なれども、門別より東南は日高山脈の東南麓に發達せる第三紀の臺地を其後に控ふるを以て、臺形の小丘起伏し、短き河流は瀕々としてこれを開圻して、此處に口を開き、岬角二三此單調を破る。この地方は有名なる耕地、又は牧場地にして、シモケ下下方城布浦河等大小の名邑相連なる。是等は共に殆ど港形をなさざる處なるが故に、只單に小型汽船の寄港を見るに止まり、未だ錨地を以て稱すべからず。唯浦河は支廳の所在地なる上に附近海陸物資此處

に集まるを以て、函館幌泉間の定期汽船は此處に寄港す。市街の背後に燈臺あり。木造四角形黒白横線塗、不動白光、晴天光達九湮、浦河より襟裳岬に至る間は、海岸の状勢略前に同じと雖、後には數百米時に千米に及べる山岳群起し、前面の海岸は又多少の曲折をなせるが故に、砂濱礫濱相交はるに係らず、稍可良なる小錨地なきにあらず。先づ浦河より東南東七湮にして、様似錨地あり。様似と稱する小半島の東方は水深二尋乃至四尋にして、西風強吹の時は小船船此地を以て避難地となす。此處に様似村と稱する漁村あり。様似より東南方十二湮にして幌泉あり。襟裳岬を西北に去ること約七湮、其背後は一千米を越えたる高山脈聳立し、前面砂濱なれども附近にある礁脈劈開して砂底の灣を作り、船舶を碇繋せしむ。然れども錨地の規模固より小なるが上に、距岸一湮以内砂底を擴むると共に岩礁諸處に散點するが故に小汽船錨泊するに過ぎず。漁村幌泉は此處に起り、函館との間日日汽船の來往あり。燈臺は一岬角に建設せられ木造四角形白塗、不動紅光、晴天光達七湮、襟裳岬は岩多き斷崖角にして日高山脈の臺地形をなして海に落下する部分にあたり、岬端礁脈

襟裳岬

擴延し、數個の露岩散布す。實に北海道軀幹部の南角をなせるものにして、遠く太平洋に突出し左右は西北若くは東北に連なれる大なる弓形をなして、一は室蘭のチキニ崎一は根室の納沙布岬に達し、その勢宛も隼の宗谷岬を尾として兩翼を張り、南に向つて飛行すと見るべく、この部はまさに其嘴に當る。此處は又氣候潮流其他自然地理上の特態を有するを以て名を著す。例へば津輕海峽を西より東に通過する暖流の夏季日高の岸を東南下するものは東北千島の海岸より釧路十勝の外岸を西南下せる寒流親潮と此地點に於て會同し往々咫尺を辨せざる濃霧を起し、航海者を苦ましむる如きは此一例と見做すべきものなり。嘗て明治二十七年及び同二十九年の七月に於て此濃霧は二十九日間連續したりと云ふ。根室と共に濃霧の最も多き處と稱せらるゝは偶然にあらず。其他風力も常に強く暴風雨の平均日數一年百八十日を越え、最多は二百日に及ぶと云ふ。且つ氣溫の分布並びに雨量の分布上より見るも殊に注意すべき處なるは、後章氣候の條に於て見るべし。附近の地形何れも險にして好上陸地なく、風浪常に此處に激す。岬の背後は地勢漸次隆起して北

海深

本島東南岸

に向ひ豊似登頭トコニヌブに及ぶ。豊似登は尖峰にして高さ九百三十五米に達し、遠望顯著なるを以て知らる。岬上に燈臺あり鐵造圓形白塗第一等。回轉白光にして三十秒毎に一光輝を發す。晴天光達二十一哩。該燈臺には霧笛の設置ありて、霧雪又は溟濛なる天候には每一分に七秒間吹鳴すと云ふ。

尙海深に就て前述せる所を補へば、二百米の同深線は概ね沿岸に接近すと雖、海棚の比較的幅廣き處は、勇拂の近くにして三十哩の外を走るも、日高の沿岸に至れば、漸次其幅狹縮し、碓布附近に至れば漸く海岸より五六哩の處に近づき陸上を通じて顯著なる階段地をなす。

本島東南岸は襟裳岬より本島最東端根室の納沙布崎に至る間を稱し、中央南岸と異なり、二三月の頃(時に四月)流水の夥しく襲來する部分に屬し、尙夏季數箇月間は濃霧殊に甚しきを特性とす、此の東南岸も亦其海岸の形勢よりして自ら長略、相等しき西南部と東北部とに分たる。其西南半は襟裳岬より釧路川の河口に横はれる釧路港迄の間にて、日高の東南岸と釧路の一部分との外は十勝の全沿岸を包括し、概ね弓状を呈せる砂濱より成り、且つ其背後の

の地も十勝より釧路に連なれる第三紀層の臺地を控へ其之れと接近する間には往々潟湖の發育せるを見る。尙沿岸は概ね諸處に砂丘發達して、好箇の錨地殆んど全く之を缺けり。但しこの沿岸の最南部日高山脈の縁邊をなせる處は之れに反して後背地は高く沿岸亦極めて少許の出入をなし、砂濱は殆んど見るを得ず。他の一半は釧路と納沙布崎との間を稱し、釧路の大部分と根室の一部分に屬す。此地は前述せし如く、北海道本島の沿岸として、小肢節の發達著しき所にして、半島あり灣入あり。又島嶼散布して小錨地諸處に發達す。其後背地も一樣にこれを論ずること能はざるも、本島の東南部に發展せる第三紀層の臺地此處に迫り來り、濱海往々絶壁をなす。而して此方面には本島の東部漁場として重要なる地なるを以て、前者の沿岸にては、比較的名邑大村少なきに反し、此には都會大村落諸處に散布せり。

襟裳岬より釧路港に至る約八十哩の海岸は、其方向西南—東北に弓形をなし、其の間十勝の茂寄に至る二十三哩は、始め百人濱と稱する砂濱をなし、後には礫濱險崖交々相接し、加ふるに暗礁露岩諸處に起り、殆んど船を寄す

可からず。こゝにて國境に近く、猿留と稱する此附近に於ける重要な村落あり。茂寄は前述せし如く平岸と險岸との接合地に於ける錨地にして、これが灣形全からず。碇泊場としては甚だ劣れるものなりと雖、附近には尖岩簇立せるにより、南東方の波浪を防ぎ、汽船屢寄港す。茂寄より釧路に至る約六十哩の海岸は、前述せし如く直條の砂濱にして、此處に十勝川其他幾多の小流口を開く。このうち十勝川の西南には、地形の條に述べし如く、湧洞以下二三の海岸湖あり。十勝川は其下流大津川十勝川の二つに分たれ、其中大津川の河口にある大津は、北海道廳の命令航路の一端に當り、函館との間汽船往來す。但し河口は淺く且つ波高くして、艦船の出入甚だ不便なれば、單に經濟上の必要に應じて起れるものたるに過ぎず。蓋しこの大津は有名なる十勝平原の開墾地に對しては、海上よりの咽喉たればるなり。

十勝川の河口より東北に進むこと少許にして、釧路との國境に近く岸に沿ひ長大なる礁脈あり之より釧路に入れば、尺別白糠庶路等の漁邑あり。庶路より釧路港に至る間は、地形低平にして、阿寒川釧路川の沖積平原ひらけ、

卑濕の地諸處に横はる。釧路港は本島の東南岸の略中央に位せる有名なる開港場にして、釧路川の河口の左岸に方りて同名の港市を發達せしめ、前面に知人礁知人瀬の二礁脈ありて、冲合より來れる波浪を碎き、西北より東北に至る風には、極て安全なる碇泊場たり。數年前北海道横斷鐵道新に成り、同地との連絡容易となりしたため、水陸の產物此處を集散の中心となし、市況近年殊に活氣を呈せり。函館根室との間汽船常に往來すれども、冬季は往々根室との間流水のために航路絶ゆることあり。夏季も亦濃霧のため、此航路中絶する虞少なしとせず。港界は知人鼻に設けられたる燈臺より、真方位西二哩に引きたる一線以北及び該線の西端より真北に引きたる一線の東なり。釧路崎燈臺は木造八角形黒白横線塗第六等回轉白光にして十五秒毎に一光輝を發す、晴天光達十四哩。此港より以東厚岸に至る約十八哩の間は、高さ百米を前後せる臺地常に背後に迫り、概ね砂濱若くは礫濱にして、岸近く岩礁點々相連なる。其の間昆布森跡永賀等の漁村あり。厚岸灣は釧路より東に向へる沿岸の急に北に向つて彎入せる部分を領し、其灣口は釧路より東に走れ

厚岸

る尖端、尻羽一名仙鳳趾鼻及び其の東方大黒島其北方に横はれる小大黒島より厚岸半島に至る間を連ねたる一線にして、此尻羽厚岸半島間の最短距離は幅約五哩、圓みを呈し、最深約十尋西北より北に亘りて一帯に淺所横はる。この灣内には礁脈諸處に横はれる以外に、灣口南に開けるが故に、偏南風の強吹する時には船舶の航行頗る困難なるを以て、風向に對して投錨の位置常に移動せざる可らざる不便あれども、概して錨地として水深適當なるにより、本島東部の港としては重要なるものなり。港は概ね巴形を呈し、南方より北に入るに従つて、漸次狭まり、其東北部は更に狭き口を以て、厚岸沼・牡蠣沼と連結す(地形部参照)。港市厚岸は此兩者を連絡せる一小水道の南即ち厚岸半島の北角を占め、北海道廳の命令航路尻に開始せられ、四季を通じて函館根室間の定期航路その他の船舶寄港す。厚岸灣附近の地は、尻羽の半島部は勿論、厚岸半島も約百米の臺地をなせる處にして、灣の北方に稍高度小なる廣潤の地を控ふ。故に附近の重要なる交通線は、灣の北方を過ぎ、鐵道線路も厚岸市外の海岸を通過する豫定なり。なほ厚岸沼は東西四哩南北三哩の鹹湖

にして、其中に長蛇形をなせる數座の平低島あり。是等は悉く牡蠣の堆積より成り、水面を抜くこと一二尺に過ぎざるを以て、牡蠣島と總稱せられ、島と湖口との間は牡蠣の蕃殖夥しく、海底一面に此貝を以て蔽はる。厚岸港には大黒島に燈臺あり。木造六角形白塗第五等不動白光にして晴天光達十哩厚岸半島の東北東沿岸は、幾多の孤狀の小灣入を連ねて、遂に根室半島に及ぶ。この海岸は概ね峻壁にして、背後は臺地形をなし、各處一様の觀を呈し沿岸諸處に岩礁の散點するを見る。先づ其主なる灣入を述べれば、厚岸より十哩にしてケチボク(險暮歸)其東北霧多布島との間に枇杷瀬の漁村を有する一小灣あり。灣口は勿論其内部にも岩礁少からざるを以て、小舟の外入る可らず。其北即ち霧多布島の北岸に霧多布の錨地を有す。但し灣口東方に開くを以て、偏東風に對しては稍缺點あるを免がれざれども、霧多布島の東端より北に亘りて、帆掛岩・白岩其他附近に礁脈存するが故に、碇錨稍安全なり。従つて港市霧多布村は、四近漁業地の中心をなせる巨邑なり。尙この島は地形の條に於て述べたる如く、元と陸上と連絡せしも地變により相隔たれる離島にして、

落石灣

陸部との間は一橋を以て相連絡す。濱中灣の東方より根室に入り落石の小半島に至るまでの間は約十六哩あり。單調にして殆んど少しの出入もなく、砂濱低平なる丘陵に推移す。而して落石半島に近く、即ち其西方の一小灣落石灣に近づきて海岸と並行せる一大險礁あり、昆布盛と稱し、附近の險惡なる海流と共に航海者の常に怖るゝ所なり。其東なる落石灣は、西方に開ける鈎形の一灣をなし、北岸一帯遠淺なるも、北より東に至る風浪に對して假泊に適す。其東の落石半島は根室の南東端をなせる半島にして、其形狀銀杏葉の如く南方に擴がり、其地峽は約三鍵半、尖端を落石崎と云ひ燈臺を設く、鐵造圓形黑白横線塗第二等回轉紅白光にして、毎三十秒に一光輝を發す。晴天光達十八哩、尙遞信省の建設に係る無線電信局も此地に設けられ、本島東部の航海は勿論、我國とアメリカとの航路に對し燈臺と共に重要な任務を盡すことは人の遍ねく知る所なり。半島東岸は概ね亂岩險礁突出すれども其地頭に對して深く入込める所にあるボッキセン(暮霧磯灣は、落石灣と脊合をなし、東方より入る風に對しては、灣内平穩なり。然れども規模小なると淺灘險岩

港口に横はれるとにより小船の出入に適するのみ。これより海岸は東北進して花咲半島の南側を形成し、納沙布崎に終る。其形概ね西北に突入せる大灣を書けども、其間幾多の小突角南に出づるを以て、二三の開灣を作る。花咲半島は地形の條既に述べし如く、根室の東北に向つて細長く海中に突出せる半島にして、其軀幹部と連絡せる處は海水根室灣より南に突進し、これを窘約し殆んど大陸より離脱せられんとする觀あり。其間最も狭き所は僅かに二三哩に過ぎず。然れども其構造は全く根室の東南部と同一にして、半島の東北方に延長せる水晶群島と共に嘗つて連結せしものたることは曩きに述べたる如し。根室半島の基脚部南岸に昆布盛崎あり。この東方にウリリ(ユール)島モウリリ(モユル)島蟹島鳴島等の島嶼群あり。就中前二者最も大なり。是等は何れも低頂なる島嶼にして、四邊峭立し、且つ附近幾多の礁脈淺灘亂點す。この群島と根室半島との間は、ウリリ海峡と稱し、強南風の時には是等各島の風下の側は和船の避泊地たることあれども、一般に此海峡は大船の航行甚だ危険なり。ウリリ海峡を北に出づれば、其北方に花咲友知等の小灣あり。

花咲錨地

就中花咲灣の外何れも灣首淺く、且つ險礁諸處に散在するが故に好錨地と稱するを得ず。花咲錨地は納沙布崎の南西約十二哩に位し、チマウシ崎(長節崎)を西に、花咲鼻を東にせる口を以て北に彎入せる港にして、西より北を経て東北に至る諸風を避け、水深亦適度なるを以て、花咲半島南岸中第一の避難港たり。北方根室港との間陸路僅かに一里半を隔て、冬季根室港の結水中其補助港として極めて重要なり。花咲鼻には花咲燈臺あり。木造四角形白塗不動白光晴天光達六哩。此燈臺は毎年五月より十一月まで七ヶ月間は點燈を停止す。花咲灣の東に友知灣あり。友知灣は南に開口せる弓形の灣にして、其東南角友知崎との間には、友知島其他の暗岩小嶼横はる。これがため小船を除く外東より友知灣に入る船は、此間を通過すべからず。友知崎より東北納沙布崎に至るまでその距離約七哩半の海岸は、一般に稍屈曲彎入を見れども、沿岸島嶼岩礁横はり、一も船舶の碇繫に適する港なし。納沙布崎は本島の最東端にして、其の南方に隣れるコヨマイ崎(瑤瑤瑠崎)と共に、東北方に散點せる水晶群島との間に、コヨマイ水道を挟み、北海道沿岸航路の上に於て、殊に著

水晶諸島

名なる岬なり。附近一般に低く、海底には岩礁群るが故に船舶は此崎に近くに當りては、非常なる警戒を加へざるべからず。殊に納沙布崎の東方にあるカイガラ淺灘は、東南東より西北西の方向に二哩六鏈の間擴延し、瑤瑤瑠水道の東側を形づくれる灘上に數小嶼を出し、往々波浪を揚げ、益々この水道の航路を狭めしむ。この距離一哩に充たす。若し其れ濃霧起り風浪激しき時に方りては、水道の航進爲に全く停止せざる可からざるに至る。但し水深は水道の兩側は九尋乃至十六尋なるに係らず、中央に於ては一般に著しく深くして、三十尋乃至四十七尋なり。尙漲潮流はこの中央に於て南流すれど、兩側は反流を起し加ふるに激しき渦流を生ず。納沙布崎の上には、納沙布崎燈臺あり。木造六角形白塗第五等折射不動白紅光にして晴天光達十哩。別に霧笛の設置あり。

納沙布崎より東北に向ひ約三十哩の間に水晶諸島あり。就中主なる島は水晶志勃多樂の三島にして、後者はその東方なる色丹島と、幅約十二哩の色丹水道を以て相隔つ。各島共に低平にして目標となるものなし。就中水晶島は

瑠瑠水道の東に横はり、納沙布崎を東北東に去ること約四哩にして、其縁邊には亂礁横延す。島の南西岸に灣向南西に向へるボキセンベ灣あり。灣内水深甚しく大ならざれども、砂底にして投錨に適し、西及び南を除く外の諸風を避け、該島唯一の小船避難港たり。ボキセンベ灣の北隣にあたり、ベンザイトマリ灣あり。灣内一暗礁横はれども、濃霧の爲めに瑠瑠水道を通過すること能はざる船舶は、一時此に假泊し、以て霧の晴るゝを待つ。水晶島の南々東水晶水道を隔て、アキロロ(アキユリ)島ウリリ(ユール)島あり。何れも水晶島と同じく形状亂形をなして險礁暗岩附近に散在し、沿岸險崖峻壁ならざれば、砂礫濱によりて繞さる。ウリリ島の北岸にトコマ・トロモイの二小錨地あり。トコマは西にトロモイは東に位し、灣口共に北に向ひ、北風を除く外の風に對して、避難地に適す。然れども亦礁脈の難あり。以上三島の間は、暗礁淺灘少からず發展すれども、これを分てる水晶ウリリの兩水道の中央部は、深さ比較的大にして航行少しも障害なし。尙ウリリ島の東方にはバルカル島及びボンバルカル島の二島嶼あり。礁脈露岩散布し、又前者と異ならず。

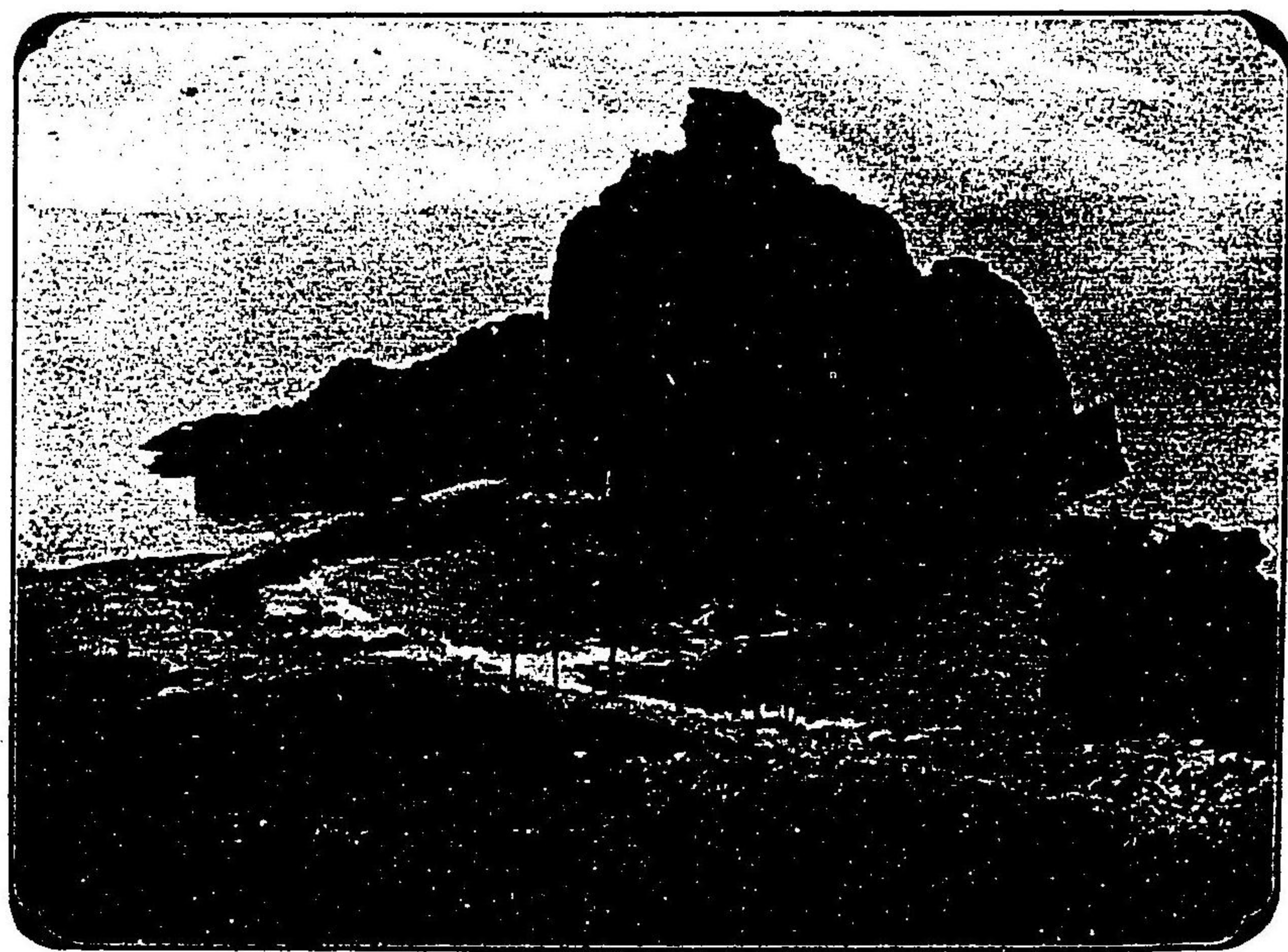
ウリリ島の東北には水晶群島中の中央を占め、其大さ最も大なるシボツ(志勃)島あり。其形前者の亂形なるに似ず、概ね不等五邊形を呈し、殆んど些の彎入なし。加ふるに島の周邊には岩礁群り、其外方は海底急に低下す。島と水晶島との間はシボツ水道と稱し、海底起伏不齊なる上に潮流不規則なるを以て、大船の通過に適せず。志勃島の東北に七湮の水道即ちタラウ、水道(多樂水道)を隔てタラウモシリ(多樂島)あり。前述せし如く水晶群島の最東部に位し、其東北に色丹水道を隔て、色丹島を望む。此島も亦低平にして、形状凡そ東西に長き亂形を呈し、縁邊砂濱又は險崖なり。南岸は殆んど全く出入を缺けども、二三の岬角突出し、其間小船の假泊に適せる彎形あり。島の周邊は又暗礁横はれること諸島の如し。其東南部には數湮を隔て、ト、島カプト島其他の岩礁あり。是等は海獺群集の地を以て聞ゆ。要するに是等水晶諸島は悉く無人島にして、夏季の間のみ漁業地となり殊に有名なる北海道昆布は主に此群島にて採集せらる。

本島東南岸の海深に就て一言すれば、中央南岸の東部に於て、一旦陸岸に

海深

近づきし二百米の同深線は、襟裳岬に至りて再び遠かり、其より後は島形に
 従ひ、北に折れ、釧路厚岸附近の沖に至りて、再び陸岸に近接せるが如しと
 雖、日高の一部に於て見たる如く、比較的これに近接することなくして、
 概ね遙かの外方を過ぎり、水晶諸島並びに色丹島を連ぬる島列の外を繞り、
 急に西に轉じて擇捉島との間なる國後水道に突進して、オホーツク海盤に連
 なるもの、如し。換言すれば千島は國後擇捉二島間には二百米以上なる細長
 なる海窪横はるもの、如し。此線以内の陸岸は、即ち此東南岸外方にある海
 棚にして、其傾斜甚だ緩に、殊に十勝の沿岸の如きは、海底漸下の状甚だ緩
 慢にして、百米の同深線は平均距岸約十哩の處にあるもの、如し。尙水晶諸
 島の附近は海深甚しく小にして、各島嶼の間は殆ど廿米を越ゆる處少なく、
 此等は附近に發展せる海棚上に、淺く低平なる頂邊を露出するに過ぎず。然
 るに是等群島と色丹島とを隔つる色丹水道は、これと少しく趣を異にし、概
 ね四十米以上の深さを以て相隔離せるを見る。

島天辨山福國島渡(甲)



岸海の場刈村歌原國志後(乙)

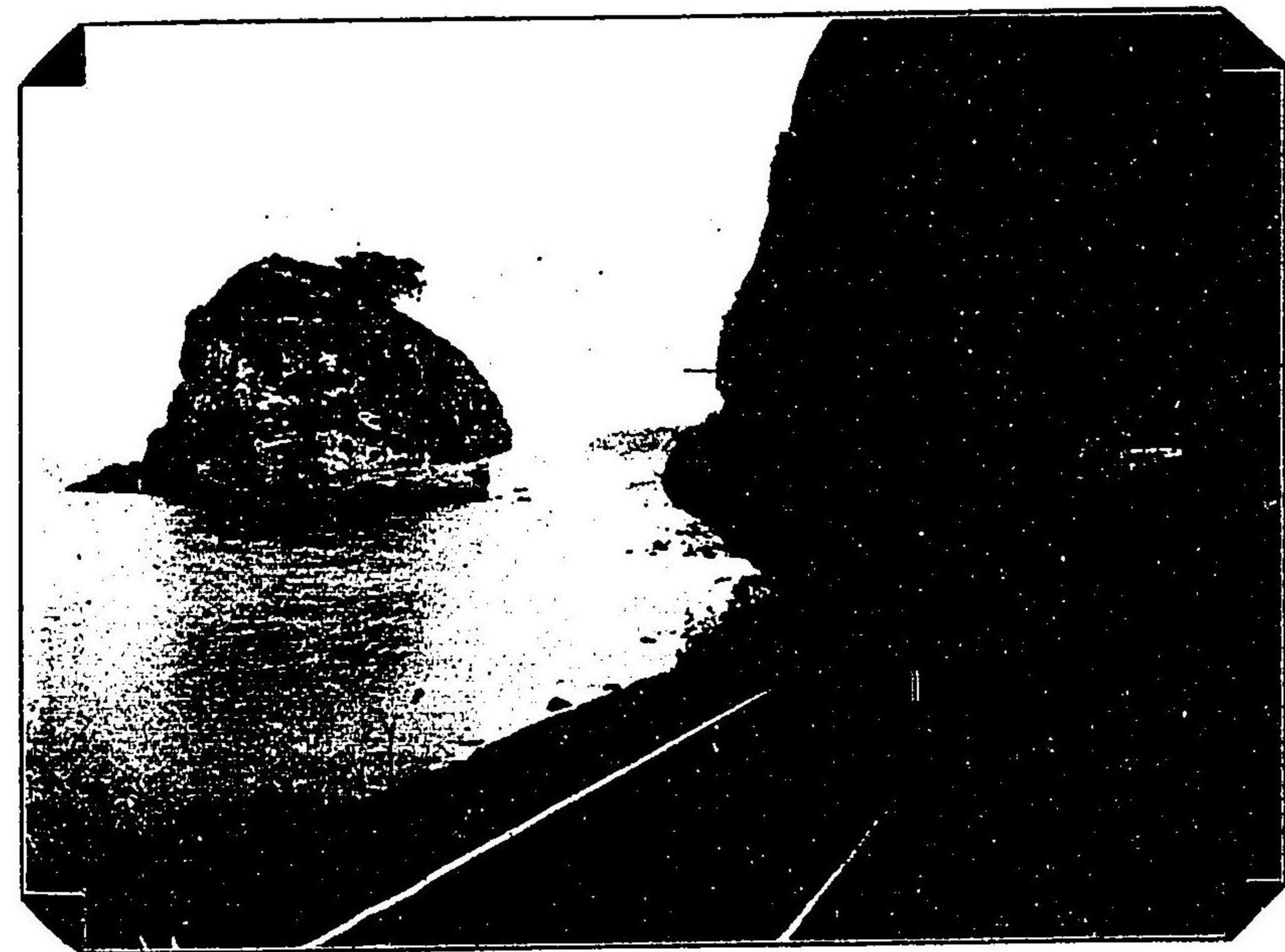
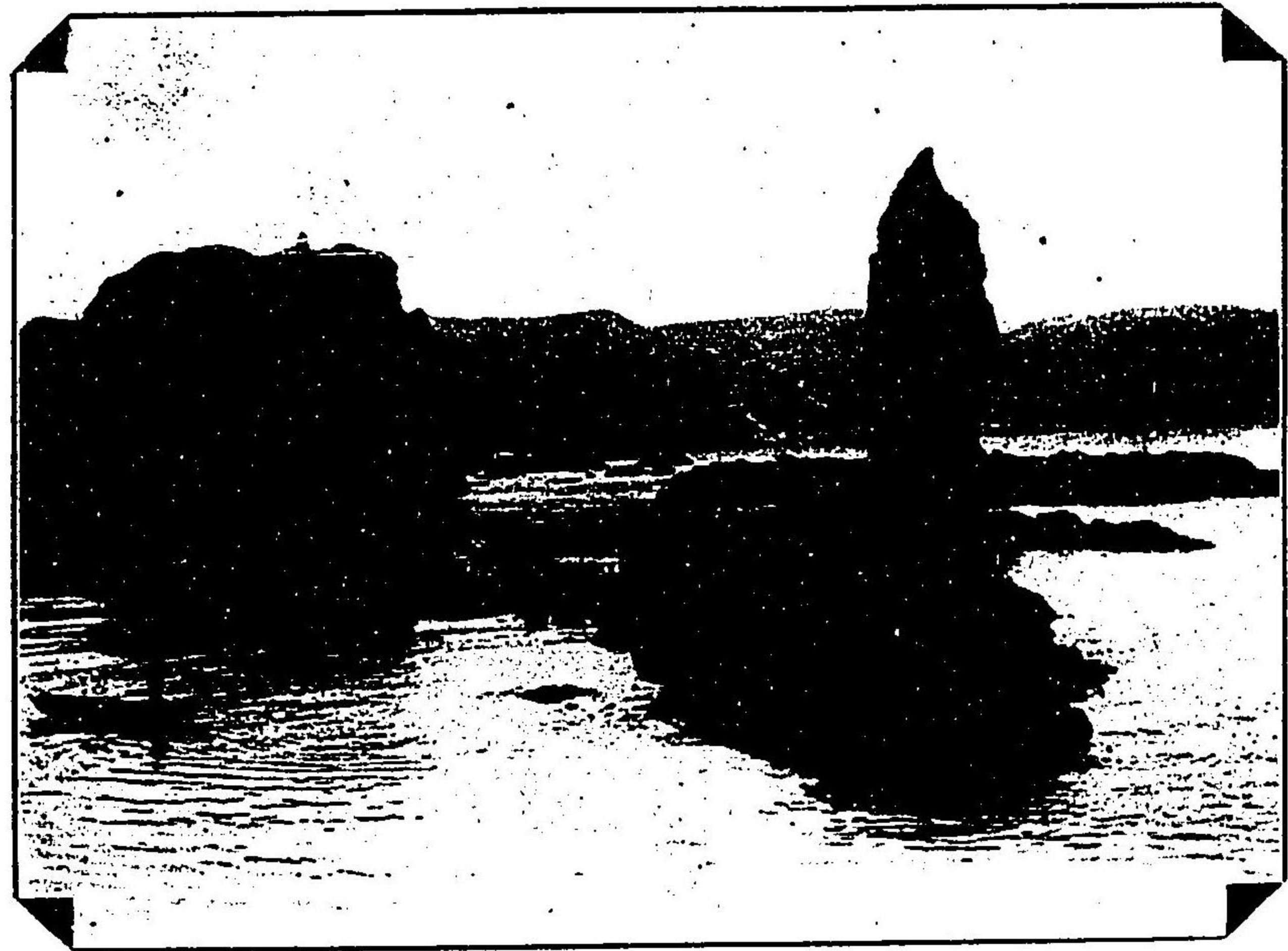
岳尻利るめ望りよ島文禮國見北(甲)



島文禮國見北(乙)

(第十四圖)

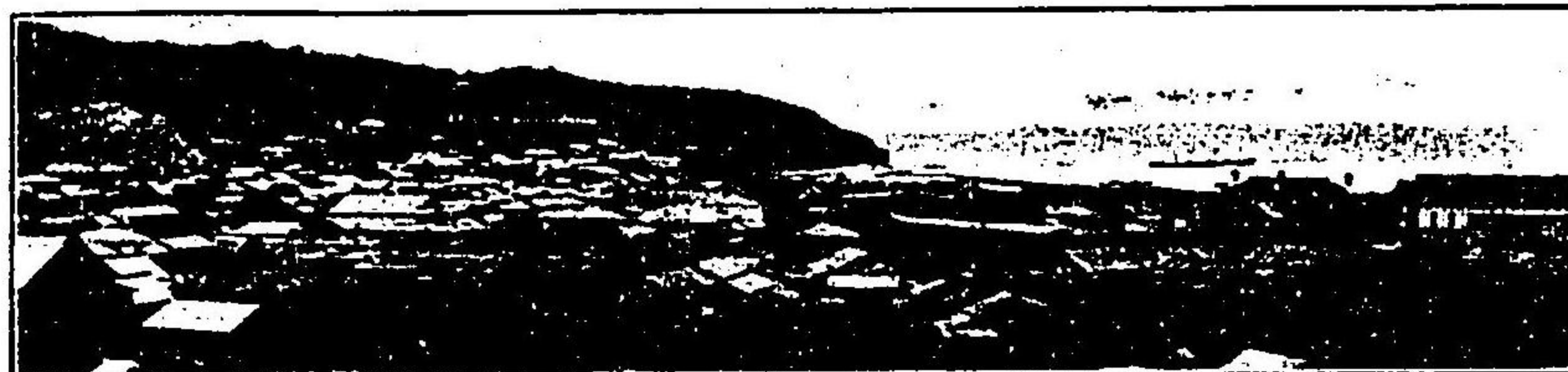
岬威神國志後(甲)



岸海函錢國志後(乙)

(第十三圖)

景全港蘭室國振膽(甲)



(乙) 日高國襟裳岬と燈臺



(第十五圖)

港路釧國路釧(丙)

(丘段岸海は地臺き低の背後)

二 本島東北岸

本島東北海岸は、東南は根室の納沙布崎より西北端は北見の宗谷岬に至る間を稱し、知床半島によりて二區に大別せらる。其東にあるは知床半島の尖端知床岬より納沙布崎に至るまでにして、千島列島と本島との間に於てオホーツク海と太平洋とを連絡せる海路にあたり、所謂根室海峡野付水道根室灣にあたる處なり。水路部にてはこれを本島の東岸と稱せり。他の一半は知床岬より宗谷岬に至るまでにして、全部北見海岸に屬し、オホーツク海の波浪を其北部に受くる所なり。兩者共に海岸の變化なきこと相等しく、又海岸背後の地は第三紀層第四紀層より成れる臺地ありて、海との間の平野には幾多の潟湖或は之と外洋とを分てる砂嘴の發達せるとも相似たり。概して東半即根室の海岸は、之を他に比して海岸線甚だ短く、且つ前面に國後島を控へ、一の幅廣き海峡に面する觀あれども、北見の沿岸に至りては、その海岸線の長さ、略前者の二倍半に當り、且つ沿岸全く島嶼を缺き、前面廣濶なるオホーツク海に枕するを以て、兩者の間自然的諸現象に於て相異なるとなきにあ

らず、殊に氣候の各要素に至りては、兩者頗る相異なるを見る。例へば東部の根室沿岸の夏季の濃霧冬季の流水に加ふるに、一年を通じて沿岸氣温としては一般に低きに反し、北見の沿岸は同季にも一般に霧薄く、流水も其沿岸に來ること殆んど稀にして、且つ宗谷海峽を東に通過せる暖流は、幾分この沿岸に沿うて東南下する故に、氣温の配置は、彼れに反して緯度の高きに係らず、比較的高温なる如き先づ其一例と見るべし。

根室の海岸

根室の海岸は、北にある知床、南にある根室の兩半島を弭とせる弓形をなせる海岸にして、其弓の中央と見做すべき處に、野付の砂嘴ありて、以て稍其單調を破る。此野付の砂嘴と國後島との間は野付水道と稱するを以て、此全沿岸は之より北部なる即ち根室海峽に面する部分と之より南部即ち花咲半島の基脚に向ひ南に淺く彎入せる部分とに分つことを得。然れども通じてこの南北の兩海岸は、知床半島を除きて他は一帶に砂濱若しくは礫濱より成れる平滑なる海岸にして、其背面に第四紀層若しくは稀に第三紀層の低き臺地或は近づき或は遠ざかり、幾多の小河流此間を穿ちて東に口を開く。故に花

咲半島の北岸なる根室港を除き、他に良錨地を缺けるは蓋し自然の數なり花咲半島の北岸を北より西南に進めば、概ね十數哩の間は低き臺地北方に向ひて二三の岬角を出し、到る處に礫濱を連ねて、遂に根室錨地に達す。根室港は此半島と本島との間を北より彎入せる根室灣の東部にある港にして、納沙布崎を距ると約十三哩、辨天島と稱する一小島前に横はり、港口を二分す。西口は淺くして漁舟を除きては、大船の通行に適せざれども、北口はこれに反して水深四尋乃至四尋半を數へ、船舶の入港に堪ふ。但し港内甚だ狹隘なるのみならず、北風のため波浪の侵入を伴ひ、碇繫安全ならざれば固より自然の良港を以て稱すべからず。殊に初春の季は、流水のため船舶の航行全く絶ゆ。夏季は厚岸附近と同じく濃霧地なるを以て、港灣として大缺點を有す。唯本島開發の當初より本島東部經濟上の重要中心點として引き續き發達せし地なるが故に、自然上幾多の障害あるに係らず、港市漸次發達の機運に向ひ、本島東部の水産商業に於て嶄然頭角を露はし來り、近年更に特別輸入にのみ限られたる開港場となれり。港の出入標識たる燈臺は、辨天島上に設けられ

鐵造圓柱形白塗燭力は白光二百紅色八十、光達白光十三哩、紅光八哩、燈質はアセチリン瓦斯の紅白互光燈にして、燈光發射時間紅光白光各十秒、島の附近は岩礁脈多し。尙前述せる如く、一月初旬より三月下旬に至る間は、オホーツク海より南進せる流水は陸續として港内を梗塞し、辨天島に至るまで一面氷原となり、四月に至り、結氷稍融解するに至るも、猶巨大なる流水海上に漂ふこと稀なりとせず。根室より西南根室灣頭にあたる處は、南に半島の頸部を截ちて、一潟湖を造りオンネトーと稱す(地形條參照)。オンネトー根室灣と通ずる處、西岸にオンネトー村あり、海岸はこれより北々西に轉ず。此間礫濱遠く連なり、其内方は凡て低卑にして風連川より吐出せる砂より成れる砂嘴によりて風連湖の潟湖を内方に控ゆ。其北に接しては、又鮭漁場を以て有名なる西別川口を開く。名邑西別は此河口の北岸にあり。西別より更に北方に向へば、約十五哩にして所謂野付の砂嘴東南東に向ひ七哩の突出をなせり。こは前述せし低平なる陸舌にして、外方野付水道に對しては滑なる鈎形の外側を向け、内側には幾多の小支嘴を出す。是等小支嘴の間は、概ね

開灣をなすも、大船の碇泊に適せず。通じてこの砂嘴は北側は礫濱の陡界をなせり、南端外側に漁村野付あり、野付の砂嘴より國後に至るまでの間は、所謂野付水道と稱し、此間最短距離約九哩深さ一般に小にして、北部の根室海峽南部の根室灣に對して著しく淺く、最深十尋に達せず。且つ淺灘の移動常に甚しければ、航行安全ならず、尙水深は之より南方根室灣に通じては、稍深さを加へ、其最大水深十五尋に達するも、その南方は甚だ淺く、國後島と此根室の東部並びに東北水晶諸島との間は、連續せる淺水を以て互に相望めり、然るに此水道より北方根室海峽に至れば、水深前と異なり、北口に於ては、二千米以上の深さに達し、千島灣の内側に並行せる凹窪部の、此海峽部に向つて突進せるを證明せり。野付の砂嘴の北には標津あり。野付水道を往來する船舶の假泊地として有名なれども、天然の灣形を作らざるのみならず、淺灘標津川河口の畔に横はり、船舶の碇繫甚だしく不便なり。標津より北植別に至るまでは第三紀層の丘陵稍接近すと雖、沿岸平沙地に屬す。植別以北即ち知床半島東側海岸に至れば、知床半島山岳の東斜面は急に根室水道

に落ち、嶮岸にして錨地また見る可からず。知床岬は根室海峡の北々西角即ち本島の北東端にして、岬端水深大に直ちに深海に入る。其内方は千島嶮山脈並びに其上に噴出せる火山に連なる。

知床岬より宗谷岬に至る間は、全部北見の東北岸をなせる大弓形の海岸にしてオホーツク海に面し、北見全國の國境線を弓と假想すれば、其弛みたる弦に相當し、全長約二百哩、水路部にては此處を本島北岸とせり、知床岬半島の西北海岸を除けば、海岸の方向は概ね西北より東南の方向をとれども、全海岸の中央部より知床半島に近く、能取岬と稱する第三紀の岩角北に向つて突出し、爲に二つの區域に分たる。能取岬と知床岬との間は、又弓形を呈し、北に向つて開灣をなし網走灣を擁す。網走灣岸は又知床半島をなせる險岸と斜里平原を縁れる平沙岸とに等分せられ、其半島沿岸は全く根室海峡に面せる半島の東岸と其性質を同じうすと雖、他の一半は北見の東南岸に發達せる低き第四紀層の斜里平野に直接し、内方には數多の潟湖を作り(地形の條参照)尙斜里川の如き此地方の主流も其口を開き、河口斜里附近は土地の開墾

知床岬より宗谷岬に至る海岸

漸く發達しつゝある處なり。此沿岸には諸處に小なる漁村を見れども、大なる聚落は全くこれを缺き、稍著しきものは、斜里止別網走等なり。就中網走はこの海岸唯一の錨地にして、港市は網走湖の湖尻なる網走川の口に臨み、此附近に於て經濟上極めて重要な都會をなせり。但し港は風浪に對する防禦を缺けるを以て、北及東の風に對しては全く曝露せらる。投錨地は通常此網走河口の北東約三鏈なる灰色方形の岩即ちワタラ島の西方を選ぶと雖、島の周圍は殆ど礁脈によりて圍繞せられ、近接の危険また尠しとせず。毎年一月より三月に至る流水期間を除けば、東根室西北稚内等を連ぬる沿岸航路此處に寄港す。網走より北方に向ふこと五哩にして、能取岬角に達す。網走灣の西角にして附近又岩礁多く、汽船屢此禍に罹る。能取岬より宗谷岬に至る間は、海岸殆ど出入の變化を缺き、或は砂濱或は懸崖交相連なれり就中能取岬より紋別に至る約四十一哩の處は、海岸概ね卑濕にして、沙濱より成り、其背後には前述の潟湖よく發達し、中にて能取猿澗の二湖著はる。是等湖水の内方は地形前述せる處よりも比較的高く、北見の中央より北に發展せる第

三紀層の臺地は二三百米の高距を有らて湖岸に峙てり。能取岬の西には圓形をなせる同名の湖の口に能取の漁村あり。此西方には一の短き砂嘴ありて湖と海とを分つ。これより西能取岬より八湊の處常呂川の口に當り、常呂と稱する漁村あり。常呂川と能取湖との間は、地形稍高く二百米を越ゆる所あり。常呂より西北西二三湊を進めば、全國第一の長砂嘴を以て包擁せらるゝ猿澗湖オホーツク海に口を開く。此長砂嘴を過ぐれば、後背の臺地を刻み來れる湧別川あり。河口に湧別の名邑を控ふ。此河口の西北も亦小澗湖を連ね、二三の門洲は互に同一方向に延長す。斯くして紋別に至る。紋別は辨天岬(紋別崎)と稱する一低岬によりて西北の風を避けたる一小錨地にして、港市は此地方の名邑なり。これより北西方二十湊の間は猶海岸前述の如く、第三紀層の臺地を背後に控ふる低砂濱にして、其間には又若干の小湖沼を數へ得べし。

澤木より西北に進めば、海岸漸く前と趣を異にし、一般に後背地は高く恰も蝦夷山系を斜めに西北より東南に絶てる部分をなし、古生層若くは中生層より成れる山岳連峙し、且つこれを貫きて噴出せる火山岩磊々として落ち來

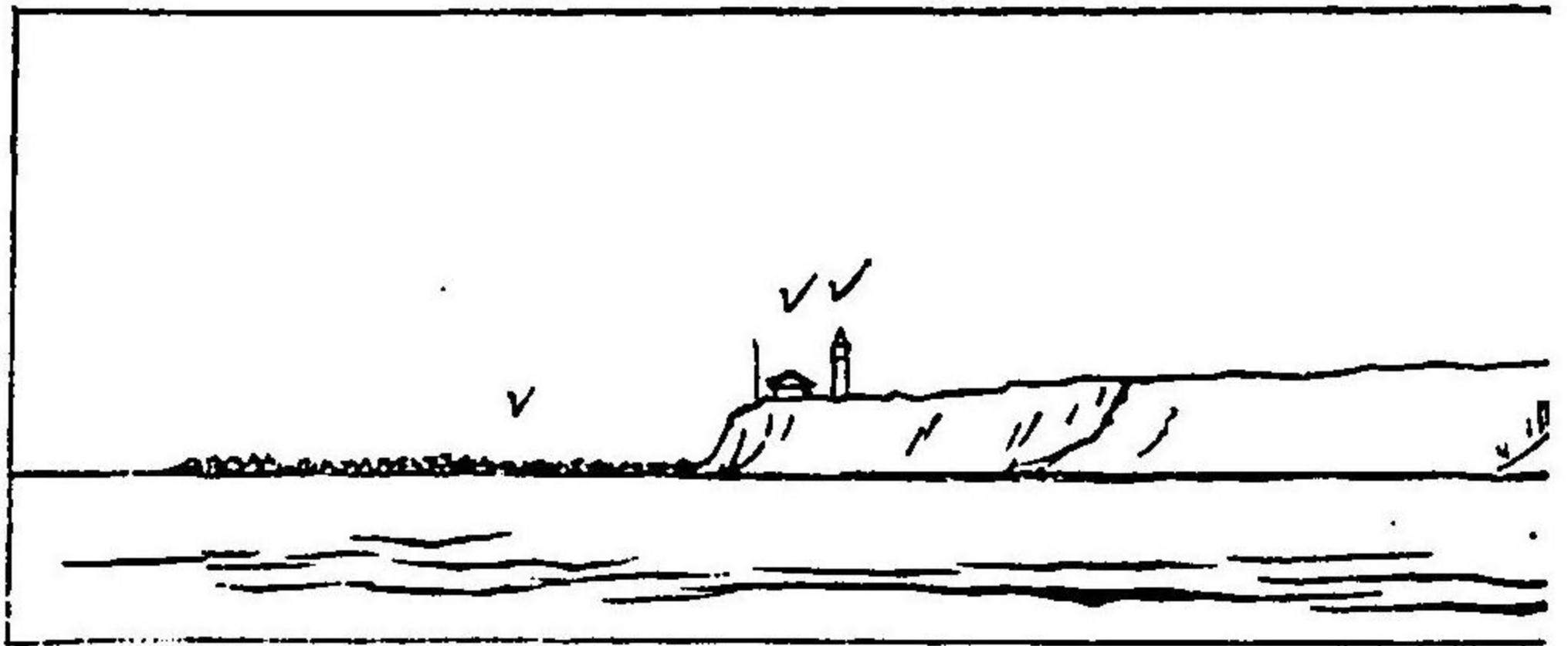
りて此處に迫まり、形狀全く小突出を連接せる亂形の海濱をなし、礁脈も亦之に沿うて連れり。只澗湖は、此の邊には全く其跡を絶ちて見ること能はず。澤木の北西十數湊を隔て、幌内あり。鮭の漁場を以て名高し。幌内より北西禮文歌登の小漁邑を連ねて枝幸に至る間は、海岸段丘をなし、漸次内方に高まり、岸に沿ひ低き險崖若しくは礫濱を見る。枝幸はこの附近に於ける一の錨地にして、紋別と等し、東に突出せる一小角によりて稍港形をなし、小船の碇泊するに堪ふれども、附近亦暗礁淺灘横はり、航行危険なり。枝幸市街は此港を控へたる名邑として稚内網走線の寄港地たるに拘らず、一二三月の間は航路杜絶するを常とす。尙近時稍衰色あれど、附近に砂金地を控ふるを以て、北見の沿岸にては其名夙に著はる。枝幸より西北進すること約八湊にして、カムイェト岬(神威岬)と稱する小岬角あり。澤木より此處に至るまでの間は、全く險崖に屬すれどもこれより西北方宗谷岬に至るまでの間は、概ね後背地は低く、殊に神威岬の北々西二十三湊の處海馬島と稱する低岩を前に控へたる恵山部までは、全く純粹の一直線をなし、其内方には北見の南西部



北見ノシッ岬内
内種岬ノシッノ見北
燈臺 村漁ル連ニ北ノ街市内種

に於て見たる如き潟湖並びに是等と海との間に發達せる砂嘴の連なるを見る。惠山部より宗谷岬に至る間は、後背部は稍高まり、往々二百米を越ゆる臺地一面に廣く發展するも、岸邊は極めて淺き出入をなすに過ぎずして、概ね砂濱なり。

宗谷岬は本島の最北端にあたり、樺太西能登呂岬と相對し、幅約二十三哩の宗谷海峡ラベルズ海峡を挟む。岬の附近は海岸概ね圓みを呈し其背後は低き臺地をなす。附近一般に礁脈擬延し深さ大ならざるも、海岸を離れて外に出づれば漸次深さを加へ宗谷海峡の中央部に於ては、三十尋を越ゆる所あり。此岬を西に廻りて本島の最北端に當れる村落宗谷村あり。昔樺太に渡れる部落にして、北海の警衛上特に注意すべき處なり。岬端に燈臺



補助港ルマ坂下港沖ヨリ東望
海上ノ丘段岸海 (前以災火)

の設けあり。鐵造八角形黑白横線塗第二等回轉白光にして三十秒毎に一光輝を發す 晴天光達十七哩、別に霧中信號ありて濃霧或は溟濛なる天氣には、一分毎に十二點の霧鐘を打鳴す。

尙知床岬より宗谷岬に至るまでの沿岸水深に就て述べれば、恰もオホーツク海盤の西南を限れる處に當り、深さ一般に淺く、百米の同深線は概ね海岸を距ること十哩の所にあり。但し能取の小岬角附近より知床半島に亘りては、海深著しく大となり、能取岬の外にては同じく百米の同深線は五哩以内に逼まり、二百米の同深線は距岸十六哩以内に突進し、之より東に走せて知床半島の陸岸に近き所に迫まり、遂に根室海峡の海窪部に連なる。宗谷海峡は一般に深さ淺く樺太の陸岸に近き二丈岩の如きは、この淺き海底

臺地の上に殘存せる巉岩なり。且つ宗谷海峽は對馬海流の一支派東に通過し、又漲落に伴へる潮流は、此處を或は東或は西に通過するを以て、宗谷岬角端には激湍あり、競潮あり、而して海流の此處を通過するものは、概ね海峽中宗谷岬に近き部分を南々東若しくは東に流る。尙本島の東部にて屢述べたる流水も、毎冬宗谷海峽を襲はざること殆ど之あらざるはなく、襲來の早きは一月の初旬、遅きは四月中旬に及び、多く北より東に至れる諸風により樺太近海より流れ來り南風を以て流れ去る。霧は比較的少く、晩春より秋に至る間は屢これあれども、東海岸に比すれば一般に稀なり、斯くてこの海峽は本島の西海岸と東北若しくは東南岸とに對し自然的諸現象の上より重要境界線を劃せり。

三 本島西海岸

本島西海岸は本島の西日本海沿岸の總てを抱括せる部分にして、其長さ頗る大なりと雖、軀幹部の沿岸は勿論半島部に於ても、概ね肢體の發育を缺き

僅かに高く且つ圓みをなせる積丹半島の、單純なる大突出あるに過ぎずして、港灣の良好なるもの比較的少なし。此間に於て稍大なる突角及び灣入は、積丹半島と軀幹部の鈍き突角なるウフイブ(雄冬岬)、海水のこの間を侵せる石狩灣並にこの灣首に近く横はれる小樽人造港を以て推すべし。宗谷岬の西には、これよりも稍突出短く且つ小なるノッシ岬(野寒岬)北に向ひ、宗谷岬との間に宗谷灣と稱する開灣を抱く。此灣口は幅約十哩灣入五哩にして、灣首中央より少しく西に聲問崎の低岬北に突出す。灣岸は兩半島部に於て稍高しと雖、一般に西方ノッシ岬の小半島は百米未滿の臺地性の丘陵なるに反し、東はこれに比すれば稍高く、中に二百米を上下せる圓形の隆起部を存す。一般に此の宗谷半島は北方より南に進むに従ひ、高度を増すと雖、表面平滑にして、第三紀層若しくは中生層より成れる臺地をなす。而して兩半島の間は一般に低く緩かに下れる斜面地にして、聲問崎の後には、小なる潟湖を有し、沿岸概ね砂濱なり。但し灣の東岸並びに聲問崎近傍には、多少礁脈を存す。此海岸には宗谷聲問稚内等の名邑あり。就中稚内は此灣の港市にして、ノッシ半島の東

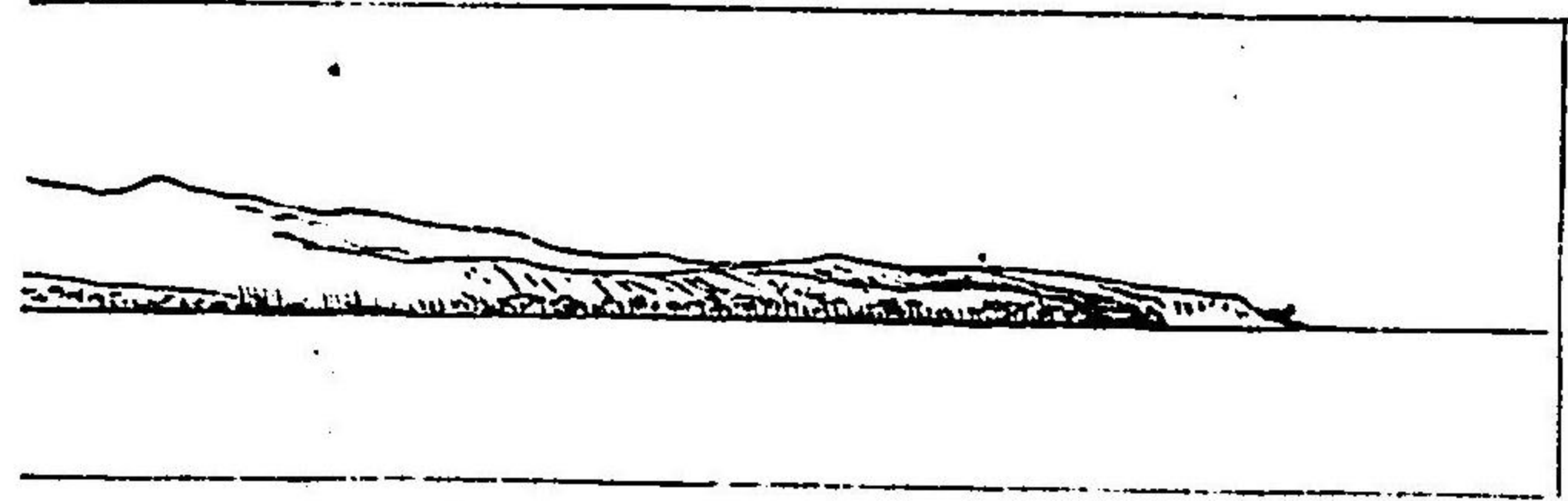
岸丘陵の麓の砂上に立ち、水産商業に關して著名なる本島最北の都會たり。斯く本島最北の都會たるにも係らず航路は小樽函館方面と相連絡し、東部諸港の如く一年の或る時期海上全く航行杜絶する憂なく、全年の氣温の分布を見るも、東部諸地方に比して一般に高温なり。灣の錨地は稚内の東を利用し海底概して岩盤多く、碇繋便ならず。殊に西及び南の風浪に對してはよく之を遮るを得れども、東北及び西北の風起るにあたりては、波浪高くして錨泊に堪へず。ノッシャ半島の西岸なる坂下港の稚内に對して補助港をなせるは、即ち此理由に外ならず。水深は灣口にて約十六七尋これより灣頭に漸減す。ノッシャ岬の尖端臺地には、燈臺設置せられ、稚内燈臺と稱し、鐵造圓形紅塗第三等連閃白光にして十五秒毎に五秒間二閃光を連發す。晴天光達十八哩、尙該燈臺には霧笛を設け霧雪或は溟濛なる天氣には毎二分間に低調一聲高調一聲を連吹す。海岸はノッシャ岬より方向を轉じて南に走せ、概ね緩かなる弓形二三を描きて石狩灣に及ぶ。此大部は天鹽の海岸にして、其北端と南端とは北見、石狩の二國に屬す。先づノッシャ岬より南方ユーチ岬までの間は、常に

ノッシャ半島より延びたる低き臺地一面に其後背に及び北見、天鹽の國境を越えて天鹽の北部に及び、漸く南するに従ひ次第に高さを加ふ。此臺地は第三紀層にして、其海に近き所は往二三の階段地を形成し、其丘陵と濱海との間には、廣狹種々に變化せる砂濱をなし、砂丘此處に延長せり。其間中央より南に偏して、抜海岬と稱する一小陸舌西に出づ。これより北は通例抜海錨地と稱し、又其北部には坂下村と稱する小漁村あるを以て、時に坂下港の名を冠することあり。ユーチ岬の西方には、北見に屬する利尻禮文の二大島あり。ユーチ岬と利尻の間は、通例これを利尻水道と稱し幅約十哩絶えて既知の隠險なく、安全に航行し得べしと雖、波浪穩かならざる天候には、之れを通過すること頗る困難なる時あり。利尻島は地形の條に述べし如く、一個の標式的火山島にして、島の全部利尻山火山より成りて、其高さ二千米に近く形狀整正なる圓錐形をなせるが故に。人これを利尻富士と稱し、近海を航するもの自然標識となせり。島の沿岸は此裾野にあたり、概ね低き臺地形を呈し、其礫濱に終る處には、屢、險崖を見、又諸所に段丘あり。尙岸に沿うて雌岩暗

礁なきにあらずと雖、外方は一般に航海安全なり。島の東側には鴛泊鬼脇等の錨地あり。就中鴛泊灣は島の東北側にある小灣入にして、北より西を経て東南に至る諸風を保障し、鴛泊は其の港市として發達し、近海の漁村地として著名なり。小樽稚内間の航路は、此地に寄港す。鬼脇錨地は利尻島の東南にある一小泊地にして、又西より北に至るの風を防ぐべく、水深亦鴛泊と同じく七八尋なり。鬼脇村は此背後にある利尻第一の村落にして、近海漁業の重要中心地なり。利尻島の西北約五哩を隔て、禮文島あり。其形南北に細長く、北端は蟹爪の如く、兩半島突出して一灣を抱く。之れ即ち此島唯一の碇泊地なり。島は地形の條にて述べし如く、概ね禮文山を除けば、平夷なる臺地の島にして、沿岸西側は斷崖峻壁東側は砂礫より成り、往々離岩暗礁岸に沿うて横はり、時に又礁脈の擴張せるあり。島の沿岸は又利尻島と同じく、漁村點々相連なり、就中島の東岸中央より稍方に南方に横はれる香深最も名高く、其東は本島唯一の錨地をなす。但灣入淺きに過ぐるを以て西北より西南に至る諸風の外、錨泊に適せず。小樽稚内間を往復する汽船は、又此處に

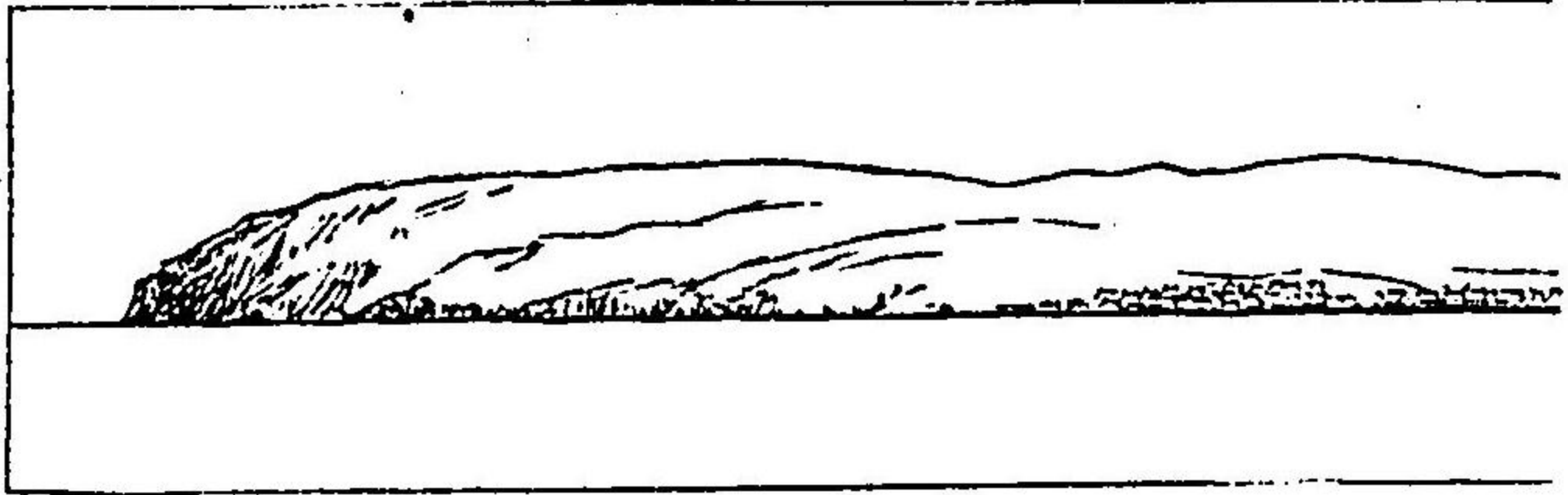
寄港す。此島北方の船泊灣は灣入比較的淺く、(灣口約二哩七鏈灣入一哩七鏈水深も灣口の十二尋より漸く減じて、灣首は距岸約三鏈の處に於て三尋界線あり。偏南風の避難に堪ふ。但し灣の東極金田埼附近礁脈横はり、西角神崎の北方にも亦同様なる岩礁ト、礁柳礁海驢島等擴張せるを以て、灣の出入甚だ危険なり。灣の東南隅に船泊の漁村あり。

更に本島ユーチ岬より南方に進み、天鹽沿岸の略中央に當れる苦前に至るの間、五十七哩の海岸は平滑なる弧線を畫き其觀北見の海岸に似たり。北見の西北端に連なり、尙南方に走れる第三紀層の臺地は、南進するに従ひ愈高く、苦前附近に至れば、其海岸後背地は三四百米の間にあり。然れども此の臺地の海濱に終る處は、常に階段地若しくは傾斜緩なる平原地にして、岸邊は砂濱をなす。殊に全沿岸の北半は此性を發揮し、沙流の北方ワカサクナイ尙南に下り、幌延天鹽間には長大なる砂丘との間甚だ細長き潟湖若しくは天鹽川の河流の海岸に並行して飽く迄も海との連絡を避くるが如き部分あり。是等は河流の海に朝宗するに對して、反對に作用する砂丘の發達甚だ顯著な



天賣島 天賣焼尻二島の間の

るによるものにして、天鹽川の如きは河口より四湮の上流まで河道海岸線と
并行す。而して此間長大なる砂丘ありて之を隔つ。天鹽
川の海に口を開く處は、幅約四百五十米餘に及べども、
門洲これを横斷し、河に入るべき可航水路八尺乃至二十
一尺にして、其北は小船の錨地に適す。河口の南岸に天
鹽村と稱する附近に於ける主要村落あり。天鹽村の南方
には又一小潟湖存す。天鹽河口より約十湮の南に遠別あ
り。遠別川其南に開口す。これより南進すること約九湮
にして、險崖の缺處に風連別の漁村あり。更に南すれば
漁村沿岸に連續し、何れも鮭漁を以て著名なり。例へば
風連別の南方初山別苦前其の北方なる羽幌の如きは等の
名邑に屬し、初山別苦前の如きは漁期中小汽船碇泊す。
殊に初山別は小樽天鹽線航路の一寄港地なり。尙風連別
より苦前に至る沿岸は、其後背に二三十米の臺地斷崖を



水の道より北西を望む

なし、砂濱其麓に横はる。苦前の西北方十二湮の海上に
焼尻天賣の二島あり。何れも第三紀層の低島にして、諸
處に噴出岩露はる。沿岸特に出入を見ずと雖、漁村は兩
島共に其周圍に發達し、其表面殆んど全部耕作せらる。
此兩島は共に其沿岸小船の避難に適し、中にも二島の間
武藏水道は軍艦武藏の通過したるを以て名けられたる所
にして、幅二湮に及び、水深八尋より深く、航路の幅は
一湮なるを以て、大船と雖安全に通過することを得。更
に苦前より南に進めば、海岸の平滑なること以北の地と
大差なしと雖後背地は漸く高く臺地狀の斷崖若しくは低
き山脈内方に起伏す。而して岸邊は往々砂濱長く延ぶと
雖、淺灘礁脈殆んど常に之に并行し、海岸線も眞直にし
て小汽船の時に寄港するに過ぎざる處あるのみ。留萌も
亦此式の海岸をなせる一錨地にして留萌崎と稱する一小岬角を西に控へ、其

北側に稍彎形をなす處を以て錨泊地となす。北方を除ける他の風に對しては、錨泊に堪ふと雖、天然の良港たるにあらず。唯其背面は本島の縦貫鐵道線の一支線留萌線の一終點にあたるを以て、海陸の關係甚だ滑かに且つ附近は鮮の漁業盛大なる地域なれば、市況漸次活潑となり、本島西岸に於ては大に注目せらる。尙留萌港市の東に口を開ける留萌川は、和船の碇泊に適せり。留萌崎より海岸漸く西南に轉じ、八湊の弓形をなして増毛崎に至る濱邊は、礫濱險崖にして、其間には漁村密に連接す。増毛は留萌と同様な錨泊地にして、經濟上の事情又彼れと頗る酷似す。通例錨地は増毛崎と其東方の稻尾崎との間なる淺灣を以てこれに充つ。水深適宜にして投錨頗る可なり。又小樽稚内間を航する汽船の寄港地なり。燈臺は港の西側丘上に設けられ、木造四角形白塗不動白光晴天光達九湊増毛崎より南は海岸線増毛山塊の西邊をなせる部分にあたり大なる弧狀の突角を西に出す事兩度にして、石狩灣の東岸に及び、海岸線の延長三十二湊、此間天鹽石狩の國境には有名なるウフイブ(雄冬岬)の險崖岬角あり。此の岬の附近は南北共に火山岩より成れる幾多の山嶽

群立し、其海に没する處數百尺の險崖をなし、巨岩大石急下して其麓に懸かり、波浪によりてこれと離脱せる岩礁は遠近に峙ち、加ふるに近傍森林鬱茂し、斷崖を啣む怒濤の聲響々たり。實に其景の雄大なる北海道中稀に見る處なり。日方泊崎赤岩岬ト、島(鮭島沖ノ瀬地ノ瀬等の名勝此沿岸にあり。ウフイブの南十二湊の處にアイカブ岬(愛冠岬)あり。此間は海岸少しく東に入り、淺き彎形を畫く。灣隅茂生(濱益)の巨邑あり。小樽増毛間の小汽船稀に此處に寄港す。此の北方にはクベツ群別の漁邑あり。石狩灣岸より北上せる沿岸道路は、これより岸を離れ、ウフイブの東方所謂濱益御殿なる難嶺を経て増毛の後背に入る。

アイカブ(愛冠岬)を南に廻れば、海岸は東南に轉じて厚田に至り、更に南より西南に走り、以て石狩灣の東邊をなし灣首に及ぶ。後志の極東に横はれる錢函と稱する一海水浴場は、實に此灣首に當り、愛冠岬との間は正さに東に彎曲せる弓形を呈す。抑も石狩灣とは雄冬岬と積丹岬との間灣口四十三湊の一大海灣を稱すれども、灣岸の形勢は更に其灣首に近きたる一の内灣を抱く

が如く、小樽港の北方にあたる高島岬とアイカブとを連ぬる線は、此一大海湾を内外二灣に分つものと云ふも可なり。而して石狩灣の内灣即ちアイカブと高島岬との間に於てアイカブより錢函に至る迄は、前述せる如く平滑なる弓濱を形成すれども、錢函と高島との間は稍之と趣を異にし、海岸線の走向平滑を缺き、小樽港の西岸に至りて始めて小屈曲をなせり。且つ其後背の地形も錢函を境とし東北と西部とは頗る其趣を異にし前者は始めアイカブより漸次南進するに従ひ、前述の山塊次第に其高さを減じ、厚田附近にては全く丘陵地となり、其南なる嶺泊よりは、是等丘陵は全く石狩平野に没し、錢函に至る間平沙遠く連り本島巨川石狩川は蛇曲して此處に口を開く。然るに錢函以西に至れば、後志の火山彙直ちに岸に迫まり。嶮崖海に臨み、其麓は殆んど道路を通すべき餘地を有せざる處あり。本島にて最も盛大なる小樽港も、要するに這種の傾斜地を削夷して、其市街を發達せしめたるものに過ぎざるなり。

先づ厚田より南方石狩川の口に至る間は、前述せし如く多少の丘陵其東に

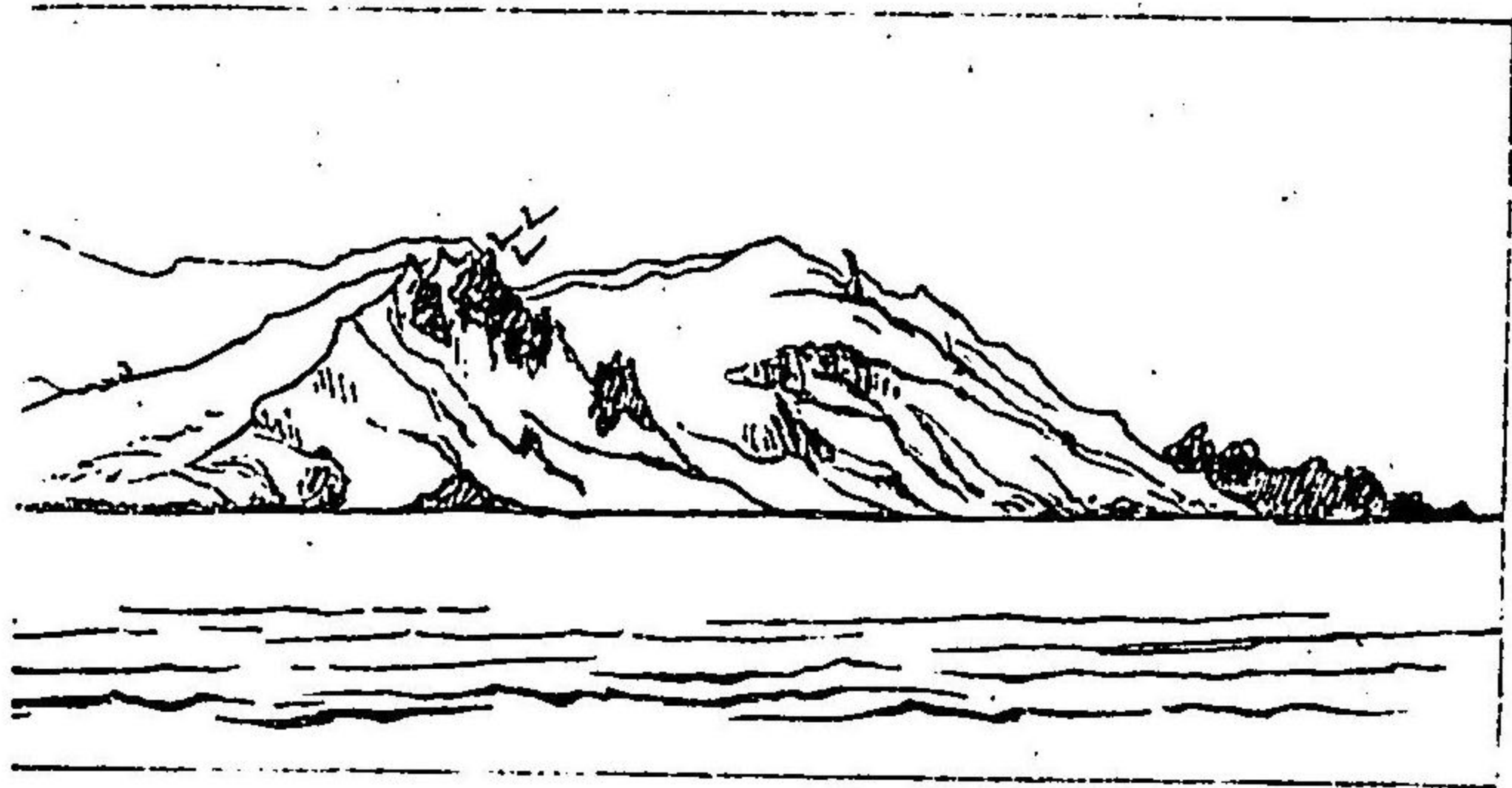
起伏すれども、沿岸約十哩は凡て平沙にして、押琴古潭嶺泊望來等の諸村落連續す。石狩川は恰もこの厚田錢函間の稍中央に口を開き、河口に於て其幅四百米餘河口より數哩の間常に水深三尋乃至五尋なれば、小蒸汽船は常にこれを遡り上流約四十五哩月形(樺戸)に遡行す。河口は其北側に淺灘多けれども南側は稍深し。燈臺は河口の南側砂嘴の上に設けられ、よりて以て河を出入する船舶を警戒す。木造六角形黑白横線塗不動白光晴天光達九哩。河は鮭の漁業を以て有名なることは言ふを俟たざる所にして河口の左岸の上には港市石狩あり。

石狩河口より錢函に至るまでは、海岸線全く平滑にして、十一哩の沙濱をなし、其背部は石狩平野の開拓地に屬すれども、往々又低き砂丘の徒らに起伏する處なきにあらず。錢函に近く石狩後志の國境あり。錢函より前述の高地を脊にし概ね西北西に走りて小樽港に及ぶ。其間錢函の西に張碓の斷崖あり、玄武岩の柱狀節理此崖面に發育し、鐵路これを過ぐるもの、仰いで天上に之を見るべく、また此附近の奇勝地たり。小樽港は石狩内灣の西南隅にある港

灣にして、港市の東端に當れる平磯岬と、其の北なるカヤシバ岬とを連ねたる一線の西側を稱するなり、灣形は極めて平凡なる海灣なるを以て、之を自然の儘に放棄する時は、偏東風は全く避くることを得ざる缺點を有すれども、本島胴體部の開發進むに従ひ、これが咽喉として極めて重要な位置にあるを以て此處を利せんとする經濟的活動の諸要素は、悉く相結合し、此地を驅りて以て本島隨一の經濟的大都市を形成するに至らしめたり。されば其の港の自然の缺陷に對する警告は小樽港の築港となり、一はカヤシバ岬の南なるボン泊より南々東に向ひて七鍵の防波堤を建造せしめ、一は平磯より起りて前者の尖端に近接する工事を起さしめ、以て將來築港工事成るの日には、東方よりせる一切の風浪に對して此内部をして完全に之を避くべき安全港たらしめんとする大計劃を實現せしむるに至れり。但しこの平磯岬より起る防波堤は、未だ竣工せざれども、艦船の碇泊は北より起れる防波堤成りて以來其碇繋甚だ安全なるに至れり。港市小樽の本島第一の開港場たるを、並びに其商業上の活動盛にして、海陸の交通を殆どこの處に集むること、其他の活動

如何は後章産業の條に於て詳かにするとあるべし。防波堤の端に燈臺建設せられ、構造鐵造にして四角形赤塗し、燈質不動紅光、光達七哩に及ぶ。小樽港と其西なる余市灣との間を見るに、小樽の北には高島岬を尖端とせる一大突角あり。こは小樽港と其西隣なる余市灣との間に鷹嘴の如く、東北に細まれる一半島にして、全部小樽附近の丘陵性山岳より成りて沿岸小突角により幾多の出入をなし、何れも險崖に富む。就中高島岬は高島山と稱する顯著なる赤壁崖にして、小樽港に入るもの、好目標たり。此岬端には日和山燈臺建設せらる。木造六角形白塗にして第四等折射不動白光晴天光達十五哩に及ぶ。之より亂岩奇岬交錯はり、窓岩鼻オシノボ忍路鼻オシノボ尻場崎丸山崎厚苦岬等の岬角斗出し、鹽谷忍路余市古平美國等の小灣連續す。就中中央に位せる余市灣は、余市川の小平地を後に控へたる稍幅廣き開灣にして、鹽谷灣の西岬忍路鼻とその西なる尻場崎とを以て灣口となし、東西約三哩灣入一哩半、水深五尋乃至十四尋に及び、北西及び其西岸附近は小船舶を入るべし。唯西北乃至東方より來る風に對しては全く防禦物を缺くを以て錨泊に適せず。農業の生

積丹半島

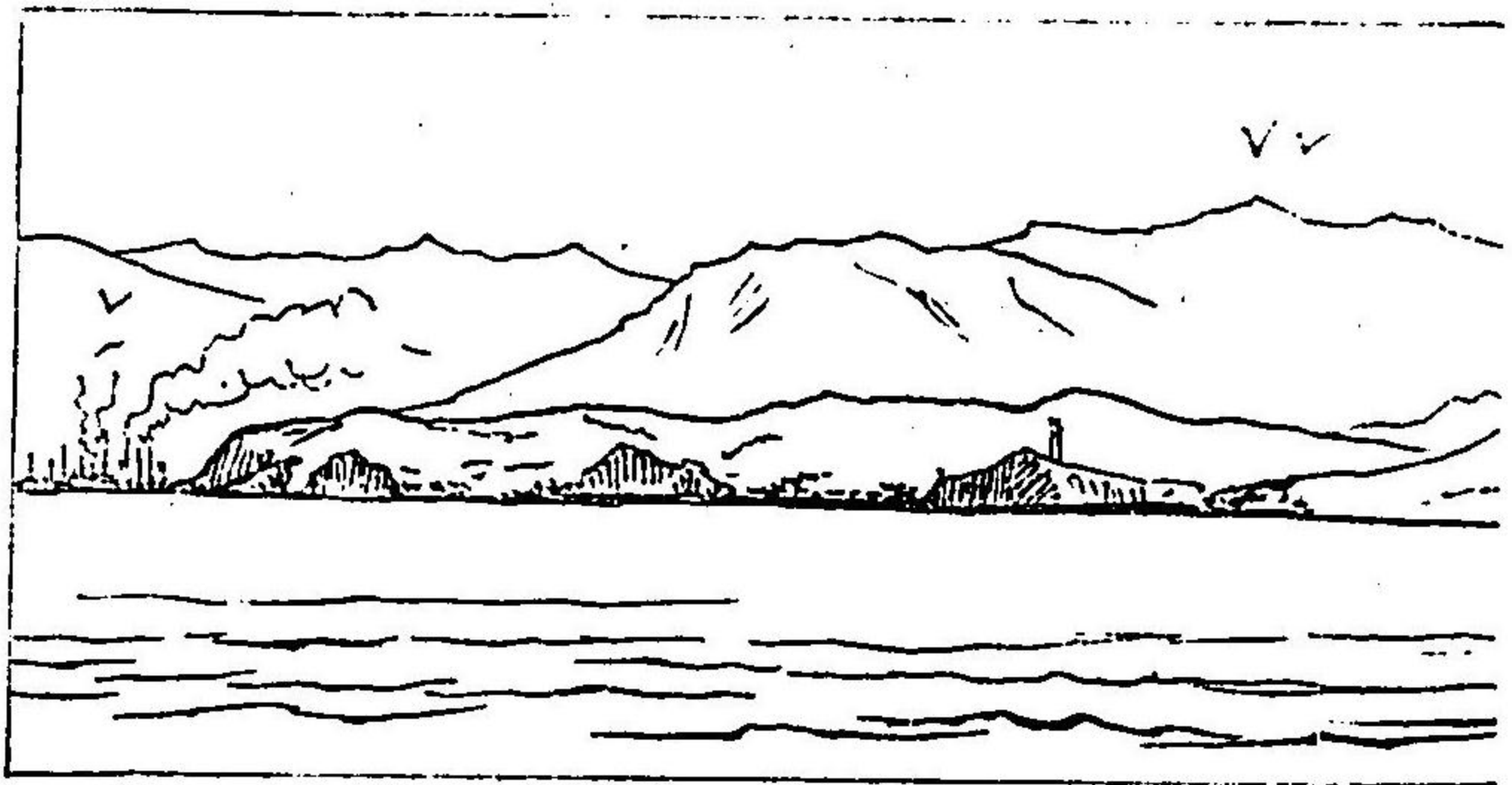


小樽港外より高島岬(燈臺) 小樽港(南) 天狗岳 (西度五廿南)

産地を東方に有せる余市市街は、灣の西南隅に横はり、鐵道函館線を導ける

余市川は、其東部に口を開く。小樽と美國との間を航する小蒸汽船は、此を寄港地とす。尙此灣は西南遙かに横はれる岩内灣と共に西北方に斗出せる積丹半島の頸部にあたり兩々相對して經濟上の立脚地稍似たるは奇とすべし。尙余市岬と高島岬との間の險崖には、風景の絶佳なる處頗る多く、夏季には海水浴場となり、小樽札幌等よりの遊客多し。

余市灣と岩内灣とを左右に控へたる積丹半島は、北海道西海岸唯一の大半島にして、其幅兩灣を連ぬる處に於て約十五哩、これより西北に向つて突出せる延長約十七八哩、西北端は神威岬なり。此長さに沿うて西北に進むに



あ(り)附近の断崖を望む (西度十四) 赤(山) (西度五十五南)

南の半部は、小岬角幾度か出入し、岩礁此間を亂綴して、錨地以外に別に壯

從ひ幅狭小なる傾あるも通じて其頸部と大差なく唯神威岬附近に於て鈍く細まり、其東北東なる小突角積丹岬と共に發育せざる牛角の如き突出をなせり。この半島の全部は、既に地形の條に述べたる如く山岳連亘し、其支脈又南北に走るものありて、高距千米を上下、海岸は何れの方面に於ても是等山岳の直ちに海に終る處に屬し、險崖相次ぎ礫濱諸處に之れを亂す。總て出入なきも、就中西岸は殊に著しく、恰んど錨地と稱すべきものなし。唯東北積丹神威兩岬の淺海灣の間并びに積丹岬より余市灣に至る東北海岸中には、稍小弓形をなせる灣入なきにあらず。殊に此東北海岸の東

觀雄偉なる景を存す。余市港の北角をなせる尻場崎よりこれを西北に數へ、烏帽子崎蠟燭岩チャライナイ等の岩角岩礁を経て、西に向つて灣入せる古平灣に達す。此灣は丸山崎を以て北角となし形狀余市灣に似たる淺開灣にして北東に口を開き、小樽より美國に通づる小蒸汽船の寄港地をなす。港市古平は灣の西北岸にあり。丸山崎の險崖より西北西に進めば美國灣あり。灣形余市古平より不完全なれども東に厚苔岬西に辨天岬を控へ前述せる小航路を終點となす。偏東又は東南の波浪を防ぎ、偏南風にも稍平穩なるを以て、小假泊地として注目すべし。通じて古平灣より此處に至るまでの間、岩礁著しく多し。此灣頭にも亦美國の港市あり。海岸は之より西北方に直進し遂に西に轉じて積丹岬となる。積丹岬は同名の半島の最北端をなせる斷崖岬にして石狩灣の西角として近海航路の重要なる目標地なり。岸邊暗岩多きも南にニト泊と稱する小船の錨地あり。積丹岬より神威岬に至る間、概ね内方に彎曲せる弓形の灣にして、長さ約六哩礫滾をなす。野塚余別等の漁村あり。神威岬は積丹岬に比すれば、鋭尖なる岬をなし、恰も積丹半島の西北端に聳ゆる余

別岳の西北の山陵より成り、全部屹立せる巨岩にして、灰白色を呈す。岬附近には大小の岩礁散布せり。神威岬燈臺は岬の西北端に設けられ、鐵造圓形紅塗第二等回轉白光にして、四十秒毎に一光輝を發す。晴天光達十八哩。積丹半島の尖端に就て注意すべきは海深の著しく大なることなり。抑も北海道西海岸は、其海深上よりこれを見れば、この半島を境として、これより南と北とにより、非常に其趣を異にす。北部の地は一般に深さ甚しく淺くして、二百米の同深線は此積丹岬附近より一時雄冬附近にて半島に接近するのみにして、これより以北は殆んど眞北に走せ、禮文島の西側をかすめて、海馬島と樺太との間を走せ、此線より東は海棚發達す。宗谷海峡の最深三四十尋なることは前述せし所なるが、これより南して利尻水道に入るも前と大差なく、最深五十尋、禮文利尻二島とノッシ岬との間にては漸く六十尋を越ゆる處あるに過ぎず。然るに利尻水道の南に至りては、深さ五十尋に達する處は天賣燒尻の二島に至る間殆んどこれを缺き、尙南下して雄冬岬に至るまでは、四十尋を越ゆる處一もあるなし。轉じて雄冬岬より積丹岬に延長せる石

狩灣口に至れば、形勢少しく前と異なり、二百米を越ゆる處は雄冬岬に於て七八湮の近くに迫まり、積丹半島の外面に於ては、距岸五湮にも達せざる處に於て既に此線の横はるを見る。唯石狩灣は一般に淺く、此百尋線は概ね前述丸山岬の沖合より東北に走り雄冬岬の西七八湮の處に至る。故に之より東南に變入せる石狩灣は、漸くこれより淺く、遂に其灣首石狩平灣に推移す。翻つて此半島より南部を一瞥すれば、約二百米の同深線は著し、海岸に迫まり後志狩場山の西麓に當れる持田附近にては、距岸二湮に達せざる所を走る。尙この南方の海深に就ては、後に至り更に説くべし。

積丹岬の西海岸は神威岬の南方川白岬に於て稍鈍圓形の弧を書き、これより東南に轉じて岩内灣に終れり。海岸殆んど眞直にして、神惠内茅沼等の大漁村あり。就中神惠内村を抱ける神惠内灣は、一小灣をなし、和船の錨泊するに堪ふ、岩内灣は神威岬と壽都灣の西北角たる辨慶岬との間稍中央に進める一開灣にして、灣岸砂礫の濱をなし、其後背地は稍廣き平地を控ふ。港市岩内は其の南東隅に起り、本島西海岸にありては、産業上重要な都會なり。

港は偏東風以外は他の諸風を遮蔽し且つ此港市の中央より北方に突出せる稻穂崎と稱する低沙角の尖端のあたり海底磊石多く其間に擴布するを以て、碇泊必すしも不適當なるにあらず。殊に水深七尋にも及び砂底の處艦船の碇繋頗る可なり。本島肢體部の西岸都市の起原古きもの、殆んど總てが、今日甚しき衰態を呈するに係らず、獨りこの港のよく依然として活氣を呈する所以のものは、單に附近産業の興隆に原づくにあらずして、實に此港としての好事情も其一たらずんばあらず。されば道廳命令の函館小樽線の航路は常に此地に寄港す。

海岸は岩内より西南に走せ、雷電嶺の西麓刀掛岬(雷電岬)の險岸を過ぎ、尻別川河口に達す。此左岸なる尻別岬よりは岩礁突出し、砂堆擴延す。海岸はこれより西南に向ひ、更に南に轉じて壽都灣の東岸潮路に至るまでの間、能津登を始めとし、横潤美谷等の盛なる漁邑相連り、海岸概して平滑にして、其後背地は幌別岳附近の低山性山岳地なり。

壽都灣は辨慶岬と其東方美谷の屈曲點との間より南に突入せる開灣にして、

壽都灣

海岸は辨慶岬より西岸の略中央に至り更に壽都港市に至る間西北——東南なれとも、壽都より南は殆ど南北を指し樽岸に至りて東西に轉じ、以て前述の潮路に至る。灣口北に向ふが故に東北より西北の諸風に對して全く暴露し、船の碇繫良好なりとは云ふべからず。唯靜穩なる時に限り、港市壽都附近に錨泊することを得、灣首は朱太川の朝宗する處に當り、平沙地をなせるに反し、東西兩岸は全く低き山岳連亘し、海底險惡なり。されど前記小樽函館間の航路は此地に寄港す。辨慶岬は此附近の海岸にては、北方に尖れる三角半島の岬角にして附近礁脈著しく岬上には燈臺設置せらる。木造四角形白塗不動白光にして晴天光達九裡に及ぶ。辨慶岬より狩場山火山の西麓持田岬に至る二十一裡の海岸は、概ね淺く、陸部を浸入せる一大灣をなせども錨地なく海岸は概ね沙濱なるか若くは岩礁散布して後背は概ね高く岸に沿うて漁村相連なるを見る。持田岬の北々東には白糸岬あり、海岸はこれより持田岬を経て南に走り臺形の險崖を形成す。沿岸著しく深く、大船と雖航行するに足る。持田岬より南方オバナ岬に至る間海岸延長約二十二裡の間は、又鈍き弓形の

海岸にして、其略中央の一小區域即ち利別川の河口附近を除けば、他は皆岸高く岩礁點在す。此間小蒸汽船の錨泊に堪ふるものは、持田岬より南方九裡半なる瀬棚を擧ぐるに過ぎず。然れども灣形をなさざる地點なるが故に、少しく波浪あれば奥尻島に避けざる可らず。其他漁邑の點在すると從來と異なるとなし。この南オバナ岬は渡島山脈の西北端をなせる山岳の外側をなし、西方に突出せる岬角にして、南方の太田岬(一名帆越岬)北方のミダル岬(ミダルノ岬)と共に絶壁をなし、諸處に淺灘散在す。海岸は太田岬より東南に轉ず。太田岬の西南西には奥尻と稱する大島あり。此間を奥尻海峡と稱し、島の東北端稻穂岬との間幅約九裡半、其間の水深は中央に於て三百尋より大なり。奥尻島は地形の條に述べたる如く、稍南北に細長き島にして、主として渡島半部の主要部をなせる火山岩若くは第三紀層より成れる山岳此全部に亘りて起伏し、其海濱に終る所は概ね險崖なり。島の沿岸は一般に出入に乏しく、且つ礁脈亂岩到る所に横はり、良錨地を缺けり。先づ島の東北角には稻穂岬あり、一低角にして岬上に燈臺の設けあり。奥尻水道を照して航海者に便す。

燈臺は高湖面上一五〇呎鐵造六角形黑白横線塗にして、第三等回轉白光を發し、北八九度東より東南西を経て北五度西に至る間見るべし。晴天光達十八哩に及ぶ。岬より島の東を南下して、彌右衛門岬に至る迄は海岸直條にして礫濱陡岸に屬し、水深距岸一哩にして百尋より大なり。されば稻穂岬の南方三哩なる東風泊の如き時に泊地を以て稱せらる、も、偏東風時の怒濤に逢へば、到底船を寄すると不可なり。其の南にある釣掛は、島中第一の大邑にして、函館小樽間を航行する船には避難地をなすも、岸邊は深きに過ぎ、大船の投錨に便ならず。唯北より西に至る風に對しては、一時船舶の避難に堪ふ。彌右衛門岬の西南には島の最南端なる青苗岬あり。低角にして礁脈之を回る。之と彌右衛門山との間にある青苗灣は、東南に開ける一灣にして、偏西風時の錨地として名高し。後背は一般に砂濱なり。翻つて稻穂岬より西方に向ひ奥尻島の北岸を辿れば、島の西北角たる磯谷岬に至りて海岸略南に轉ず。此北岸の長さ約六哩岩多く、礁脈岬端に横はる。磯谷岬より南群來岬(クキヤノ岬)に至る八哩半は、此島の西岸に當り、海岸形状不規則にして岩多く、點礁

諸處に存す。前述青苗岬は西群來岬、東彌右衛門岬の間に陸地の南方に突出せる所なり。尙青苗岬の南方一二哩の處には室津島の簇岩あり。奥尻島は古來鮮漁を以て有名なる漁業地なりと雖、沿岸の地形一般に狹隘にして、漁村の發達充分ならず。稻穂岬より青苗岬に至る東岸のみ僅に村落點在するのみ。太田岬より渡島半島の西岸を南下するに、海岸の方向は太田岬より東南に向ひ、中頃大弓形を畫きて南々西に轉じ、松前半島を西より南に繞り、津輕海峡の西口角たる白神岬に至る。此間海岸の出入割合に乏しく、渡島後志の境に於てボンモシリ岬、江差の南にて洲根子岬の小突出を出せるのみにして、他は殆んど云ふに足るものなく、一般に平滑なり。唯其後背地は概して高く河流の西に口を開く所に於て低平なる小平地を控へ、尙諸處に丘陵性の後背地に連なるを見るのみ。而して波浪の打つ所は概ね砂礫濱ならざれば險崖に屬し、尙又暗礁亂岩の點在せるものあり。先づ太田岬の東南方には二三哩にして久遠灣と稱する一開灣あり。小汽船の寄泊地たり。これより東南約十哩にしてボンモシリ岬(一名關内岬)に出づ。黑色低角にして附近には岩礁擴延す。

之より渡島に入りて、熊石泊川相沼内蚊柱乙部の漁邑南に連なる。鮪ノ岬琴平岬館ノ岬乙部ノ館等の小突角あり。これを過ぐれば此南厚澤部川の口を開く處より南數哩を経て、鷗島を前に控へ江差港あり。こは起原古き和船の好避泊地にして、往時半島西海岸水産の大集散地として其名を恣にせしは實に此港市江差なり。然れども前述せし如く本島の開拓は半島部を離れ漸く軀幹部に侵入してより此地は自ら此大勢に棄てらるゝのみならず近年の不漁と港市としての資格不充分なるとは互に結合して、遂に舊時の盛況を呈せざるに至りしと亦已むを得ざるなり。但し半島部の西岸にては汽船の寄港地をなす鷗島には燈臺あり。燈高は高潮面上 10 四呎、木造四角形白塗。不動白光にして北 1 一度西より北東南を経て南 79 度西に至る間見るべく晴天光達九哩に及ぶ。江差の南に隣りて上ノ國錨地あり。西に洲根子岬を控へ、北に向つて口を開く。又此地方の小錨地なり。洲根子岬たり南方松前半島の西南角たる折戸崎に至る間二十三哩に及び、海岸は平滑にして中間少しく西に膨出し、沙濱漸崖相交はる。岸邊は概ね陡岸にして水深頗る大に前述せる二百米の同

深線は、此膨出部の岸に近づきて南方に走せ、遂に小島の西を廻りて津輕海峡に入る。此後背地は常に松前半島を形成せる山岳數多く連なりて、地形の平夷なる處稀なり。海岸にて稍著名なる漁邑は江良町にして、此南北共に江差の北部に比して漁村の發達甚だ乏し。折戸崎を距る東方少許の處に辨天島あり、圓錐礁をなし、折戸崎と白神岬との間に淺く灣入せる福山灣に對して西門をなし、福山燈臺此上に建設せらる。燈高は高潮面上八十呎、木造四角形白塗にして不動白光を放ち、南 43 度西より西北東を経て南 5 度東に至る間これを見るを得べく、晴天光達九哩に及び、尙該燈臺に霧中信號として、特別に爆發信號を設け、霧雪其他溟濛の天氣には十五分毎に一回爆發信號をなす福山灣は折戸崎と松前半島の南端白岬崎との間にある開灣にして、偏南風の時には全く錨泊に堪へず。此灣の西北隅海岸の段丘上に往時盛なりし松前城下即福山町あり。江差と同じく市況全く衰へたりと雖、本島の名邑として長く其名の存すべき處なり。港市の前海面の海底は廣き盤石を蔽へる沙殻底なるが、錨地は東より北及北西までの風には錨泊に堪ふれども、高浪の時

には錨繫安全ならず。且港内潮流急なるが故に、入港の際操舵に注意を要す。松前半島を西に離れて大島小島の兩火山島あり。就中小島は辨天島の西南約十三哩の處にある小島にして、山勢直ちに海に向つて落ち、峭壁直立す。唯東側に突出せる一小角の北部は、礫滾にして東より南を経て西に至る風波を遮り、夏時の上陸に適す。大島は小島の北西二十一哩半の處にあり。楕圓形火山にして四周陡岸をなし、島の東西並びに東北側に當りて夏季平穩の日に小艇を寄することを得る處あり。此附近水深著しく大にして、殆んど六七百尋より千尋の深さに達せる深海島の四周を廻れる觀あり。なほ奥尻島の西側も水深顯著にして、其西南數哩の所には千五百尋を示せる處あり。以上本島の西海岸に就て一言すれば、此沿岸は氣候海流の上に於て著しく他の海岸と異なる。こは後條海流の記事並びに氣候の條を参照すべし。

四 千島列島

千島列島は北海道本島とカムチツカ半島との間の火山列島にして、東アジ

千島列島

アの縁海オホーツク海陥没の南邊をなし、第三紀層とこれを貫きて迸發せる火山とによりて構造せられ、島列西南より東北に亘り、東アジアの他の諸列島の如く其東南に向つて彎曲せり。即ち東アジアの沿岸に連亘せる列島彎の一として、帝國三大列島島彎の最東北部を占め内側には縁海を湛へ、其東南外側には世界著名の深海溝なる日本海溝を控ふ、この附近は地球表面の垂直的肢節の發達より見て高低の差異最も大なる部分の一に屬す。但しオホーツク海盤は前既に根室海峡に於て述べし如く、列島に沿うて細長き海溝を存し、恰も琉球列島の内側に支那海溝を有するが如き觀あり。列島は大小種々ありと雖、何れも延長の方向列島彎と一致し、細長く東北より西南に延び、宛ら大小様々の肢骨を同一方向に散布したる如し。就中稍大形のもの、南より始め國後島・擇捉島・得撫島・新知島・溫禰古丹島・幌筵島及び占守島の數者にして他は其形何れも小に且つ概ね一個の火山より成立し、圓形若くは圓形に近き形狀を呈す。新知島の北計吐夷島・羅處和島・松輪島・捨子古丹島(但しこれは概ね二個所に噴起せる火山を細長き地頸によりて連結せるもの)・磨勘留島・阿頼度島等

即ち是にして、尙這種の小なるものは數多あり。唯爰に注意すべきは花咲半島の東北なる水晶諸島と一水道を隔て、此等の島列と同方向に延長せる色丹島のみは、其輪廓は勿論構造に於ても、一般千島列島と稍其趣きを異にすることなり。千島列島を成せる島の總數は大小三十有餘と稱す。

千島列島の位置は斯の如く北海道本島よりも更に東北に位置せるを以て、氣候生物の狀況より一般人文的諸現象は大に内地諸島と其觀を異にするのみならず、これを北海道本島に比するも猶且つ其南方なる國後擇捉の如きを除けば殆んど全くその事情を異にするが如し。殊に終歲親潮の如き寒流に洗はれ、夏季は又東南の方向よりする風によりて各島殆んど形容することを得ざる濃霧に襲はれ、森林も國後擇捉を除き、他は全く之を缺きて荒寒の景人に迫り、怒濤常に嶮崖を囓む處往々海獸の吼聲を聞くべし。凡そ這種の景は帝國の領海中、千島列島を除きては他に見るを得ざるもの。宜なり北海道本島に近き國後擇捉得撫色丹占守の五島を除きては全く永住者を絶てることや。今千島列島を述ぶるにあたり、先づ色丹島より始め、後ち國後擇捉等の諸

色丹島

島に及ばん。

色丹島は水晶諸島の最北端なる多樂島とは四十哩の色丹水道を隔て、相呼應し、其形略長方形にして長さ東北西南十五哩幅五哩、小灣入は各方面共に此の海岸を侵し、頗る重要なる錨地を有する所あり。島の地形は概ね高く東北に當りて七百米以上の高處を有するが如き、水晶諸島に於て見るを得ざる所なり。海岸は概ね險崖に屬し、深さ亦比較的淺からず。そのうち島の西南角コンブウス埼の東北方少許の處にあたり東南に向へる一灣あり。該灣の西南側には小島横はり東側には鴨島ありて灣口を三分す。是れ有名なる松ヶ濱灣にして、中央の口を其本口とし、岩陂の爲可航水道二鏈に盛まれども、水深六尋より深く、如何なる艦船も此中に安全に碇泊すべし。但し錨地の附近には點灘なきにあらず。松ヶ濱灣より東北方同じく島の東南岸は小肢節極はめてよく發達し幾多の小灣交互す。就中島の東南角に近きイテモシリ灣は港口東に面し、偏東風に苦しめらるゝ外は、他の諸風に對して又概ね安全なりと稱せらる。但し灣内岩礁多し。此灣の東北方シベトニタロ埼を廻れば、海

國後島

岸線北西に向ひ、島の極北ヒセロフ埼に至る。此岬の東に隣して斜古丹埼あり。ヒセロフ埼より海岸又轉じて西南に向ひ、ヒシネベツリと稱する岬に至る。此間ヒセロフ埼の南方には西北——東南に圓形をなして灣入せる一小灣斜古丹港あり。此灣口は少しく隘れ灣首には斜古丹と稱する千島アイヌの部落あり。港内は水深淺く、僅かに小船の碇泊に適す。斜古丹港の西隣には、マタコタン港あり。又小船の錨地に堪ふ。穴洞灣は本島の西北岸中央部を侵せる細長なる灣にして、碇繫よく小船出入し得べし。是れより尙西北岸を辿れば(前述)ヒシネベツリと稱する鈍き岬角を廻り、本島南西の海岸に移る。此處にはノトロ岬を有する一小半島南に向つて突出し、其東側にはコンブウス埼より西北に向ひたる海岸との間、穴洞灣に似たる形状の無名灣をなせり。

國後島は千島列島の西南端に位置し、根室海峡を隔て、北海道本島の根室と相對す。地形に就ては既に述べたるを以て單に其沿岸を見るに、概して高く、幾多の火山其裾を此海濱に曳き、峻岸礫濱其大部を占め、時には又險崖長く延びたる所なきにあらず。島の南端はケラモイ埼と稱し、南方に突出す

ること四漚半、低き洲舌にして、其東南には淺洲長く擴延す。此尖端にケラモイ埼燈臺あり。燈高は高潮面上四十五呎、木造八角形黑白横線塗第五等回轉白光にして十五秒毎に一光輝を發し、南五二度西より西北東を経て南六度東に至る間見るを得。晴天光達十二漚に及ぶ。此陸舌の西はノツエト埼(ノテト埼)との間を泊灣と稱し、此處は他の沿岸に似ず、後背地低平にして水深均一なり。灣首に泊村あり、根室との間汽船常に來往す。此ノツエト埼附近は、國後島の南端に峻起せる泊山の麓にあたり、その北に在るハッチャウス鼻と共に山麓の小突角をなせり。島の西海岸はこれより轉じて東北方に走りル、イ嶽の北麓亂岩岬ル、イ岬に至りて東南に折る。此岬は本島の最北角にして南にル、イ嶽茶々嶽を望む。此岬の南一小淺灣はル、イ灣なり。東北に開口し此附近ル、イ嶽より急下せる山脚落ち來りて礫濱を造る。灣の西隅は小船の風波を避くる所にして、夏季は大船の錨泊にも適する如しと云ふ。國後の西岸には集落の大なるものなし。ハッチャウス鼻に近き小田富と稱する漁邑は稍大なり。島の北岸はル、イ岬と其東島の東北岬たるアトイヤ岬との間約二十

湮餘の間南に向ひたる淺き弓形をなし、ル、イ嶽茶々嶽の兩火山此方面に傾下して錨所全く無し。この中央少しく東より島の東南岸極北にある白糠灣に至る間は一の地頭をなし、その東に梯形をなせる半島を出す。この東北角は即ちアトイヤ岬にして、南岬は赤石鼻と呼ぶ。而して其の地頭部は甚だ狭く約五湮にも達せず。此處に一の潟港トノ池あり。この小半島の沿岸中北岸は一般に砂濱をなせども、東より南に向へる部分は、背後の地形の影響を受け一般に高く特に赤石鼻附近の所は險崖絶壁にして海波常に荒く如何に漕法巧みなる舟夫も船を寄すること能はずとぞ。國後全岸の最嶮所と呼はるゝは蓋し偶然にあらず。アトイヤ岬は國後島の東北角をなせる低砂嘴にして、東北に約五湮突出し、其東北には辨天島(觸島)其他の岩礁連なる。アトイヤ燈臺は此岬端に設けられ、燈高高潮面上二一八呎を有し、鐵造六角形白塗にして、第二等回轉白色に屬し、三十秒毎に一光輝を發し以て擇捉間の國後水道及び附近の危險地を警しむ。明弧は南六九度東より南西北を経て北一九度東に至る間見るべく、晴天光達二十一湮に及ぶ。別に霧中信號あり、霧笛を設け、

霧雪或溟濛なる天候には、每一分を隔て、之を吹鳴す。アトイヤ岬の西南は、通例アトイヤ東錨地と稱する一小避難港なり。

アトイヤ岬より島の東南側をなせる海岸を經南端ケラモイ崎に至る約六十五湮の間は凹凸様々なる淺灣相連なり、尙この間には諸處に小漁邑發達す。上述半島部の西南なる白糠灣は、灣口幅五湮、灣入約二湮の開灣にして、東南に面し、西方茶々嶽東方前記赤石鼻の山地のため南より東南に亘れる方向以外の風を防ぎ、艦船の錨泊に適す。灣岸は概ね砂濱にして此灣頭に白糠の漁村あり。白糠灣より茶々嶽の東南麓を西南に廻れる間は、一般に砂礫の濱にして、後背は直ちに臺地を形成し、灣岸は峻しく礁脈又散在す。これを過ぐれば茶々嶽の西南に當り淺き灣形をなせる處あり。岸高く、その麓の砂濱に沿うて岩礁擴延すれども夏期平穩の日には、錨泊することを得べし。海岸はこれより西南を指し、岬角二三突出し、小島嶼或は淺灘諸處に横はる。斯くて瀬石植内等の小部落を過ぎ本島中央にて東面せる古釜府灣フルカクシに至る。此灣は大崎と稱する一岬角の南東に突出せる遠望、島の如き陸舌(通例古釜府山

と稱すを東に、島登の東北麓を西にせる一淺灣にして、灣口南方に向ひ南より東南に至る方向以外の風には稍安全なる泊地と稱せらる。殊に春夏の候此地方を吹く東北風(方言ヤマセ)の強き時もよくこの風浪に堪ふ。又冬期氷結せざるを以て名あり。されば國後島東南岸諸部落と根室とを航する船舶に對しては唯一の避難港なり。但し灣内二三の暗礁あり。灣の東北隅にある港市古釜府は此附近の名邑にして、島登硫黄礦地を附近に控ふるを以て、これが搬出のため定期船舶の寄港數毎月二回に及ぶ。海岸はこれより島登の東を圓く廻り、更に西方に向ひ一弓灣を造り、遙かにケラモイの陸舌に連なる。此間又海岸或は險岸或は平沙地をなし、幾多の岩礁常にこれと沿ふ。其中島登の西南麓東沸の附近は風向によりて船舶の假泊に適す。尙國後島の海深に就て一言すれば、根室海峡附近は深度著しく大なること前述の如し。東側は水晶諸島より色丹島に連なれる。列島の間は甚だ淺く、概ね四十尋に充たず。唯擇捉島との間なる國後水道に近きて漸次其深さを加へ、八十五尋乃至三百三十尋を示し、其水道の間は二百五十尋乃至二百六十八尋なりと云へり。

擇捉島

擇捉島は國後島と幅約十二哩の國後水道を以て相隔てる細長き島にして、面積千島列島中第一に位し、且つ其島上には大小幾多の火山連峙し、其間又幾多の彎入あること等は他形の條既に詳述せり。此海岸線は國後島に比すれば概して屈曲に富み、然も其彎入は國後島に於ては東南岸にあるに反し、本島に於ては西北岸即ちオホーツク海方面に多く、其の東南岸の西北岸に比し出入比較的乏しき部分と雖、國後島の西北海岸に比すれば、形狀頗る曲線勝なり。是等の配合妙なる開灣は、其成因火山の生成と頗る重要な關係あるものの如く、其特に突出をなせる所は蝌蚪狀を呈し、該火山の周縁を形成するもの甚だ多し。又圓形をなせる彎入は、此等幾多火山の間に海水浸入し自然に浸蝕してなるものにして恰も是等の火山を分離せしめんとして、未だ全く浸蝕せざるもの少しとせず。地學の大家ジュール氏の如きはこの海岸形式を以て線狀に迸發噴起せる幾多の火山に對して、方向互に并行せる潮流自然に之れを侵蝕せるに基づけるならんと云へり。蓋し一説と云ふべし。(尙同氏は此説を以て他の千島諸島をも説明せんとせり)されば此圓かなる彎入の一部分

には、多くの場合に於て高處と高處とを連ねたる鞍狀地横はり、全島の地形をして高低多様なる地貌を呈せしむ、從て海岸形状のも高低常なく、砂濱礫濱交相次ぐ。先づ島の南端圓形のベルタル岬より西北海岸を檢せんに、此岬はボンノポリ火山の西南麓にして國後水道の東門をなし、北に走せて丹根崩の淺開灣に連なる。灣はその口西に開けるを以て、偏西風を除けば、他の風に對しては一見之れを避蔽するが如きも、灣首は低き丘陵を以て東南海岸に倚り、其兩岸には高山を控ふるが故に、偏東風に對しても亦これを避くる能はず。此灣の北東には犬牙狀の高き半島を隔て、略圓形をなせる崩消灣あり。灣口北に向ひ南に入ること約四哩半、四周峯巒を繞らし其山脚直ちに落ちて峭壁峙立し、宛も屏風を以てこれを圍むに似たり。灣内甚だ深く、岸を距ること三鍵にして二百尋を越ゆと云へり。四面斷崖をなせる崩消島灣口に横はり、以て灣口を二分す。崩消灣の東北方にはアトサノポリの死火山より成れる蛭蚪狀の半島との間に内保灣と稱する大開灣あり。其灣口の幅八哩を越え、東北隅なる漁邑内保附近は錨泊地となすべし。灣岸は南方概ね石濱な

れども、此岸は概して砂濱なり。函館を基點として、紗那に往復する定期船は、此の地に寄港す。アトサヌプリの半島を北に廻れば、宇多須都灣あり。西北に向へる開灣にして又船舶の假泊に適す。宇多須都灣の西方即ちアトサヌプリの圓き半島の尖端ボロノツ鼻の附近は、東北に向へる競潮屢々發生す。尙宇多須都灣の沿岸も東西共に山岳を控へ、西にあるものは前述富士形のアトサヌプリにして、東は單冠^{キカッ}火山なり。宇多須都灣の東北角トッカリモイより北は海岸又東北に向ひ、此島の略中央に當りて西北に突出せる野斗路岬の岩角に至る。此間海岸の形状概ね弓形を呈し、北部に老門灣と稱する一小灣を劃せり。此灣は西に開き、兩岸斷崖峭立し、小舟此中に入れば、よく各方面の風を避くることを得べし。此東は東南岸の單冠灣とその位置腹背の關係をなす。概して宇多須都灣より此處に至るまでは、海岸の后背は常に高く、溪流時に大瀑布をなす。尙老門の北方野斗路岬の間に振別小錨地あり。昔日擇捉島の主要なる名邑たりしも政治上の中心は紗那に移りし以來、戸口遽かに減じ、沿岸僅に二三の家屋を存するのみ。野斗路岬の東北には之れと近く相

隣りて珊瑚崎あり。此沖合半湮以内の地には、東方に向へる競潮を見ること屢なり。

珊瑚崎の東方は留別灣と稱する開灣にして、東南岸の單冠灣とは四湮を隔てて腹背の關係をなし、灣口彼の東南に向ふに反して、これは西北に向ひ、以て擇捉島をして中央縦れたる奇形を呈せしむ。灣岸は露岩暗礁多しと雖、灣首には砂濱を止む。東南隅にある斷岩リウエンシリは此灣の錨地に對して好目標をなす。留別村は本島にては紗那に次ぎて稍市街の形をなし、漁業者來集し且つ附近開拓の成績頗佳良にして、野菜その他の農産豐なり。函館との間には大小汽船の連絡あり。留別村の東北方には登山の火山群あり。海岸は其西より北に亘れる麓を繞り、處々に險崖の小出入を連ね、遂に紗那灣に至る。紗那灣は留別灣の東北十一湮にある開灣にして、灣口西北に向ひ、沿岸岩礁點灘少からず。錨地は概ね此灣に口を開ける紗那川河口附近を擇べども、北より西に至る強風には、波浪を避くるに由なし。紗那灣には港市紗那あり。全島第一の名邑にして、稍市街の形をなし、本島政治經濟の一中心を

なす。附近水産に留み、陸産亦見るべし。函館を基點とせる航路は、冬春の風水期を除く外常に相通ず。尙紗那川は鮭の孵卵場たり。紗那の北に接して内岡錨地あり。紗那灣の東北方には積丹半島に似たる小突出チリップ火山を戴き北に向へり。其尖端はイカバノツ岬と稱す。此半島沿岸は半ば險崖にして半ば礫濱をなし、背後は此火山に接す。概して國後島の西岸は其西南端より此處に至るまでの間海深常に大にして、百尋即約二百米の同深線は上述の諸岬角に接近し、殆んどこれを掠めんとするの概あり。其外方は甚深くして距岸數湮ならずして容易に五百尋の深さに達せり。此半島より以東并びに此島の東南岸より北部一切の千島列島沿岸は、水深の測定未だ遍からざるを以て以下海深記事を省く。

イカバノツ岬より海岸は略南に進み、更に東北方に灣形を書き、島の北端の一角たる薬取岬に至る間は、大なる弓形をなせる大灣にして、西南部には別飛の錨地を控ふ。チリップ火山の東南麓に當れるを以て、灣岸岩礁散布すと雖、北西風を避くるに足る。別飛村は此灣首にありて、島の漁業地として有

少からずして、秀麗なる圓錐形を呈し、晴天には近海航路の標識となるものあり。沿岸悉く險崖にして、西南并に東北の尖端は細く尖り、附近には暗岩横はり、岩礁亦幾多散點せり。此西南端を伸津岬と云ひ、東北端なるを鳥ノ尾岬と稱す。東南海岸は中央より少しく北に偏して、只小舟港と稱する一小灣あるに過ぎざれども、西北海岸は一般に淺く入れる開灣二三を數ふべく、此中、中央より稍南に當り床丹灣あり。幅七哩、彎入一哩七錢の灣にして、沿岸も深く沖合も亦深くして、渚は平沙をなす、ここに在る小漁村床丹には船舶屢寄航す。概して千島の漁村は漁期に漁夫集まり、漁期去れば引揚ぐる習慣なるが故に、此島の如きも沿岸鮭鱈の漁獲頗る有望なるに係らず村落の發達見るべからず。されば此床丹は島に於ける唯一の村落たり。床丹より東北約十七哩に鐘灣一名オトイマモイ灣あり。周圍山地より成る開灣なり。尙東南岸唯一の彎入たる小舟港は、港内水深少なく且つ岩礁横はるを以て、小船ならざれば碇泊に適せず。要するに此島の沿岸は崖岸に屬し、多少船舶の寄港に適するものは以上の二三に過ぎず。

知理保以島
武魯頓島

新知島

得撫島の東北、南得撫水道を隔て、知理保以南北二島并びに武魯頓島あり。何れも概ね火山より成れる小島にして、船舶の寄港に堪へず。唯知理保以北島にては、其東側に沙灣と稱する一錨地を擁す。三島ともに通じて無人島なり。尙南得撫水道は強潮流ありて渦流激湍をなすを以て名あり。

以上の三島の東北には、北得撫水道あり、之れを隔て、其東北に横はれるを新知島とす。形狀又得撫島の如く細長く、島内には幾多の圓錐形をなせる大火山連峙し、沿岸通じて險崖なり。唯得撫島に比し異なるは、島の内側即ちオホーツク海に面する方に於て、新知火山地形條參照の北側に當りて新知灣、島の東北角にて武魯頓灣と稱する腎臟形彎入を有する點なり。新知灣は此灣頭にて沙濱を有し、其砂底は錨泊に堪ふ。武魯頓灣は噴火口の遺跡より成れる一灣にして、周圍は山岳を以て繞らされ、一見絶好の錨地たる觀あれども、灣口狭く灣内の水深は淺く、加ふるに密生せる海草水面に現はれ到底船舶を寄すべからず。此島には一の漁村なし。通じて是より以北占守島に至るまでの島嶼は、占守島を除き、永住の村落全く發達せず。

計吐夷島

新知島の東北には新知海峡を隔て、計吐夷島あり。又一の火山より成れる島にして、周圍は全く險崖に屬し、岩礁之れを繞る。其形概ね圓形を呈す。此北側并びに南側には僅かに上陸に適する所を存す。

宇志知島

計吐夷島の東北には、計吐夷海峡を隔て、宇志知島あり。南北二島東北西南の方向に并び、其間落潮時に露はる、礁脈を以て相連絡す。島は何れも小なれども、南島は稍大にして其島の中央より島の南方に向つて海に通ずる一灣を擁す。之れを圍繞する山岳は亦火山にして、灣を暮田灣と稱し、風浪の避難に適し、且つ水面鏡の如く、灣内よりは外洋を見るを得ず。一般の形勢新知の武魯頓灣に似、唯彼より小なるのみ。南北二島共に海岸高く船舶の寄港に適せざれども、上述せる礁脈の西部(西灣)及び東部(東灣)は一時の錨泊に堪ふ。北島の東北少許の所に摺手岩と稱する岩灘あり。其水面に現はる、ものには、黒岩と稱する一小島あり。

摺手岩

羅處和島

以上の島嶼群の東北は又摺手海峡を隔て、羅處和火山島あり。島の東部には活火山聳え、沿岸陡險にして錨地全く無し。島の大きさは計吐夷島に類し桃

松輪島

實狀を呈す。

羅處和島の北々東には、羅處和海峡を隔て、松輪島あり。形状又圓形を呈し島の中央に高き活火山聳立す。沿岸の状況亦諸島に同じ。島の東に接して全形鍋蓋の如き磐城島あり。これと松輪島との間は錨泊地となすべし。松輪島の東北方には雷公計島牟知列岩等の小なる島嶼あり。何れも火山島若くは其一部の海上に現はれたるものにして、牟知列岩の兩側は時に錨地となすべし。牟知列岩の南方の海區は、牟知海峡と稱し、その西南に在るを古老仁海峡と云ふ。是等海峡の間は、海上區別すべき標識なし。

捨子古丹島は形啞鈴狀を呈せる島にして、前述牟知列岩の東北方に横はる。亦火山島にして、其窄約部の西側には乙女灣と稱する開灣あり。灣内水深く波穩なるを以て、假泊に堪ふ。沿岸の状況亦前諸島に同じ。

捨子古丹島の西北に接して越渴磨島あり。火山島にして大き彼れよりも小さく、險崖を以て圍繞せらる。尙越渴磨島の西方には知林古丹島の小島あり。火山島にして險崖なること前と同じ。

知林古丹島

越渴磨島

捨子古丹島

春牟古丹島
温禰古丹島

捨子古丹島の東北捨子古丹水道を隔て春牟古丹島あり。島形羅處和松輪諸島に似て、沿岸亦前者の如し。春牟古丹の東北春牟古丹海峡を隔て、温禰古丹島横はる。蝸牛の殻中より脱け出づる如き形を呈し、大さ新知より小さし。火山島にして、險崖より成れること亦前に同じ。但し東岸に黒石灣と稱する一錨地ありて、水深灣底共に投錨に適す。此黒石灣の南々西に横はれる黒石火山は完全なる圓錐形を呈し、航海者の目標となる。

磨勘留島

温禰古丹島の西北には羅處和計吐夷等に似たる磨勘留島あり。火山聳立し沿岸の形勢前諸島と同じく、船舶の寄航する所を缺けり。温禰古丹島の東北には、温禰古丹海峡を隔て幌筵島横はる。列島中北方に於ける大島にして、島内數座の雄大なる火山ありて現に活動中のものもあり。島の北西岸は險崖礫濱にして沿岸岩礁極めて稀なるも、太平洋側は之れに反して斷崖比較的少なく、岩礁彼に比して甚だ多し。島の南方は數個の火山を圍繞せる陸地の突角二三ありて、其島の南端をクラフ岬西南端なるを樺里埼と云ひ、此間は武藏灣と稱する不完全なる錨地なり。樺里の北方なるをアンナウと云ふ。アン

幌筵島

阿頼度島

占守島

ナウ樺里二岬の西方には、志林規の小島を望むべし。幌筵島の中央以北は海岸殆んど變化なし。島の東北端は磐城埼と稱し、占守島とは極めて近く其最も狭まれる所海岸線淺く西に凹み、柏原灣を形成せり。此灣口幅一哩半風潮の難甚しからざる時の好避難港なり。尙柏原灣と磐城埼との間に村上灣と稱する一小灣横はれり。島と占守島との間即ち幌筵海峡を南に出れば、鳥島の列嶼あり。幌筵島の最東角荒畑埼の東方數哩の所に横はり航行の障害をなすこと少からず。尙此附近には暗岩の散布せるを見る。

幌筵島の北方磐城海峡を隔て、阿頼度島あり。我國最北の島にして北緯五十度五十六分は、實に此島の北端を過る。島の形狀又羅處和計吐夷島に似て稍彼より大なり。中央に崛起せる富士形の高山は又休火山にして、近海航海者の好目標をなす。島の周圍は風波の程度により漁船の假泊に適す。尙周圍は到る處斷崖絶壁を以て縁とられ、島の近海は夏季漁獵船の群集する所なり。幌筵島の東北には、狭き幌筵海峡を隔て、占守島あり。此島は我國の最東端をなせる島にして、地勢前諸島と異なり、甚だ低く、且つ農牧の事業も或

種類のもの之を行ふことを得。海岸線を見るに、外側即ち太平洋の方面にては險岸極めて淺き出入をなせども、これに反して幌筵海峡に面する大部分と島の内側オホーツク海に面する方とは砂濱を常とす。この外島の太平洋に面する方は岩礁淺灘諸所に在り。占守島は報効義會員居住地を以て有名なるが、其地點は幌筵海峡に面せる一小灣即ち前述幌筵島の村上灣の東南東之と相對せる片岡灣岸なり。此灣は灣口西北に面し、幅六鏈灣入三鏈にして、東北より東を経て南に至る諸風に對しては安全なり。唯灣内水深の小なると(二尋乃至四尋)北部に低潮洗岩横はれるとは大船の錨泊を不適當ならしむ。片岡灣の北方幌筵海峡の東角をなせる處は今井埼なり。是より島の北端即國端埼までは海岸の方向略東北に走り、其間村上埼と稱する砂角突出せるのみにして殆んど砂濱に屬す。然るに國端埼より南に轉じ更に西南走して幌筵海峡の南口を東方より扼せる占守埼までの太平洋岸は、前述せる如く圓形の淺き小灣入規則正しく接続し通じて險崖なり、中にて島の北角國端埼より南走せる海岸の西南に轉ずる處を東角、東角と占守埼との間東南に向ひて突出せる一

岬角をピンナクルス角と稱す。占守島の東方は露領堪察加半島の最南端たるロバトカ岬なり。是は高低起伏せる細長き陸舌にして、其盡くる所は砂丘の一狹角なりと云ふ。占守との間を千島海峡(占守海峡)と稱し最短距離七哩四分一、深さ今日までの測定によれば、最深二十尋にも達せず。但し最短距離の南北方には二十尋以上の所あり。

尙千島海峡は斯く狭く淺き海峡なるを以て潮流強く、往激湍を起す。

占守島沿海の深さに就き、海軍水路部の調査に據れば、概ね島に沿うては海深大ならず。幌筵海峡中にありては最深にても十九尋の所あるに過ぎず。海峡を出でオホーツク海方面に出づれば二十尋の深さある所は距岸三四哩に及ぶとも之れあるなく、更に轉じて千島海峡に入るも、前述せし如く二十尋の同深線は之れあるを見ず。更に太平洋の沿岸に於て之れを見るに、以上の海深と略一致せるもの、如く、ピンナクルス占守二岬の南方概ね五哩にして十尋に達する如し。唯ピンナクルス角と東角との間に於ては、二十尋の同深線稍陸に近づき、距岸二哩にして二十四五尋を數ふ。之れを要するに、千島

列島中少くとも北部を占むるものは、何れも淺き海底臺地上に其峰頭を露はせるものと謂ふべし。

五 海流及び潮汐

北海道近海を流る、海流を観るに、暖流は對馬海流、寒流は千島海流及び樺太海流なり。

對馬海流

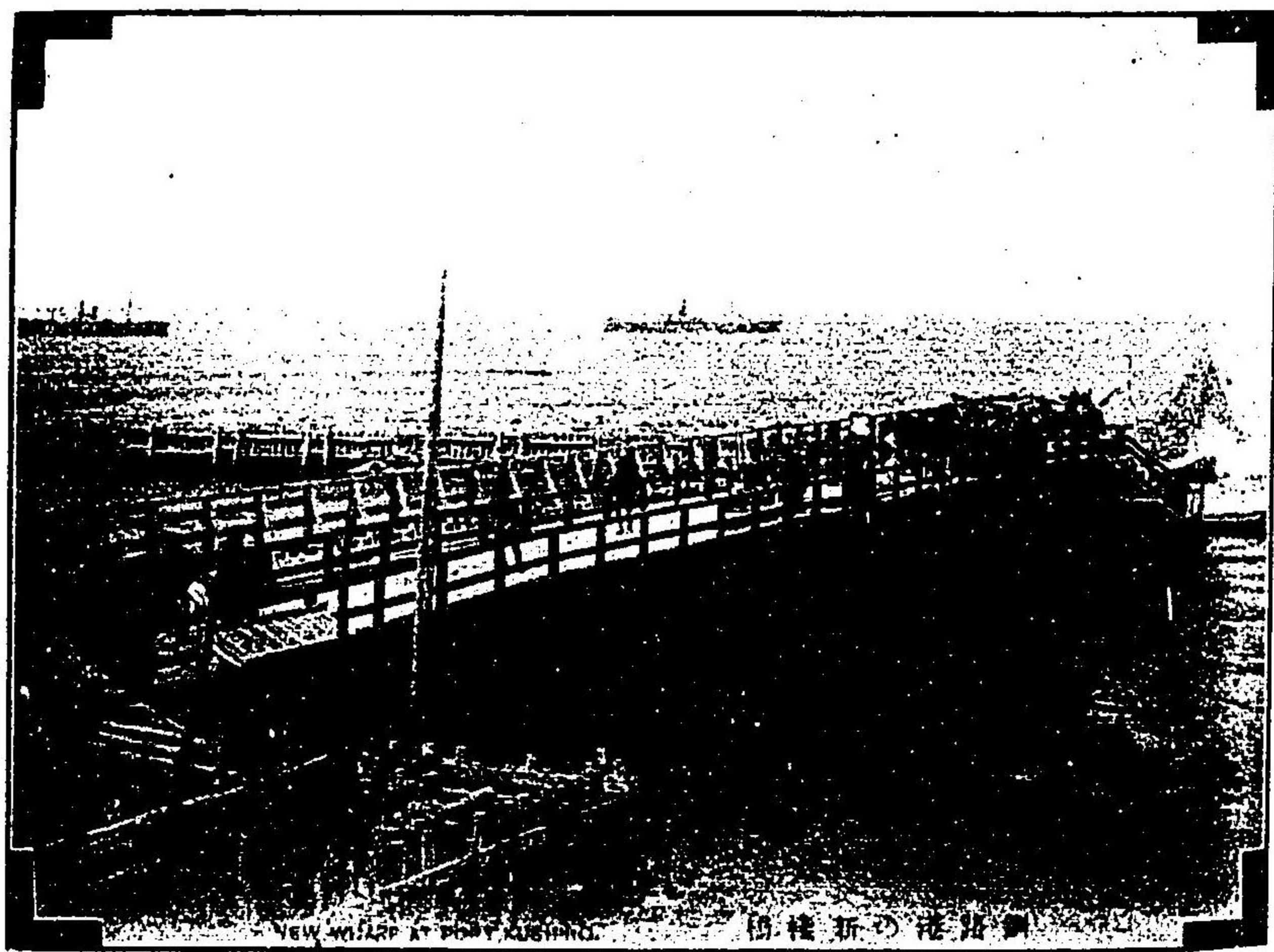
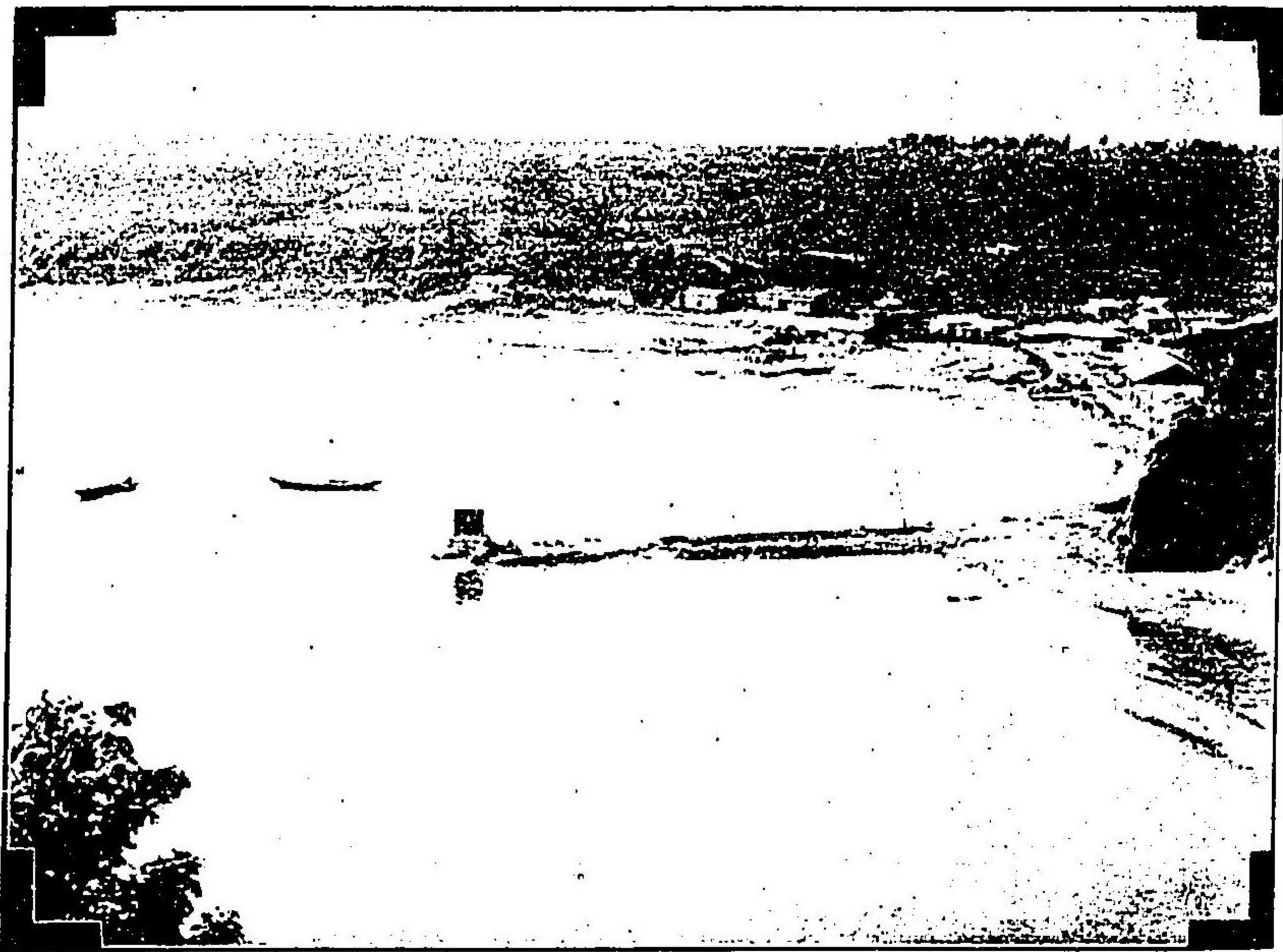
對馬海流は東支那海より日本海に入り本州に沿うて北するや、一支を津輕海峡に出し、同海峡を經、日高沿岸にて千島海流と會同す。然れども其大部は本島の西岸より樺太の西岸に沿うて北進す。而して其一派宗谷海峡を東に通過するものは一は樺太の東南海岸を過り、一は本島の東北岸即ち北見の沿岸に沿うて東南流し、知床岬に至り、根室海峡に入るものと千島列島の西北岸に沿うて北若くは東北に流るゝものとの二支派を分つ。速度は津輕海峡の北方は毎時半哩の速度を以て本島の西岸に沿うて流れ、宗谷海峡に於ては平均二哩時に潮流によりて増減す。北見の沿岸又は千島の北西岸に於ても殆ん

千島海流

と同様なるが如し。而して其温度は日本海流に於て常に見る所の水温即ち兩側の海水より暖きこと五度乃至十五度の間なるに反し、千島の西北岸を北又は東北に進める支派は、該列島の東南岸を南下せる千島海流に比すれば、僅かに五六度高しと云へり。

千島海流(親潮)はベーリング海峡より南下するものとなせる説と、オホーツク海の東北部より發源し千島列島の間を南に出でてカムチャツカの東より來る寒流と結合して南下するものなりとせる説とありて、決する所あらずと雖、單に事實として之れを見れば、千島列島の間には上述の寒流もあり。亦列島の外側を西南に流るる寒流もありて、北海道本島にては花咲半島より釧路十勝日高沿岸を廻り、之れより南進して本州東岸に達するものの如し。其速度は一般に著はれず、即ち一時間一哩に及ぶは稀にして、津輕海峡の東方若干距離の間は、該海峡より出づる對馬海流の分派のために壓倒せられ、其結果本島の襟裳岬以南にては、これが流向東に偏するを見る。但し此海流の一派は西して内浦灣に入り、本島の南岸を廻り、龜田半島の東南端恵山岬に至り、

港 咲 花 國 室 根 (甲)



橋 棧 新 の 港 路 釧 國 路 釧 (乙)

(第 十 六 圖)

樺太海流

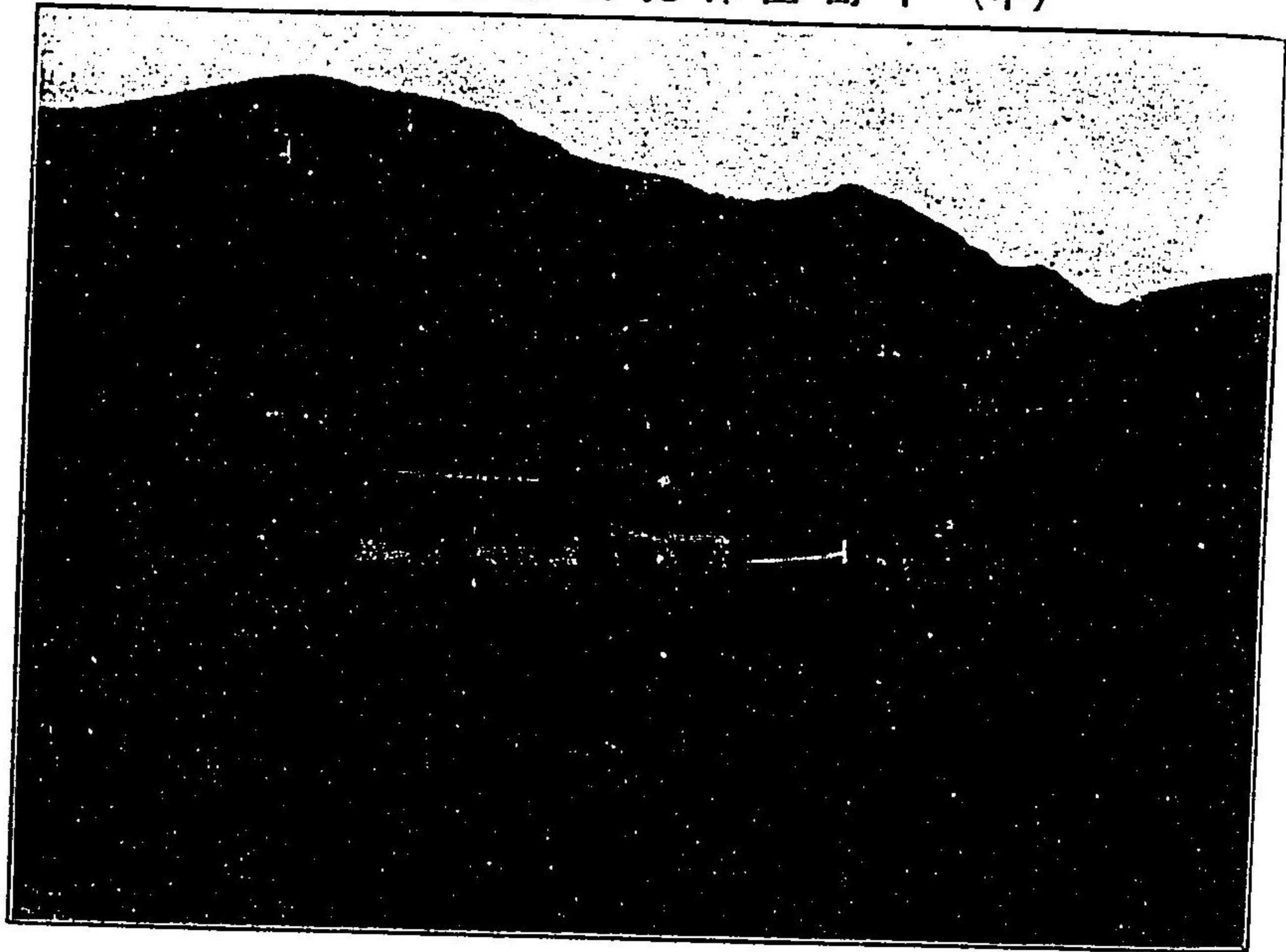
潮汐

津輕海峡を東流せる暖流と相合す。而して速度小なるを以て海峡に突進する力なし。概して此寒流の流域速度は、時季によりて異なり冬季は廣く且つ強盛なれども、夏季は之れに反す。而して温度は今日迄知らるゝ處によれば、四月は三十度五月は三十三度乃至三十五度六月より八月中旬迄は三十五六度、八月中旬より十月末までは三十七度乃至四十二度となる。

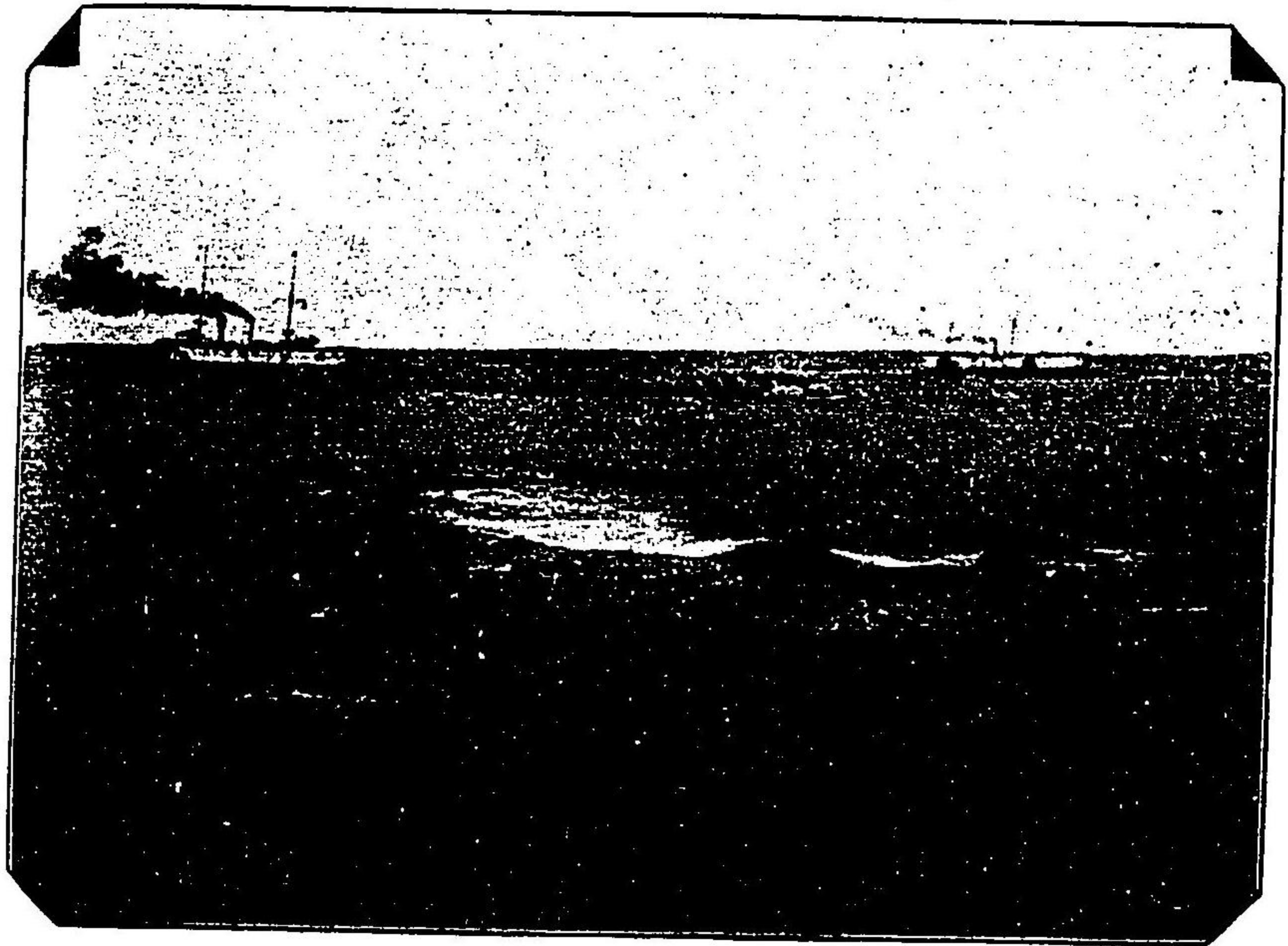
樺太海流は樺太の東岸に沿ひ南流し、一派は宗谷海峡に入り、一派は東南に流れ、千島列島の諸海峡を過ぎ親潮に合す。然れども其詳細に至りては未だ精確なる調査を得ず。

北海道近海を洗ふ潮浪は、東方より襲來し、朔望日に於て四時前後を以て千島列島及び本島の東南側に達し、之より南して漸次本州の東岸に向ふ。但し千島列島にては、各島の間なる諸海峡を経て西北に向ひオホーツク海に入るものあり。又本島の東を南下するものゝうちには、西に岐れ津輕海峡より日本海に突進せんとするものあり。然るに是は九州の北方より日本海を北上したる潮浪の津輕海峡に入れるものと汐首岬邊にて會同し、且つその高潮時

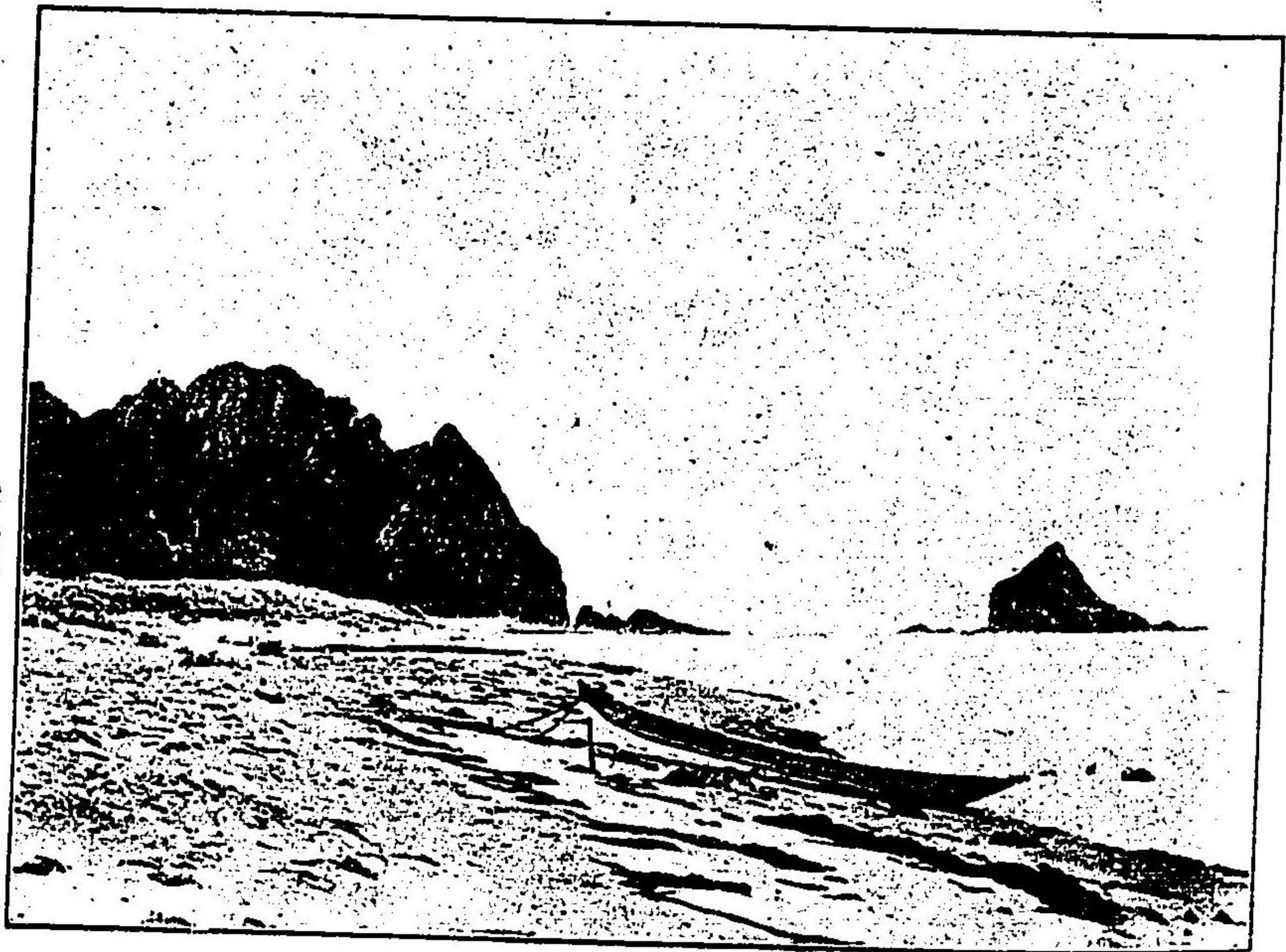
千島國捉島沿岸の漁舎 (甲)



根室港紅煙崎 (甲)



(第十八圖)



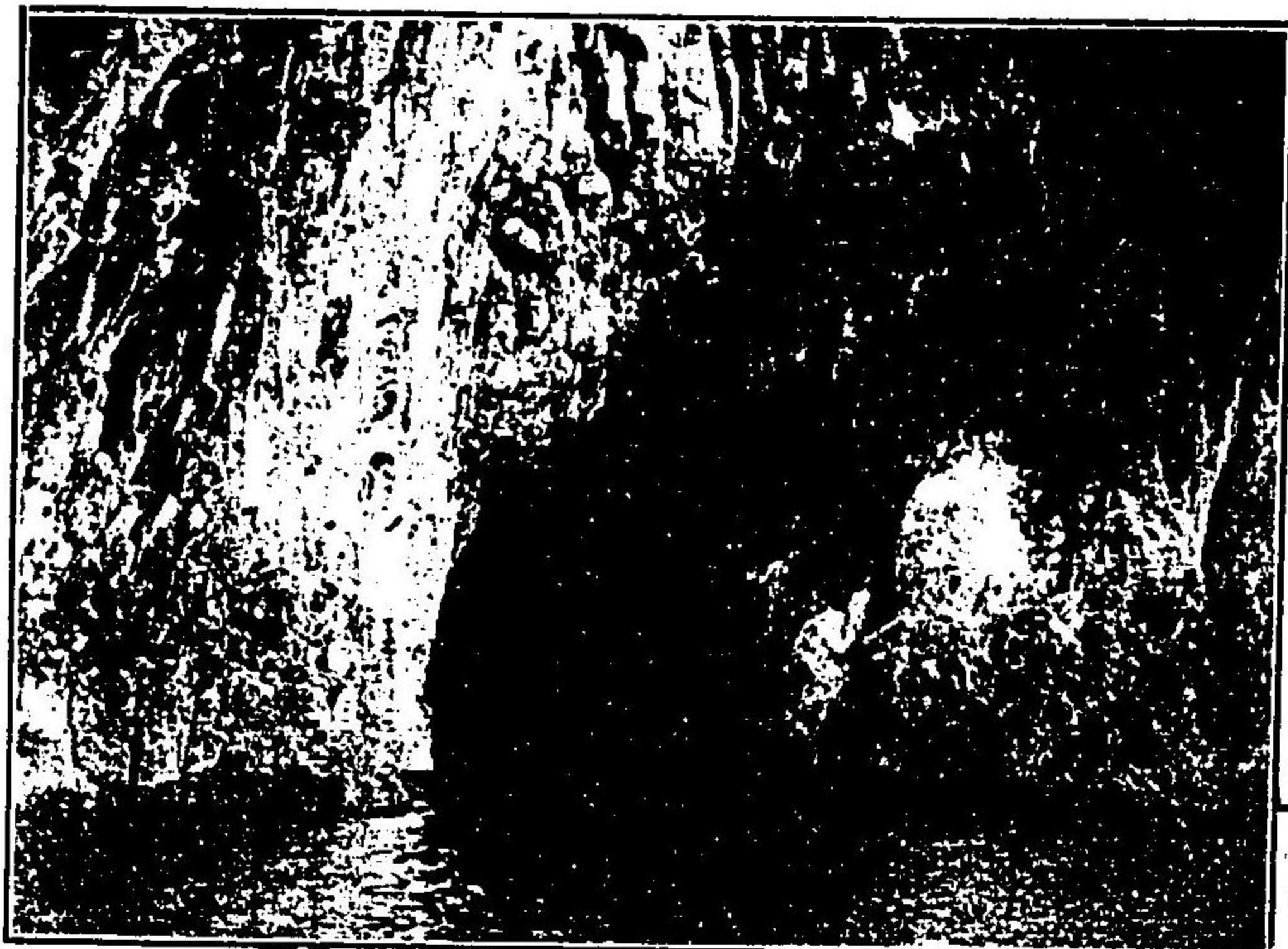
千島國後島無二ノ岬 (乙)



(乙) 千島國後島腐れ岩 (柱狀節理を看よ)

(第十七圖)

口入窟洞マナア館函國島渡(甲)



(乙) 膽振國登別温泉場

(第十九圖)

場浴泉温同(丙)

は兩者共に殆ど同時なるを以て、該岬以東の漲潮流は西し以西のは東す。されば汐首附近の海流は常に東流すれど、大潮に於ては一日中午前七時頃より午後四時頃の間を最盛時とし、其弱勢時中には往々西流を見ることあり。又小潮にありては水面の較差著しく小なるが故に、大潮時に及ばすと雖、潮流に打勝ち殆んど終日東流す。

北海道本島の西岸は日本海の潮浪によりて支配せられ、宗谷海峡の附近にては九州北岸より後ること八時間許、本島の東岸より十二時間許遅し。されど宗谷海峡にては、千島列島方面よりオホーツク海に入れる湖浪と合同し、此海峡附近に高潮をなすが如し。大體日本海に於ける大潮升は太平洋に比して小に一尺乃至三尺の通則に漏れず。之れに反して太平洋岸にては、カムチャツカの東岸より本州の東岸に至るまでは、大潮升四尺乃至六尺を常とす。千島列島間の潮汐及び潮流は往々不規則なれ共昇降差三尺乃至六尺にして、漲潮流は各海峡を過ぎ西北に流れてオホーツク海に入り、落潮流は之に反す。その速度四五節にして、各島端附近に烈しき激湍を起し、船舶に對し危険

を與ふること少からず。

地名	朔望高潮	大潮升	小潮升	小潮差
函館港	四時十分	三 ³ / ₄ 呎	二 ¹ / ₄ 呎	四分三呎
室蘭港	三時四十六分	六呎	三呎半	一 ¹ / ₄ 呎
釧路港	四時九分	五 ¹ / ₄ 呎	三 ¹ / ₄ 呎	一呎
根室港	四時九分	五呎半	三 ¹ / ₄ 呎	一呎
稚内港	四時四分	一呎	半呎	〇呎
鴛泊灣(利尻島)	四時五十六分	一呎	半呎	
留萌	四時四十五分	一呎	四分三呎	四分一呎
小樽港	四時十二分	一 ¹ / ₄ 呎	四分三呎	四分一呎
岩内港	四時二十七分	一 ¹ / ₄ 呎	四分三呎	四分一呎
奥尻島(青苗灣)	三時五十四分	一 ¹ / ₄ 呎	四分三呎	四分一呎
福山町	四時四十三分	一呎半	一呎	四分一呎

流水

色丹島(斜古丹港)三時五十五分 四呎半 二³/₄呎 四分三呎
 泊灣(國後島) 四時九分 五³/₄呎 三呎半 一呎
 内保灣(擇捉島)四時五分 四呎半 二呎半 半呎
 床丹灣(得撫島)三時二十二分 四¹/₄呎 三¹/₄呎 二呎
 幌筵海峡 六時五十三分 五¹/₄呎 五¹/₄呎 二呎

北海道沿岸及び樺太の近海は、冬季より初春に亘り流水の襲來するを以て有名なり。本島にては北見根室の沿岸最も甚しく、釧路十勝に至りて稍其害を免がる。元來北見根室沿岸は一月下旬より三月初旬まで凍結するを常とするが故に、之れと此時期に當り襲來する流水とのために、凡そ十二月下旬より三月下旬までは、海路殆ど通行し得ざる厄に逢ふ。流水の起る原因は、沿岸結氷の風に破碎せられ、海流と風力とによりて浮動するにあり。北海道の東北岸に襲來する流水は其始めオホーツク海西北邊に起るが如く、樺太の東岸を南下して宗谷海峡に至り、二派に分れて一は海峡を西進し、利尻島附近に至りて消滅するものの如くなれども、一は北見の沿岸に沿うて東南に下り

知床岬に至りて根室海峡に入るものと、國後島の北西岸を過ぎ、擇捉島方面に至りて附近の水道より太平洋に流出するものとの二派に分る。後者の一部は千島海流に伴はるる流水と合し、擇捉國後二島の外側即ち太平洋岸を西南流して根室近海に至りて、先きの一分派即ち根室海峡を南下せるものと合同し、猛烈なる勢をなして、或は東して太平洋に去るものと、或は千島海流に従ひ釧路十勝の沿岸をかすめ、遠く襟裳岬附近に至りて消滅するものとあり。一般に流水の動力は風力と海流との二者なれども、風最も主にして、海流によるものは進行遅々として漂來す。此風力は此地方に於ては冬季に著しく主に北乃至西方の卓越風なりとす。されば其位置によりて流水の盛衰を支配する風の方向各相同じからずと雖、先づ北見沿岸の西北部は北乃至東の風を以て來り、南乃至西の風によりて去り、又網走より根室に至るまでは北乃至西の風にて來り、南乃至西南の風にて去り、根室釧路等の外岸は前二者と趣を異にし、東乃至南の風を以て來り、西北乃至西南の風を以て去る。之と同じく千島列島に於ては、東南岸と西北岸とは互に去來を異にし、東南岸は主に

偏東風にて來り、偏西風にて去れども、西北岸は北乃至西の風にて來り、西乃至東及び西南風にて去ると云へり。左に水路部の記事に従ひ明治二十五年より同三十七年に至る十三ヶ年間各地にて觀察せし流水去來の平均月日并びに平均中間日數を掲げん。

宗谷岬	初來 一月二十五日	終去 三月二十日	五十二日
枝幸	初來 一月二十四日	終去 三月十二日	四十八日
網走	初來 一月十九日	終去 四月十四日	八十二日
根室	初來 一月十三日	終去 四月三日	八十一日
紗那	初來 二月二十日	終去 四月二十日	六十九日
落石崎	初來 二月十八日	終去 四月五日	四十七日

第三章 地質

一 汎論

汎論

北海道の基礎を構成する地質系統は古生大統を以て最も主要なるものとし、本州の基礎を構成する始原大統は殆んど全く之を缺くと言ひて差支なきは北海道の地質構造が本州と其の趣を異にする重なる事實の一なり。實に北海道に於ては古生大統より古代に屬する岩層は僅に一局部に露出し、或は單に流礫として溪流中に存するに過ぎざるなり。又火成岩の大噴出が古生層の沈積以前に發生せしや否やも、今日に於ては十分に之を詳にする能はず、他なし本道に於て古生層の下部に未だ這般の岩類を發見せざればなり。固より北海道の古生大統と稱するものの中には雲母剝岩ホルンフェルス角閃岩等の多く存在する見、又處によりては輝岩輝石角閃岩綠泥剝岩千枚岩等あるも此等の剝岩は始原大統の岩石にあらず、一部は古生層下部の變質岩にして他の一部は普通の粘板岩及び砂岩の花崗岩等と接觸して其の石理及び鑛物成分を變じた

欠

MISSING

るものに外ならず。古生層の化石は北海道に於ては内地に於けるよりも一層稀にして單に保存不完全なる海百合の莖及び輝綠凝灰岩中に放散蟲類を發見したるに過ぎず。北海道古生層の岩石中唯一の顯著なる事實は上川附近のチカプニ山より採取せる輝岩中に放散蟲様の化石を發見したること是れなり。

古生代には花崗岩閃綠岩斑輝岩橄欖岩輝綠岩及び玢岩が處々に噴出し、中に就き輝綠凝灰岩は水成岩の大部分を構成せり。火成岩中には花崗岩を以て頒布の最も廣き者とし、彼の砂岩及び粘板岩に接觸變質を與へ此等の岩石をして雲母剝岩又は千板岩様の者とならしめたるは主として此の岩石の作用に歸せざる可らず、此等の接觸變質岩石の廣く擴布せるの事實は之れを特別の系統に屬せしむるの可なるが如きも、常に其の普通の水成岩と漸移するの事實は其の普通の水成岩の變質せるものに外ならざること證して餘りあるものなり。此等の深成岩に關する他の困難なる問題は其の一部は片麻岩系に屬するが如き片狀石理の著しく發達するものあること是れなり。然れども其の現出の狀態に由りて之れを見れば、彼等は眞の火成岩の壓力變質を受け局部的に

變化せしものなることは争ふ可らざるの事實なるが如し。

古生層は多くの障害を受け褶曲して後南北の方向に走る山脈を形成す。此の山脈の兩側に沿ひ新時代の地層は不整合的に横はる。北海道には中生大統中三疊系を缺き、又侏羅系の發達を認めざるが、之に反して白堊系は一種特別の發達を成し、其の保存良好なるアンモン介其の他の化石を多量に出だすの點に於て到底、日本の他地方の企て及ぶ可らざるものあり。人若し夕張川若くは幾春別川に沿ひ遡るに際し、幾多の流礫中に散在する泥灰質の團塊を割れば諸種のアンモン介又はイノセラムスの美麗なる化石を其の中に發見することは極めて容易なることなり。此の白堊系の海成層は一部は全く凝灰質なるも、其の頒布本州に於けるが如く廣からず。然れども花崗岩其の他の火成岩が古生代に於けるが如く中生代にも亦盛に噴出したることは本州に於けると同じ。

白堊系の岩石に凝灰質の物質を供給したる熔岩類の噴出は中生代よりして第三紀に至る迄連綿として永續し第三系に屬する砂岩及び泥板岩は概ね多少

の凝灰質を帶び、又は凝灰岩の厚層を其の間に介在し、或は富士岩又は流紋岩を相伴うて出づ。火山岩中玄武岩は甚だ少きも、粗粒の流紋岩の浮石質の構造を有するものは甚だ廣く分布す。第三紀層は中新統の淡水成層及び鮮新統の海水成層を以て代表せられ、前者には石炭植物化石及び軟體動物を、後者には夥多の介殼化石を埋藏す。第三紀層と白堊系との區別は其の岩質の上に於て著しく差異なきを以て之を區別すること甚だ困難にして、單に其の埋藏する所の化石によりて又時としては多少不整合的關係よりして之れを區別し得るに過ぎず。

北海道に於ける第四紀層亦決して輕々に看過すべからざるものあり。海岸段丘は殆ど到る所の沿岸に發達し、本州の北部に於けるものより遙に廣く且つ美麗なるものあり。又北海道諸地方に於ける浮石の厚き堆積層も第四系に屬し、此等は大に學者の注意を惹けり。

之を要するに北海道の地質は本州に發達せるものと大體に於て甚だしく異なるを見ざるも唯、白堊系は其の保存良好にして且つ珍奇なる化石の多量を

出だす點に於て本州に於けるものと大に其の趣きを異にするが如し。又北海道の白堊系及び第三系には内地に於て極めて普通なる石灰岩を殆んど全く缺如するに反してヌクラボロナイカ *Nucula poronica* 及びベネリカルデア *Venericardia compressa* の特有化石を含む泥板岩あり。古生代の石灰岩中に全く *Fusulina* 及び *Shuwa* を缺くことは其の地質の分類をして一層困難ならしむ。火成岩に於ては玄武岩及び石英斑岩は殆ど全く之を缺くに反し粗粒なる流紋岩は斑狀流紋岩及び橄欖岩等と共に廣く發達するを見る。

眼を轉して應用地質の方面を見れば金屬鑛山は然別鑛山の休坑以來僅に幌別の金銀鑛及び國富の黒鑛に一縷の命脈を繋げるに過ぎずして、其の他は徹々として振はずと云はざるべからず。之に反して石炭及び硫黄は其の産額の大なる點及び鑛質の善良なる點に於て優に内地の夫れに匹敵し、又は凌駕するものあり。即ち北海道産石炭は九州福岡縣を除くの外其の他の内地産のもの、其の鑛質及び鑛量の點に於て北海道産に比すべきものなく、硫黄山の如きは陸中劍山硫黄山の廢坑となりし以來押野硫黄山は其の産額の點に於て

本邦中第一位を占め、其の他岩雄登古武井鹿部等の硫黄山亦本邦中屈指のものに屬し、漸く福島縣沼尻に一着を輸するに過ぎざるものあり、尙北海道の地質鑛物の調査は目下政府特に鋭意調査中なるを以て數年を出でずして其の地質構造及び鑛物賦存の状態を詳にし、大に國家利用の道を拓くに至らん。

二 始原大統

始原大統

晶質剝岩系 北海道の晶質剝岩系は日高國三石川の下流に一の小露出あるのみにして、其の他は日高國鷓川沙流及びケリマップ等の諸川、并に天鹽川の支流トイカムベツパンケナイ等に僅に其の流礫あるに過ぎざるを以て固より其の位置及び廣袤等を知る可らず、從て地質圖には之を區別せざりき。神保博士に據れば、日高山脈の花崗岩の西に沿ひ南に延亘し、雨龍川及び天鹽川の縦谷に沿ひ、宗谷岬に向ひ連亘する者の如し。岩石は角閃岩綠泥剝岩斑色硅岩綠簾剝岩千枚岩點紋角閃岩等にして、角閃岩中には閃綠岩類の變質せるが如きもの往々にして是れあり。

角閃岩は完晶質にして主として角閃石より成り、其の他石英金紅石黝簾石、柘榴石及び斜長石を交へ、閃綠岩類の變質せるが如きものあり。日高國三石川の下流に小露出あり。

綠泥剝岩は日高國ケリマッブ川の流礫として發見せられ、主として綠泥石の纖維より成り、綠簾石粒を混じ、板狀を呈す。

斑色珪岩は膽振國鷓川、日高國シビチャリ川の流礫として發見せられ、著しく板狀を呈し、青綠色及び褐赤色の二層より成る。青綠色層は石英絹雲母及陽起石より成り、少量の綠簾石粒を混じ、褐赤色層は石英赤鐵礦陽起石絹雲母及び綠簾石粒より成る。綠簾片岩は綠簾石、少量の絹雲母及び、石英の片狀集合物にして淡綠色を帶び、石狩國雨龍川に其の流礫あり。

千枚岩は日高國シビチャリ川及び天鹽國オンネシヨサンベツ川の流礫となりて出で、葉片狀を呈し、淡黝色を帶び、石英絹雲母綠簾石及び石墨より成る。蓋し關東地方の石墨絹雲母綠岩に密接の關係を有するならん。

點紋角閃岩は石英角閃石(其の一部は藍閃石)絹雲母長石金紅石及び赤鐵礦よ

り成り、時として柘榴石及び電氣石を含むことあり。白色の斑點は長石粒よりなる。天鹽川の支流マボロマ川、ペンケナイ川等の流石として發見せらる。

三 古生大統

古生大統

北海道の中央を縦斷する謂はゆる蝦夷山系は大部分は古生層より成るも一般に甚だ化石に乏しく、且つ層位の如きも精細の調査を経たる所甚だ少きも略々山軸の方向に沿ひ、北北西より南南東の層向を有するものの如く、又岩石の性質及び其の成層の順序の如きも大體に於て殆んど關東及び四國地方のものと同じと云ふを得べきが如し。神威古潭附近に於ける觀察に由れば、古生層下部を構成する石灰岩を夾める輝岩類は其の上部を構成する砂岩粘板岩石灰岩輝綠凝灰岩等とは整合に重疊す。

古生層下部(御荷鉢系) 本系は主として蝦夷山系の西側に現はれ、之れを構成する岩石は輝岩及び綠泥角閃岩藍閃剝岩及び剝泥剝岩の如き其の變成物にして、其の間に晶質石灰岩千枚岩及び石英剝岩を介在し、石狩河畔に好露出

あり。又神威古潭に於ては蛇紋岩の大塊之れと相伴ふ。

輝岩は關東地方に於けるが如く本系の主要岩石にして、新鮮なる者は綠色又は淡褐色の輝石の集合より成り、時としては多少の石英又は長石を含む綠色又は淡灰色剝狀の岩石にして、多少分解すれば輝石は綠簾石又は藍閃石又は綠泥石に變ず。其の多量の綠泥石を含むものは綠泥剝岩に、藍閃石を含むものは藍閃剝岩に移化す。神保理學博士は神威古潭の東約三里のハンメンザンに露出する緻密なる輝岩中より、普通の輝綠凝灰岩中に發見するが如き放散蟲に似たる生物の遺跡を發見したるとあり。是に由りて之を觀れば輝岩は上部秩父系の輝綠凝灰岩に親密の關係を有し、斑礫岩類の凝灰岩なるが如し。輝岩中に介在する千枚岩は暗色又は綠灰色を帯び、片狀を呈し、絹雲母石墨質物より成り、綠簾石粒を混じ、稀に柘榴石を含む。

石英剝岩は灰色にして絹雲母を含み、片狀著し。輝岩中に介在して、神威古潭に露出す。

晶質石灰岩は輝岩中に扁桃狀の塊を成し、或は薄層を成して出で、神威古

潭附近に露出し灰色を呈し、粗粒質にして著しき副成分礦物は之れを缺く。

蛇紋岩は輝岩を相伴うて出で、一部は暗綠色にして不規則に割れ、一部は帶綠色にして多少片狀を呈す。

上部秩父系 上部秩父系は下部秩父系を整合的に被覆し、北海道本島の主軸を形成す。岩石は砂岩粘板岩石灰岩輝綠凝灰岩硅岩角岩アヂノール板岩礫岩及び角礫岩千枚岩角閃岩にして化石を埋藏すること甚だ少きを以て、單に岩質上及び現出の狀態上上部秩父系に屬するものたるを知るに過ぎず。

砂岩は通常灰色緻密なるも、時に綠色凝灰質を帯び、多少板狀を呈す。其の凝灰質を帯ぶるは放散蟲の化石を埋藏する輝綠凝灰岩と密接の關係を有するを知るべし。細粒乃至中粒を普通とするも時としては小礫を混することあり。

粘板岩は暗色にして剝性に富じか、淡色にして砂質を帯ぶか、或は多くの砂粒を含む結果として全く砂岩に傾くことありて、孰れの場合に於ても多少板狀構造を呈す。未だ化石を發見せず。膽振國鵝川溪谷の上部に露出する粘

板岩中には淡灰乃至暗色の千枚岩薄層を介在す。

石灰岩は緻密にして板状を呈するものあり、或は晶質にして塊状なるあり、通常灰色乃至帯褐色を呈する晶質のものは多くは白色蔷薇赤色又は帯緑色にして種々の縞理を呈す。然れども白色糖状大理石として裝飾に適すべきものは甚だ少し、神保博士に據れば後志國トマリ川及び渡島國ハラグチ及びネブタ産の者には海百合の柄部の不完全のものを埋藏すと云ふ。

輝綠凝灰岩は紫色又は緑色を呈し、數、剝理を帯ぶるも、石英を含有するものは塊状なり。石英大塊を成して存在するときは硅岩に移化す。通常放散蟲の化石を埋藏す。淺井理學士の石狩川の支流オサラベツの下流より採集せるものの中には、外觀は、膽振國鵠川の西岸にある角閃石を含む石英岩の如きも、中に放散蟲の遺骸を埋藏す。

硅岩は膽振國鵠川の礫中には角閃岩と共に存在し、石狩國上川郡オサラベツに於ては單獨に露出す、之れを顯微鏡下に照すに、主として石英及び陽起石より成り、此の他長石及び褐色の鐵質物を混するを知る。色は灰色乃至緑

灰色にして赤色輝綠凝灰岩の硅質部に似たる所あり。蓋し普通の輝綠凝灰岩の一變ならんか。オサラベツの褐色岩中には放散蟲を含む。

アヂノール板岩は綠色乃至緑灰色を帯び薄板状を呈し、顯微鏡下に之れを照らせば主として石英長石及び綠簾石・綠泥石より成るを知る。上川郡石狩川オサラベツ及びシビチャリ川のボヨに露出す。

礫岩及び角礫岩は單に膽振國鵠川等の流礫となりて出づるに過ぎず。之れを第三系のものとして區別するは、其の著しく緻密にして硅質を帯ぶるにあり。角閃岩は外觀は暗色の粘板岩に酷似するも、之れを顯微鏡下に照らせば石英質物及び陽起石より成り、單に流礫として出づるに過ぎず。神保博士は其の北上山系を構成するものに酷似するを以て之を古生層に屬するものとせり。一方に於ては粘板岩に一方に於ては輝綠凝灰岩に近し。

以上諸岩類は甚だしく障害を受け居ることは争ふ可らざる事實なるも、層位を定むべき材料と標準化石に乏しきを以て、其の成層の順序等を知悉するを得ざるは吾人の甚だ遺憾とする所なり。但し層向は一般に南北のもの多

きが如し。又以上の諸岩類は花崗岩類の如き火成岩の接觸變質を受け、粘板岩は雲母粘板岩雲剝岩又はホルンフェルスとなり、砂岩は雲母砂岩雲母硅岩となり、輝綠凝灰岩は角閃岩となり、石灰岩は著く晶質を呈するに至れり。而して神保博士に據れば北見フレベツ、後志ラルイシ等の雲母粘板岩中に堇青石を含むもの少からずと云ふ。

以下各地に發達する古生層に就き、稍詳に之れを説明すべし。

日高國沙流川流域 日高國沙流川流域に於ける古生層は、本流の中部オサツナイウサツプ間及び支流チロロの上流地方に發達す。之れを構成する岩石は赤黝白等の雜色を帶び、又は白色若くは灰白色、或は黝色緻密の硅岩、藍黝色緻密の角岩灰色中粒又は黒色緻密若くは黝色にして無數の石英脈に貫通せらるゝ砂岩、小豆色綠色又は暗黝色の輝綠凝灰岩、淡灰色乃至灰色の晶質石灰岩及び輝岩にして、岡村理學士によればオサツナイ及びウサツプ間に露出するものは略南北の層向を有し、其の成績順序を下部より示せば次の如し。

- 一 砂岩及び粘板岩の互層、但し少量の輝綠凝灰岩を交ふ

二 砂岩

三 輝綠凝灰岩

四 石灰岩

又チロロ上流地方に露はるゝものは略南北の層向を有し、東に傾斜し、其の成績順序を下より示せば次の如し。

一 砂岩及び暗黝色輝綠凝灰岩、但し粘板岩及び輝岩を交ふ

二 灰白色及び白色石灰岩

三 砂岩及び粘板岩

四 石灰岩

五 砂岩

六 雜色石英岩

同マカピラ川流域 本流域に於て古生層の最も能く發達せるはメウシナイ及ペンケイワナイ間にして、岩石は輝綠凝灰岩輝岩粘板岩硅岩硬砂岩等にして、下部は主として輝綠凝灰岩、上部は主として粘板岩より成る。輝綠凝灰岩は

綠色乃至赤褐色にして、支流ハシユニナラ附近に於ては卵大乃至拳大の輝綠岩塊を含有し、礫岩質を帶ぶ。屢赤色硅岩粘板岩及び綠色角岩の薄層を挟む。粘板岩は黑色を帶び剝性顯著にして千枚岩に近く、屢淡綠色の石英板岩及び硬砂岩を交ふ。其の他本岩は往々厚さ一二寸以下の石英脈を胚胎し、其の多くは層面に沿うて層狀を成せり。ペンケイワナイ及びシユトニー間及びカビラ川上流に露出する輝岩は、一方に於ては輝綠凝灰岩、他方に於ては粘板岩若くは砂岩に移化し、石英の細脈に富む。主として輝石粒より成り、其の多くは働力作用により碎屑し、又後成の石英及び綠泥質物を伴ふ。

同國新冠・静内・三石・三郡地方 日高山脈の西側の高原性山地帯の大部を構成するものは古生層にして、實に新冠・静内・三石・三郡に跨る。岡村理學士に據れば、之れを構成する岩石は雜色凝灰岩類粘板岩礫岩狀粘板岩砂岩石灰岩にして大凡日高山脈中軸の方向と同じく北四十度西の層向を有し、南方に於ては二つの背斜を構成し、北方に於ては西方に傾斜す。分ちて上下の二部と成すを得べく、上部は雜色凝灰岩類凝灰質岩砂粘板岩輝綠凝灰岩等より成り、一

枚の石灰岩層を介在す下部は砂岩石英岩粘板岩等より成り、一枚乃至二枚の石、灰岩層を介在し、前者の東北側に發達せり。

雜色凝灰岩は暗紫色乃至綠色にして細粒緻密光澤を缺き、方解石の細脈を通じ、又は杏仁狀空隙に方解石を充たす。其の片狀石理發達して光澤を帶ぶるに至るときは輝綠凝灰岩に、砂質を帶ぶるときは砂岩に、泥質を帶ぶるときは粘板岩に、石英質を帶ぶるときは硅岩に移化す、新冠・染退二川の中流及び三石・龜舞兩河の上流地方に發達す。

礫岩狀粘板岩とは千枚岩質粘板岩中に大小不規則の砂岩塊包含するものにして、岡村理學士に據れば、初め砂岩及び粘板岩の互層を成せしものが、横壓力を受け褶曲するに際し、砂岩は扁桃狀を呈し、褶曲益々烈しきに従ひ扁桃狀の砂岩塊に分離し、遂に粘板岩は千枚岩質に、砂岩は不規則の岩塊となり、全體礫岩狀を呈するに至れりと云ふ。

日高國南部及び十勝國廣尾郡地方 此の地方に於ける古生層は日高十勝の國境を劃せる一大花崗岩塊の兩側に發達す。山根理學士は次の如く之れを上

下の二部に分てり。

下部 硅岩輝綠凝灰岩粘板岩砂岩石灰岩角岩アヂノール板岩
上部 砂岩粘板岩稀に硅岩を含む

下部は主として日高方面に發達し、上部は主として十勝方面に發達し、其の他幌別川の支流シユマン及びメナシユンベツの上流に露出す。

以上古生層の花崗岩に接する處に於ては、接觸變質を受け、雲母粘板岩雲母砂岩ホルンフェルス雲母剝岩角閃岩等に變質せり。而して其の最も花崗岩に接近せる部分には雲母剝岩及び角閃岩類發達し、之れに次でホルンフェルス雲母砂岩及び角閃岩類發達し、最も遠き處に雲母粘板岩雲母砂岩の類發達す。此等變質岩相互の關係は音調津海岸地方コイカクシユビロ川上流及びサロルンウシ川筋に於て能く之れを目撃するを得べし。

北見國枝幸地方の古生層は福地學士に従へば本州秩父古生層の中部に相當し、之を下部より列擧すれば次の如し。

- 一、輝綠凝灰岩石灰岩砂岩粘板岩及び硅岩

- 二、粘板岩の少々の砂岩を含むもの
- 三、砂岩及び粘板岩
- 四、輝綠凝灰岩及び硅岩
- 五、砂岩及び粘板岩

四 中生大統

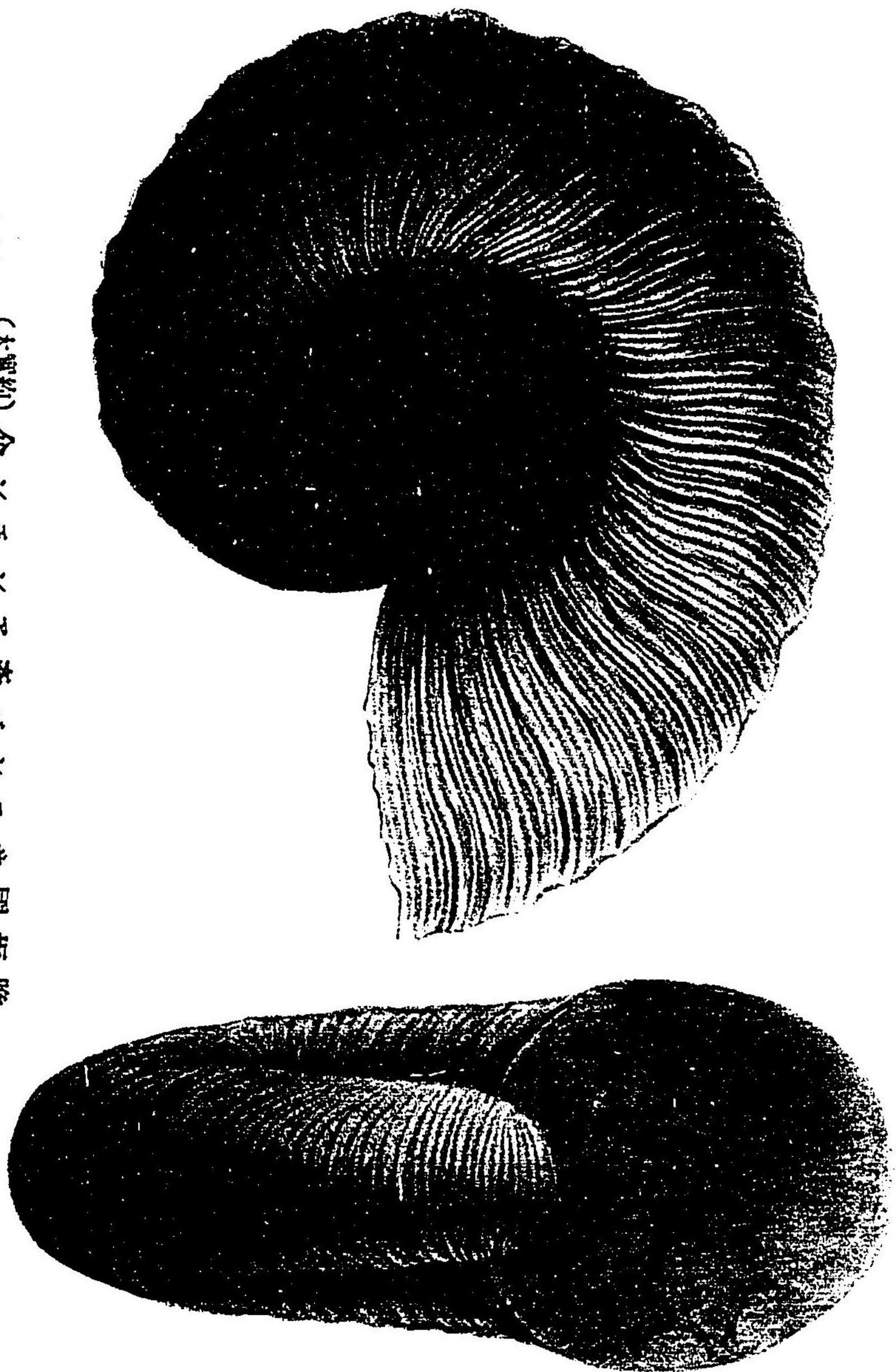
中生大統
白堊系

白堊系 北海道の白堊系は蝦夷山系の西側に限りて發達し、北は北見國宗谷岬に起り斷續して南は日高國浦河地方に至りて盡く。其の他の地方に於ては根室の近傍と色丹島に小露出を成すに過ぎず。之れを構成する岩石は主として黝色綠黝色暗綠色又は淡色の砂岩及び黒黝色泥板岩にして、砂岩の一部は時としては礫岩質を帶び、遂に礫岩に移化することあり。其他黝色の凝灰岩あり。皆純粹の海成層に屬し、頭足類腹足類及び葉鰓類の美麗なる化石も産し、其の多くは泥板岩中の泥灰質結核中に埋藏せらる。白堊系の化石を産する處必ずしも稀なりと云ふべからざるも、其の保存の良好なる點に於て、

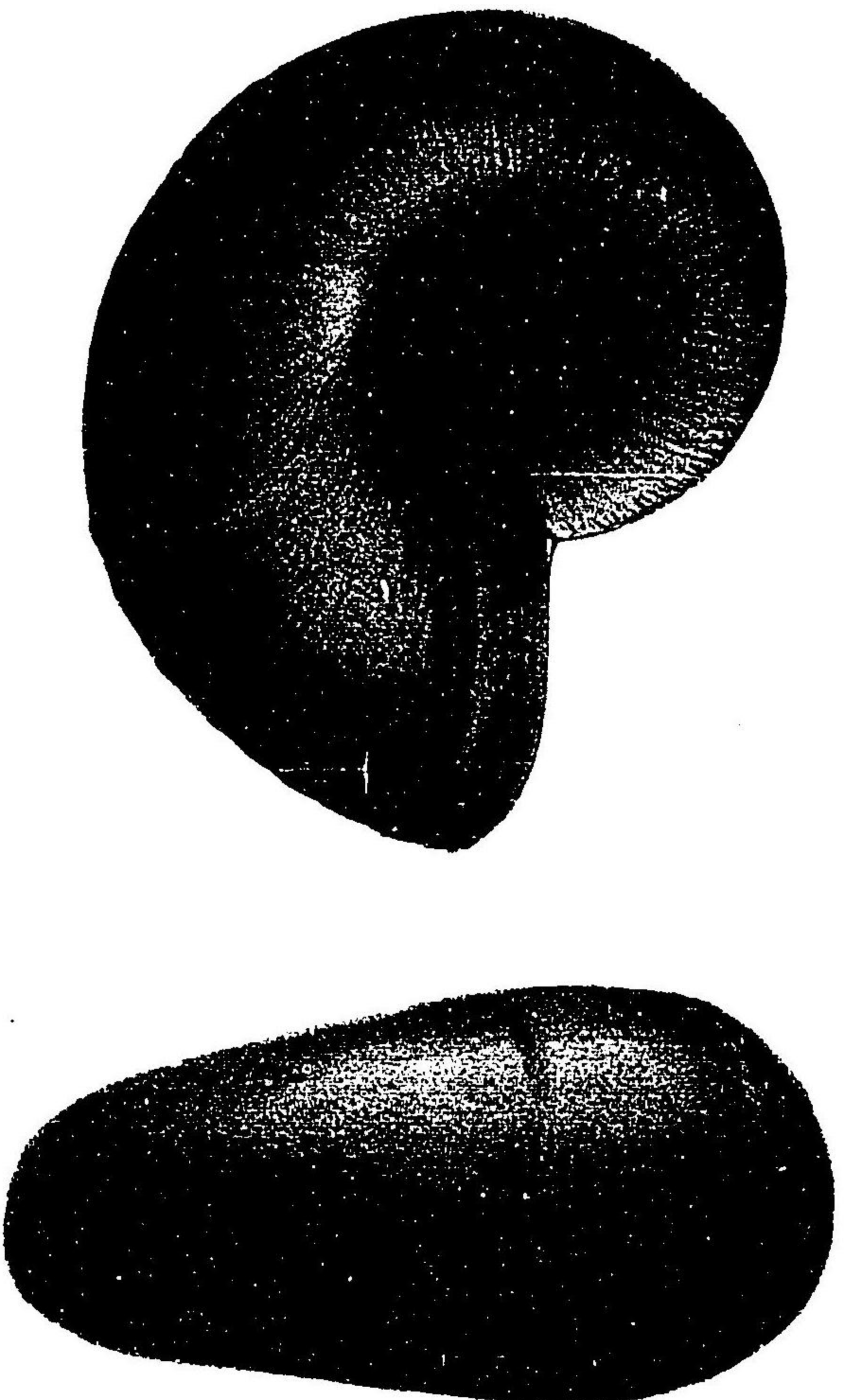
又其の種類の豊富なる點に於て未だ曾て北海道に如くものはなし。實に西曆紀元千八百七十七年ライマン Benjamin Smith Lyman が始めて北海道に白堊紀の化石を産することを發表せしより、今日に至るまで發見する所の化石の數已に七十餘種に達せり。

北海道本島に發達せる白堊系は古生層の上に横はり、夾炭層を以て被覆せられ、走向は略蝦夷山系の方向と同じく南北なるも攪亂せる所少からず。而して古生層とは其の岩石の性質著く異なり且つ層位上不整合に之れを被覆し容易に之れを區別するを得るも、第三紀層とは岩質上著しき差異なく、且つ其の不整合線を認知すること概ね困難にして、天鹽川・幾春別・オビラシベツトムベツ浦河等に於ては多少不整合を認め得べきが如きも、夕張炭田に於ては白堊層は石炭を夾む中新統によりて整合的に被覆せらるゝなり。

北海道の白堊系の詳細なる地質年代に就ては従來種々の説ありて一致せず。横山理學博士は此の産出せる化石を調査し、凡ての化石が同一の地層より出づるに就ては大に疑ふべき餘地あるものと做し、且つ其の大部は南印度のウ

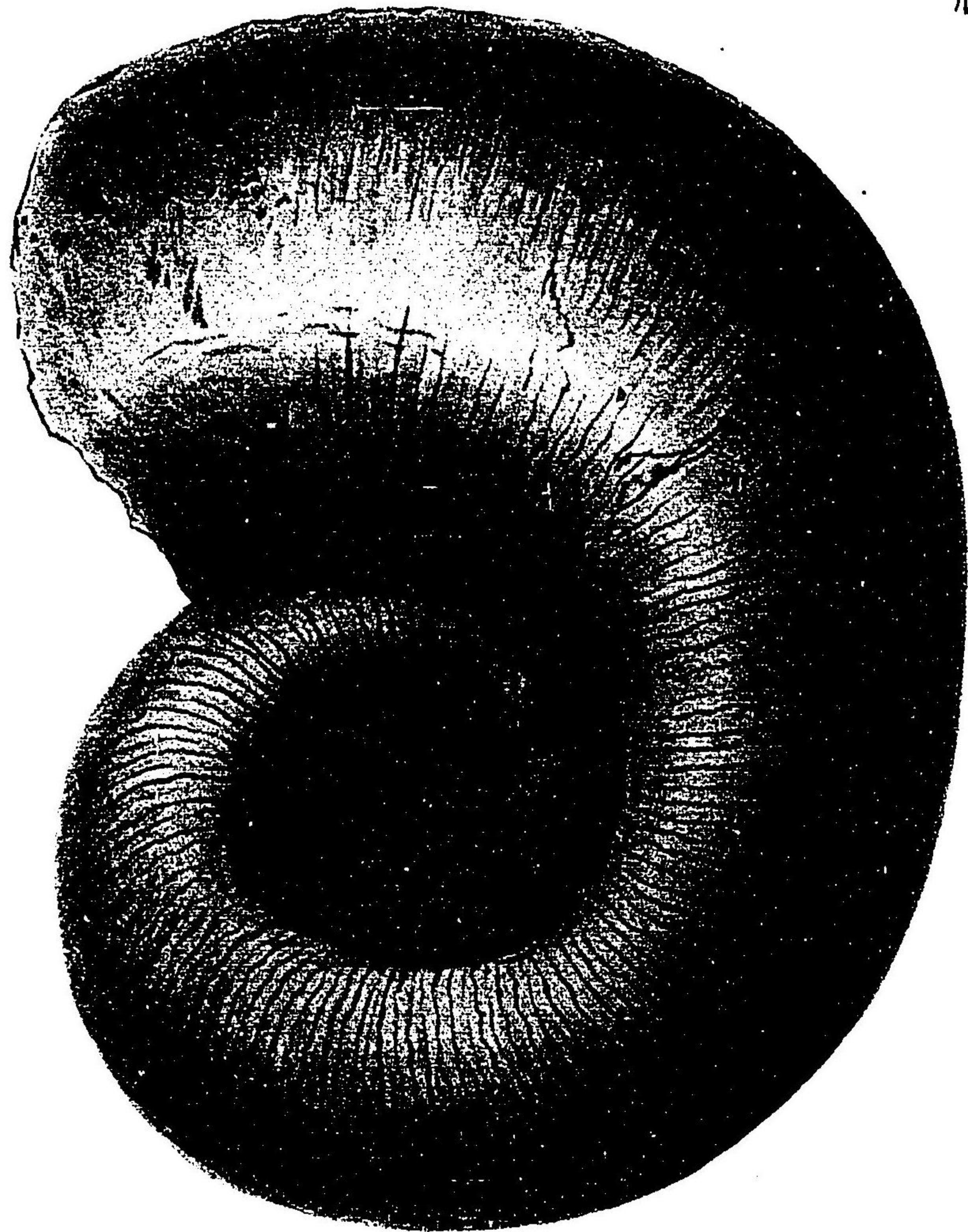


(大體約) 介ノモソア産ベシヌサ國振膽
Gaudryceus tenuilittatum Yabe var. intermedia



(大M) 介シモソア産畔河張夕國狩石
Tetragonitis sphaeronotus Jimbō.

77



(三ノ分四約ノ大實) 介ンモンア産川ツベホ國狩石

Lytoceras ezöense Yabe.

イターツール Ueber 統のものに相當し、從て歐羅巴のセノマンゴールトに相當するものと做し、之に反して神保理學博士は北海道白堊系の化石は凡て中部白堊系に屬する同一の地層より産するものなることを云へり。ラバランド de Laparent、コーケン Ernst Koken、及びユスマート Franz Kossmat の如き歐洲の學者は化石の調査上北海道の白堊系には歐洲の上部白堊系の細別に相當すべき種々の層位存在すべきことを信じ、之れに反してベーム、Bohm、及びミケエル R. Michael 氏はセノニアン統特有の化石を産することを云ひ、ルドルフツーパー Rudolf Zuber は北海道及び樺太の白堊系よりは下部白堊系固有のアンモン介を出だす由を云へり。矢部理學士は特に北海道産の頭足類化石を研究し、其の白堊系を次の如く細別せり。

第一、下部アンモン介層、オルビトリナ石灰岩を介在す。

第二、三角介砂岩

甲、下部アカンソセラス帶或はトリゴニア、ロンギロバ帶 Lower

Acanthoceras-Zone or Trigonin longiloba-zone,

乙、テチヌ帯 *Thetis zone.*

丙、ベクツンクルヌ帯 *Pectunculus-zone.*

第三、上部アンモン介層

甲、上部アカンセンセラヌ帯 *Upper Acanthoceras-zone.*

乙、スカンキテヌ帯 *Scaphites-beds*

丙、パキデヌクス帯 *Pachydiscus-beds*

神保理學博士の識別せる化石は次の如し、

アンモン介類 *Ammonoidea.*

Placentoceras subtilistriatum Jimbō.

Desmoceras Danesi Jimbō.

Desm. Planulatifforme Jimbō.

Desm. Ishikawai Jimbō.

Desm. yubarensis Jimbō.

Desm. Kawanoi Jimbō.

Pachydiscus Denisonianus Stoliczka sp.

Pach. Haradai Jimbō.

Pach. teshionensis Jimbō.

Pach. subtililobatus Jimbō.

Pach. Yokoyamai Jimbō.

Pach. aff. Sutneri Yok.

Acanthoceras rotomagense Defrance var. n. asiatica.

Acan. pseudokleveriam Jimbō.

Acan. sp.

Holcodiscus Katoji Jimbō.

Oleostephanus sp.

Oleo. glabrum Jimbō.

Lycoceras sphaeronotum Jimbō.

Lyc. crossum Jimbō.

- Lyto. striatum* Jimbō,
- Lyto. orassicosotatum* Jimbō,
- Lyto. deuseplicatum* Jimbō,
- Lyto. sp. α.*
- Lyto. sp. β.*
- Lyto. γ.*
- Scaphites Yokoyamai* Jimbō.
- Scap. puerulus* Jimbō.
- Scap. cf. aequalis* Sowerby.
- Crioceras spinigerum* Jimbō.
- Crio. sp.*
- Hamites obstrictus* Jimbō.
- Ham. quadrinodosus* Jimbō.
- Ham. cf. rugatum* Forbes.

- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Ham. sp.*
- Turritites* sp.
- Baculites* sp.
- 掘足類 *Scaphopoda.*
- Dentalium* sp.
- 腹足類 *Gastropoda.*

- Heleion cf. giganteus Fr. Schmidt.
- Margarita funiculata Yok.
- Natica sp.
- Turritella sp.
- 縹鱗類 Lamellibranchiata
- Trigonia longiloba Jimbō.
- Trig. subovalis Jimbō.
- Inocerannus angulosus Jimbō.
- Inoc. incertus Jimbō.
- Inoc. digitatus Sowerby.
- Inoc. aff. lobatus Münster.
- Inoc. sp.
- Inoc. sp.
- Cyrena sp.

- Ostrea sp.
- Exogyra sp.
- Pectunculus sp.
- Solen sp.
- Siliqua sp.
- Nucula picturata Yok.
- 腕足類 Brachiopoda
- Rhynchonella sp.
- 甲殼類 Crustacea
- Eucyrtus japonicus Jimbō.
- 海膽類 Echinoidea
- Amnelytinsium sp.
- 海百合類 Crinoidea
- Pentacrinus.

蠕形類 Vermes

Serpula sp.

珊瑚類 Anthozoa

Caryophyllia arcotensis Stoliczka.

横山理學博士の識別せる化石は左の如し。

Peecten sp.

Pec. cf. garudanus Stoliczka

Inoceramus Naumannii Yok.

Inoc. sp.

Ctenolaea cf. sachalinensis Schm.

Lucina cf. fallax Forbes.

Capulus cassidarius Yok.

Phylloceras Valledae Mich.

Phyl. ezoense Yok.

Phyl. sp.

Lytoceras Saeya Forbes,

Lyto. sp.

Lyto. sp.

Psychoceras pseudo-gaultianum Yok.

Anisoceras subquadratum Yok.

Ani. Haradanaum Yok.

Ani. subundatum Yok.

Ani. cf. rugatum Forbes.

Ani. sp. (aff. A. indianum Forbes.)

Desmoeceras Gardeni Bailly.

Des. Gaudana Forbes.

Des. Sugata Forbes.

Des. sp.

Pachydiscus arrialoorensis Stol.
Pach. Naumannii Yok.
Pach. Sutheri Yok.

矢部理學士の識別せる頭足類は次の如し。

Gaudryceras tenuiliratum (*Lytoceras Saeya* Yok, *Lytoceras Saeya Jimbō*)
Gaud. tenuiliratum var. ornata Yabe.
Gaud. tenuiliratum var. infrequens.
Gaud. crassicoelatum Jimbō. (*Lytoceras crassicoelatum Jimbō*)
Gaud. denseplicatum Jimbō (*Lytoceras denseplicatum Jimbō*)
Gaud. striatum Jimbō (*Lytoceras striatum Jimbō*)
Gaud. striatum var. picta Yabe.
Gaud. limatum Yabe.
Gaud. Yokoyamae Yabe.
Gaud. Yamashitai Yabe.

Gaud. sp.
Gaud. Kawanoi Jimbō (*Desmocerans Kawanoi Jimbō*)
Tetragonites glabrus Jimbō (*Lytoceras glabrum Jimbō*)
Tetra. sphaeronotum Jimbō (*Lytoceras sphaeronotum Jimbō*)
Tetra. erissus Jimbō (*Lytoceras erissum Jimbō*)
Tetra. popetensis Yabe.
Tetra. cf. epigonus Kossmat.

根室國ボンコタンケンに露出する白堊系は凝灰質泥板岩より成り、イノセラムス、デギタツス *Inoceramus digitatus* を埋藏す。東面に緩斜し、富士岩質集塊岩を伴ふ。同様の岩石は又色丹島ノトロ灣の北岸に露出し、亦集塊岩を伴ひ第三紀層により整合的に被覆せられ、イノセラムス、ナウマンニ *Inoceramus Naumanni* を含む。

膽振國鶴川の支流穂別流域に廣く布行する中生層は、小林理學士に據れば次の如く細別するを得べし。

- 一 上部、泥板岩層
- 二 中部、厚き砂岩及び薄き泥板岩の互層
- 三 下部、泥板岩砂岩の互層

上部泥板岩層は主として黑色柔軟の泥板岩より成り、稀に砂岩を介在し、中穂別地方に露出す。本岩中には圓形扁平狀扁桃狀等の大小種々の泥灰岩塊を含有し、其の内にアンモン介又は植物化石を含有す。本層は頗る化石に富み、小林理學士は次の化石を採集せり。

頭足類

- Acanthoceras* sp.
- Desmoceras* aff. *sanicostatum*.
- Deplomoceras cylindraceum* (?)
- Desmoceras* sp. (多)
- Gaudryceris tenuifratum* Yabe.
- Gaudryceris* sp.

- Hannites yuhariensis* Yabe (?)
 - Helicoceras venustum*.
 - Hannites* sp. (多)
 - Lytoceras* sp. (多)
 - Puzosia* cf. *planulataeforme* Jimbu.
 - Phylloceras* cf. *Velledae* Michelin.
 - Pachydiscus Naumannii* (?)
 - Puzosia* sp.
 - Pachydiscus* sp. (多)
 - Tetragonites sphaerontium*.
 - Turrillites* sp.
- 腹足類
- Helcion giganteus*.
- 葉鰓類

Inoceramus sp.....(多)
Nucula picturata (?)

此外海膽類、雙子葉植物化石等あり。

日高國厚別川の上流ウエンテシカンエ附近に露出する中生層は伊木學士に據れば、主として黑色泥板岩より成り、往々にして細粒質砂岩の薄層を介在し、又泥灰岩の團塊を含有す。ウエンテシカンエ川口の上流に於て一の不完全なるアンモン介を發見せり。層向はウエンテシカンエ以西は東北東にして約四十度を以て北方に傾斜するも、以東は北々西に走り、西方又は東方に傾斜せり。

中生層は又門別川上流の一支流なるチベシナイより、波惠川の支流ペンケヤラ及びバンケヤラに亘り、第三紀層中に狹帯を成して露出す。主として黑色泥板岩より成り、往々にして細粒質砂岩帶、青白色凝灰岩の薄層を介在し、其の他チベシナイには礫岩を夾有せり。伊木理學士の本地方より採集せる化石は次の如し。

(一)チベシナイ産

Tetragonites sp.

Gaudryceras tenuiliratum Yabe.

Phylloceras sp.

Hemites sp. a.

Hemites sp. b.

Inoceramus sp.

(二)波惠川支流ペンケヤラ産

Desmoceras Danesi Jimbō.

Gaudryceras tenuiliratum Yabe.

Phylloceras sp.

(三)波惠川支流バンケヤラ産

Gaudryceras tenuiliratum Yabe.

Desmoceras Danesi Jimbō

- Hamites sp. a.
- Hamites sp. c.
- Hamites sp. d.
- Inoceramus sp.
- Cucullaea sp. (?)

本地層はチベシナイに於ては北北東乃至北北西の層向を有し、西方に傾斜するも、門別川筋に於ては一條の斷層ありて、其れより以東は東方に傾斜し、而して南方波惠川流域に至れば、地層は北北西に走り、六十度以上の角度を以て東方に急斜す。

日高國浦河地方はアンモン介を出だすを以て古來より有名なる處にして、蓋し北海道中生層の世に紹介せられたるは此の地方を以て嚆矢とす。アンモン介は多く井寒臺地方の岩崖及び浦河町の海岸に露出せる泥板岩中の泥灰岩團塊中に埋藏せられ、俗に之れを南瓜石と稱し、人口に喰炙す。伊木理學士は岩質上より本地方の中生層を分ちて次の二帶とせり。

- 一、砂岩泥板岩帶
- 二、泥板岩帶

泥板岩帶は主として黑色の稍堅硬なる泥板岩より構成せられ、浦河町の西端に於て帶綠灰色の凝灰質砂岩、向別川河口の西邊に於て粗粒質砂岩の厚層を介在する外、稀に細砂岩の薄層を挟み、縞狀を呈することあり。其の他アンモン介及びイノセラムス等の化石を埋藏する拳大より徑二三尺の泥灰岩の團塊を含有することは他地方に於けると同じ。砂岩泥板岩帶の下部に位し、元浦川野深附近より、浦河町附近に亘り發達す。伊木理學士の本帶中より採集せる化石は次の如し。

- | | |
|---|-------------|
| 化石名 | 產地 |
| <i>Paedylisus</i> sp. a. | 井寒臺 |
| <i>Paedylisus</i> sp. b. | 向別川河口より數町上流 |
| <i>Paedylisus</i> sp. c. | 浦河町 |
| <i>Dumoceras</i> (<i>Farleri</i>) <i>Bailey</i> . | 井寒臺 |

Desmocerans Gaudama Forbes. 井寒臺

Dsmocerans sp.

Phyllocerans sp.

Lytoceras sp.

Hannites sp. a.

Hannites sp. b.

Hannites sp. c.

Inoceramus sp.

砂岩泥板岩帯は主として砂岩及び泥板岩の互層より成り、時に礫岩を挟み、元浦川支流ベッチャロには石炭を挿入せり。ベッチャロ附近より向別川上流に亘り、古生層に接して露出す。未だ化石を發見せず。

泥板岩帯はエブイ河口に於ては東北の層向を有し、北西に三十二度傾斜し、中流に至れば層向變じて東西となり、三十八度北に斜下し、向別川及び浦河町に於ては北西に走り、約四十度の角度を以て東北に傾斜す。砂岩泥板岩帯

は北北西——南南東乃至南北に走り、多くは五十度乃至七十五度の角度を以て東方に傾斜するも、元浦川中流の一支流ナイ附近に於ては一向斜を形成せり。

石狩國空知川の支流ヤマエ及びトナシベツ流域に露出する中生層は、山根理學士に據れば上下二部に分つことを得べく、下部は主として稍厚き砂岩泥板岩の互層より成り、之れに凝灰岩角岩並に泥灰岩を交へ、屢石炭の薄層を挟めり、上部は殆ど全部泥板岩より成り、時に細粒砂岩の薄層及び泥灰岩を介在す。層向は南北若くは北十度乃至二十度東にして、稀に北十度西を示すことあり。而してキンクシヤエ川及びクマノサツ等に於ては西方に六十度乃至七十度斜下し、ヤマエ川上流及び其の支流に於ては東方に六十度内外傾斜し、略々南北に走れる一向斜を形成せり。

日高國沙流川の中流荷負村及び長知内村附近、并に上流ウサツプよりチロロ川中流に至る間に發達する中生層は、凡て泥板岩及び砂岩の互層より成るも、岡村理學士は岩質上及び化石上之れを上下二部に分てり。下部層は主と